

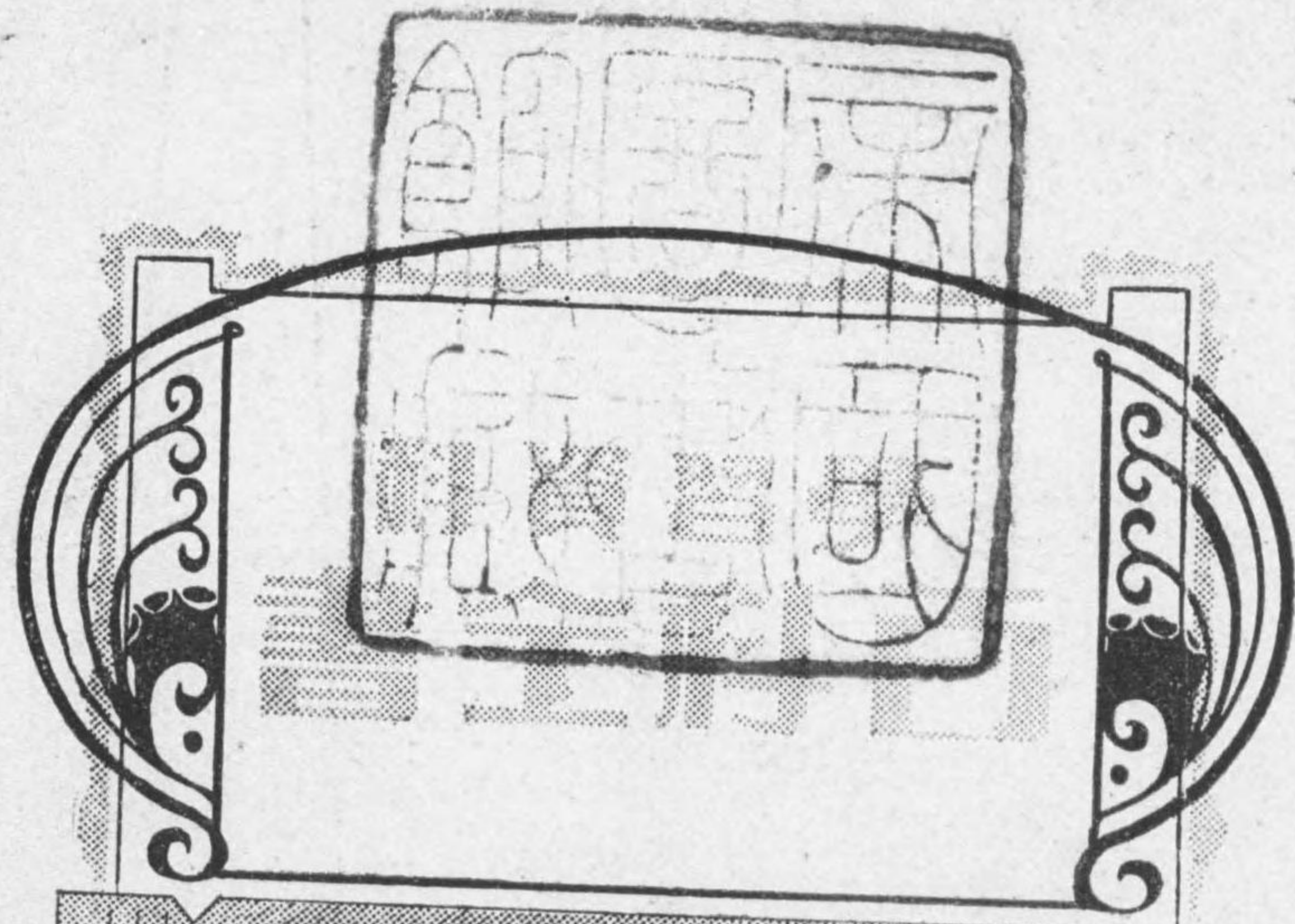
539
70

著 郎 三 伊 戸 神
學 物 動 の 童 兒

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

始





著 郎 三 伊 戶 神

學 物 動 の 童 兒

京 東 阪 大
社 合 資 合 式 株 書 図 洋 東

天 正

14. 10. 6

内 交

學習 百科全書一の發刊について

□ 自學自習は修學の根本方針であります。自ら進んで學習し、自力で伸びて行くやうに努めることは、眞に實力を得るの道であります。

□ 自分で學習し自力で伸びようとする場合に、是非ともなければならぬものは、見易く、読み易く、取扱ひ易くして而かも信用し得る参考書であります。この趣旨から歐米の先進國に於ては、現に兒童用の百科辭書が盛んに用ひられてゐます。然るに我が日本に於ては、此の種の信用ある恰好な参考書が甚だ少う御座います。これ私の日頃遺憾に思つてゐたところであります。

□ 兒童文獻に盡したいといふことは、弊社創立當初からの願でありました。今や我が

社も諸般の準備が整ひましたので、ここに親しく児童生徒を御教へになつた経験あり而かも夫々専門の學術に優れてゐられる先生方に御願ひして、この『學習資料百科全書』を發刊することにいたしました。一冊又一冊を加へて遂に百冊にする豫定であります。

『學習資料百科全書』は特に児童生徒諸君のために拵へたといふ點から、別の名を『児童百科全書』というてもよいと思ひます。そして文字、文章、書振りなどは、児童生徒諸君に分り易いやうにしましたが、中味の事柄は大人にも尙むつかしい程のごも載せてあります。この點から『通俗百科全書』又は『簡易百科全書』と呼んでもよいと思ひます。

自分で學習し自分で伸びようとする末頼もしい児童諸君、更に同じ主義で進む中學

生、女學生諸君、學校といはず家庭といはず、諸君の勉學にはこの百科全書を無くてはならぬ御友達として載きたい。同時に又學習主義を信する諸君は、學校を終つて實業に従事される場合にも、妻となつて嫁ぎ行かれる場合にも、常に本書を携へて永く自分で學習し、自分で伸びることに努められたい。尙ほ世の父兄及び教師の方々にはこの趣意を御諒解の上、是非一應本書に目を通されて子弟教育の資料とせられることを御願ひする次第であります。

大正十四年二月一日

東洋圖書株式合資會社

社長 永田 與三郎

序

先づ兒童の父兄及び教師の方々に一言いたします。

獸類は子供のお友達です。獸の繪を嬉ばない子供はありません。少年少女たちが動物園に入ると、彼等は時のたつのを忘れてしまひます。優しい犬の話は少女たちをホロリとさせます。勇ましい猛獸狩の話は少年諸君の血を湧かせます。獸の生活は實に吾々人類の生活そのまゝの感と與へるからです。

お伽話のやうな獸類生活、童話のやうな動物の世界、たとひそれは誌上の動物園ではあるが、子供を誘うて、暫しなりともこの自然な動物の世界に遊ばせて見たいのです。單に理科のためのみではなく、この意味に於ける子供の師友となるやうに、本書を子供に使用させていたゞきたいのです。これが私の本書編纂の眼

目です。

次に少年少女たちに一言いたします。

獸類の生活は多種多様です。地上を走るのが彼等の本性ではあるが、生活の様は彼等の体の構造を變化させました。木に登り、空中を飛び、水を遊ぎ、水中を潜り、攻撃・防禦・眠食・生長、あらゆる珍奇なる生活現象が、すべて獸類の生活に見ることが出来ます。單に利用厚生之眼ばかりで獸類をながめるのではありません。これ等の生活現象を考へて見ることは一つの樂みです。また人間を作る上に何かの暗示を與へてくれます。私が『兒童の動物學』の初編として、獸類の生活を書いたのもこのためです。

少年少女諸君が、獸類の生活について

- (一) 獨力で研究した結果が果して正しいかどうか、
- (二) 自分のとらへた問題が適當であつたかどうか、
- (三) 自分の研究した仕方が上手であつたかどうか、

が、この本によつて質されます。またこの本を讀んでゐる中に、少年少女諸君がこれまでには氣づかなかつたやうな、

(四) 新しい研究問題に思ひあたり、

更に又、普通にある獸を見たゞけでは、容易にわからないやうな、

(五) 獸類生活の豊富なる知識が得られます。

この五ヶ條を目標として本書を編纂したことは、さきの『兒童の昆虫學』と同様です。

この本は、誰にも讀み易いやうに書いてはありますが、その書いてある事柄は

序

女學校や中學校などで學ぶ事柄よりも、もつと廣く深く材料を取つてゐます。故に少年少女にばかりでなく、凡そ動物を研究する方には、誰にでも参考になると思ひます。獸類の實際生活の觀察と相俟つて、この本を讀めば必ず動物學の實力がつきます。特に動物園の觀覽にこの本を携へて行けば、尙ほ一層この本の使命を發揮させることが出来ます。

大正十四年九月十三日

著 者

學習資料 百科全書 兒童の動物學獸類篇 目次

第一章 食肉性の獸類 (食肉類)

第一節 猛獸と猫の類

- (一) 獸王・ライオン
- (二) 毛皮の美しい虎
- (三) 豹とジャグア
- (四) 猫には猛獸の相がある
- (五) 飼猫の本性
- (六) 山猫と猫の祖先
- (七) 虎猫と三毛猫

第二節 狼と犬の類

- (一) 原始時代の人類生活
- (二) 犬は家畜のはじめ
- (三) 犬の種類
- (四) 犬の祖先と豺狼
- (五) ジャツカル
- (六) 狐と狸と猪

目次

一

第三節 熊と熊の類 四七

- (一) 熊とひぐま
- (二) 白熊
- (三) あなぐま
- (四) あらひぐま

第四節 いたちといたちの類 五六

- (一) いたち
- (二) 臭いスカンク
- (三) 蛇を食ふマングース
- (四) てんとかはをそ
- (五) 毛皮の尊いらつこ

第五節 おつとせいと海獣類 六七

- (一) おつとせい
- (二) あしか
- (三) あざらし
- (四) せらうち

第二章 猿猴類

第一節 普通の猿と擬猿類 七三

- (一) 日本産のさる
- (二) をながさる
- (三) ひひ
- (四) てんぐさる
- (五) をまささる
- (六) くもさる
- (七) ほえさる
- (八) きぬさる
- (九) ししをさる
- (一〇) 擬猿類
- ねきさる
- きつねさる・ゆびさる

第二節 高等なる猿類 八三

- (一) 高等なる猿類とは
- (二) てながさる
- (三) しゃうじやう
- (四) くるしやうじやう
- (五) ゴリラ
- (六) ゴリラ狩の話

第三章 有蹄の家畜類

第一節 馬とその一族 九五

- (一) 馬の手柄
- (二) 馬の特性
- (三) 野生より家畜へ
- (四) 馬の種類
- (五) うさぎうま
- (六) らば
- (七) しまうま

第二節 牛及び牛の類 一一〇

- (一) 勇ましい野牛狩 (二) 畜牛の種類 (三) 牛の用途 (四) 牛の体格検査
- (五) いろいろな牛

第三節 羊と山羊 一二二

- (一) 羊の毛 (二) 臆病な羊 (三) 勇敢なる山羊

第四節 駱駝とその近似の獸類 一二七

- (一) 沙漠の船・らくだ (二) 感のはやいアルパカ

第五節 豚と猪 一三三

- (一) 清潔家の豚 (二) 聲だけは役に立たない (三) 肉のうまいものしし (四) 有蹄類の分類

第四章 有蹄の野獸類

第一節 鹿とその近似の獸類 一四一

- (一) 鹿の角と鹿 (二) かもしか (三) 寒地の家畜となかない (四) よい香を出すじやかうじか
- (五) 目出度いきりん

第二節 河馬と犀と獏 一五一

- (一) 口の大きい河馬 (二) 河馬狩の話 (三) 一本角のさい (四) 夢を食ふといふばく

第三節 象と長鼻類 一六一

- (一) 象の馴し方 (二) 象の特性 (三) 印度象とアフリカ象 (四) 巨大なるマンモス

第五章 鯨の類

第一節 鯨のからだ 一七三

- (一) 鯨と魚類との相違
- (二) せみくぢら
- (三) 鯨鬚の正体
- (四) 鯨類の二大別

第二節 鬚鯨類と齒鯨類 一八二

- (一) 鬚鯨の種類
- (二) 齒鯨の種類

第六章 弱蟲揃の齧齒類

第一節 鼠の類 一九〇

- (一) 油断のならぬ鼠の害
- (二) 鼠の智慧と体の組立
- (三) 鼠算といふ蕃殖
- (四) 鼠の種類

第二節 鼠と栗鼠の仲間 一九八

- (一) 移住鼠のレミング
- (二) 可愛いしまねずみ
- (三) 木登り上手のりす
- (四) 飛ぶ獸・むささび
- (五) 鳥の巢にも住むももんが

第三節 兎及び齧齒類 二〇四

- (一) 敵の多いのうさぎ
- (二) 蕃殖の速いかひうさぎ
- (三) 毛色のかはるしろうさぎ
- (四) 耳の短いあまみうさぎ
- (五) 齧齒類とは
- (六) 實驗用のモルモット

第四節 豪猪と海狸 二〇九

- (一) 針の生えてゐるやまあらし
- (二) 堰止め上手なうみたぬき

第七章 食蟲類と翼手類

第一節 もぐらの仲間(食蟲類) 二二五

- (一)もぐら
- (二)ぢねずみ
- (三)はりねずみ

第二節 かうもりの類(翼手類) 二二九

- (一)獸類の適應
- (二)鳥の仲間と思はれたかうもり
- (三)かうもりの種類

第八章 下等の獸類と哺乳類

第一節 せんざんかふと貧齒類 二二五

- (一)せんざんかふ
- (二)よろひねずみ
- (三)ありくひ
- (四)なまけもの

第二節 カンガルーと有袋類 二二九

- (一)カンガルー
- (二)こもりねずみ

第三節 かものはしと單孔類 二三二

- (一)かものはし
- (二)はりもぐら

第四節 哺乳類總覽 二三五

- (一)哺乳類の分類
- (二)哺乳類の分布

目次終

兒童の動物學獸類篇索引

ア

アイアイ	八二
あかぐま	五三
あざらし	七〇
あざらしの骨格	一七七
あしか	六九
あなぐま	五四
アフリカ象	一六九
あまみうさぎ	二〇七
アメリカ虎	一二
アメリカらくだ	一三三

索引

ア

あらひぐま	五五
アラビヤ馬	一〇三
ありくひ	二二六
アルパカ	一三一
アルマジロ	二二六
有袋類	二二九
有蹄類	一四〇
一角	一八九
犬	三三三
犬の祖先	四二

イ

いるか.....一八六

いわしくぢら.....一八三

印度象.....一六九

うさぎ.....二〇四

牛.....一一〇

牛の用途.....一一五

牛の胃.....一二〇

ウニコール.....一八九

馬.....九五

馬の足.....九九

馬の骨格.....九八

馬の歯.....九七

うみたぬき.....二一〇

エスキモー犬.....三六

おつとせい.....六七

おほありくひ.....二二八

狼.....四〇

おほカンガル.....二二九

オランウータン.....八五

海牛.....一八八

かうもり.....二二一

カシミヤ.....一二七

かば.....一五一

河馬の口.....一五二

かはをそ.....六四

かひうさぎ.....二〇五

カ

かもしか.....一四五

かものはし.....二三二

かやねずみ.....一九八

ガワ.....一二一

カンガル.....二二九

きくがしら.....二二三

擬猴類.....八〇

鱈足類.....六八

狐.....四五

きつねざる.....八二

奇蹄類.....一四〇

きぬざる.....七九

きねずみ.....二〇一

キ

きりりん.....一四八

偶蹄類.....一四〇

鯨.....一七三

鯨の骨格.....一七六

鯨の鬚.....一七八

熊.....四七

くまねずみ.....一九八

熊の足.....四九

くもざる.....七八

クライデステール.....一〇四

グレーハウンド犬.....三六

くろくま.....五一

くろしやうじやう.....八六

ク	廣鼻類	七八
ケ	警戒色	六〇
	結界	八一
	齧齒類	二〇七
	蹠	一〇八
	狹鼻類	七八
	原始の生活	二八
コ	こくぢら	一八四
	ごとうくぢら	一八六
	こぶうし	一一一
	こもりねずみ	二三二
	ゴリラ	八七
	ゴリラの骨格	九〇

コ	コンカン	八一
サ	さ い	一五七
	象	一六一
	さかまた	一八七
	雑食動物	四八
	ざとうくぢら	一八三
	さる	七三
シ	ジェルシー	一一五
	鹿	一四一
	獅子	二
	ししをざる	八五
	しまうま	一〇九
	しまねずみ	二〇〇

シ

シ	しまりす	二〇一
	しやうじやう	八五
	じやかうじか	一四七
	じやかうねずみ	二一八
	ジャグア	一一二
	しやち	一八七
	ジャツカル	四二
	じゆこん	一八七
	シヨートホーン	一一五
	食虫類	二一五
	食肉類	六八
	ジラフ	一四八
	しろうさぎ	二〇六

シ

シ	白熊	五三
ス	スカンク	五八
	すなめり	一八七
セ	水牛	一一二
	ゼブラ	一〇九
	せみくじら	一七七
	せるうち	七一
	せんざんかふ	二二五
タ	タイガー	一〇
	狸	四五
	たねずみ	一九八
	単孔類	二三五
チ	ぢねずみ	二一七

チ	チャイマ	七七
	チンパンジー	八六
ツ	月の輪熊	五一
	つちくぢら	一八五
テ	てながざる	八四
	てん	六三
	てんぐざる	七七
ト	とど	六九
	となかい	一四六
	とら	七
	とら	二六
	とら	九
	とら	一四

ト	とらふねずみ	二〇一
ナ	ながすくぢら	一八二
	なまけもの	二二九
ニ	肉食動物	一
	日本牛	一一五
	日本馬	一〇四
	日本熊	五一
ネ	ねこ	一三
	ねこざる	八一
	猫の足	一五
	猫の祖先	二四
	猫の歯	一五
	猫の鬚	一九

ネ

ネ	猫のひとみ	一八
	猫の目	一七
	鼠	一九〇
	鼠の頭	一九四
	ねずみざる	七九
ノ	のうさぎ	二〇四
	野牛	一一一
	のねずみ	一九八
	のぶすま	二〇四
ハ	ハイエナ	四二
	バイソン	一一一
	パークシャー	一三四
ば	く	一六〇

ハ

ハ	歯	一八五
	はたけねずみ	一九八
	はつかねずみ	一九八
	バッファロー	一一一
	バブーン	七七
	はりねずみ	二一九
	はりもぐら	二三五
	反芻類	一四〇
	バンテング	一一一
ヒ	ピーコック	一〇
	ビーバー	一一〇
	ひぐま	五〇
	鬚	一八二
	鯨	一八二

ヒ 羊ひつじ.....一三三
 ひ ひ.....七六
 ひみねずみ.....二一八
 貧齒類ひんしゆるい.....二二五
 フ ふくろいたち.....二三一
 ふくろたぬき.....二三一
 ふくろむささび.....二三一
 ふくろりす.....二三一
 豚ぶた.....二三三
 ふたごぶらくだ.....一三〇
 不反芻類ふはんじゆるい.....一四〇
 ブラウンスイス.....一一五
 ブルドック.....三六

へ 豹ひょう.....一一
 ペルシユロン.....一〇四
 ベルナード犬ベルナードいぬ.....三六
 ボインター犬ボインターいぬ.....三六
 ほえざる.....七九
 保護色ほごしき.....六
 ホルスタイン.....一五
 マ 猛獸の三傑まうじゆのさんけつ.....一三
 マ キ.....八二
 まだらうま.....一〇九
 まつかうくぢら.....一八五
 馬來熊まらいぐま.....五三
 マンゲース.....六一

マ マンドリル.....七七
 マンモス.....一七一
 ミ 三毛猫みけねこ.....二七
 ム むささび.....二〇三
 メ メリノ.....一二三
 モ もぐら.....二二五
 ももんが.....二〇四
 モルモット.....二〇八
 モンキー.....一〇
 ヤ ヤーク.....一二一
 ヤ 山羊やまやぎ.....一二六
 野獸の害やじゆのがい.....三〇
 やまあらし.....二〇九

ヤ やまいぬ.....三九
 やまかうもり.....二三三
 ヤ 山猫やまねこ.....二四
 ユ ゆびざる.....八二
 ヨ ヨークシャー.....一三四
 翼手類よくしゆるい.....二二〇
 夜猿よるまゐ.....八一
 よろひねずみ.....二二六
 ラ ライオン.....二
 雷獸らいじゆ.....六三
 らくだ.....一二七
 らくだの胃らくだのい.....一二九
 らつこ.....六五

索引

ラ	らつこの毛皮	六五
	らば	一〇七
	ラマ	一三三
リ	りす	二〇一
レ	レオパード	一〇
	裂足類	六八
	レミング	一九八
	レムウル	八二
ロ	ろば	一〇四
	ロリス	八一
井	るのしし	一三七
ヲ	をかつき	二〇三
	をながさる	七五

ヲをまきいふ.....七八



馬斑たれは襲に子獅

學習資料
百科全書

兒童の動物學 獸類篇

神戸伊三郎著

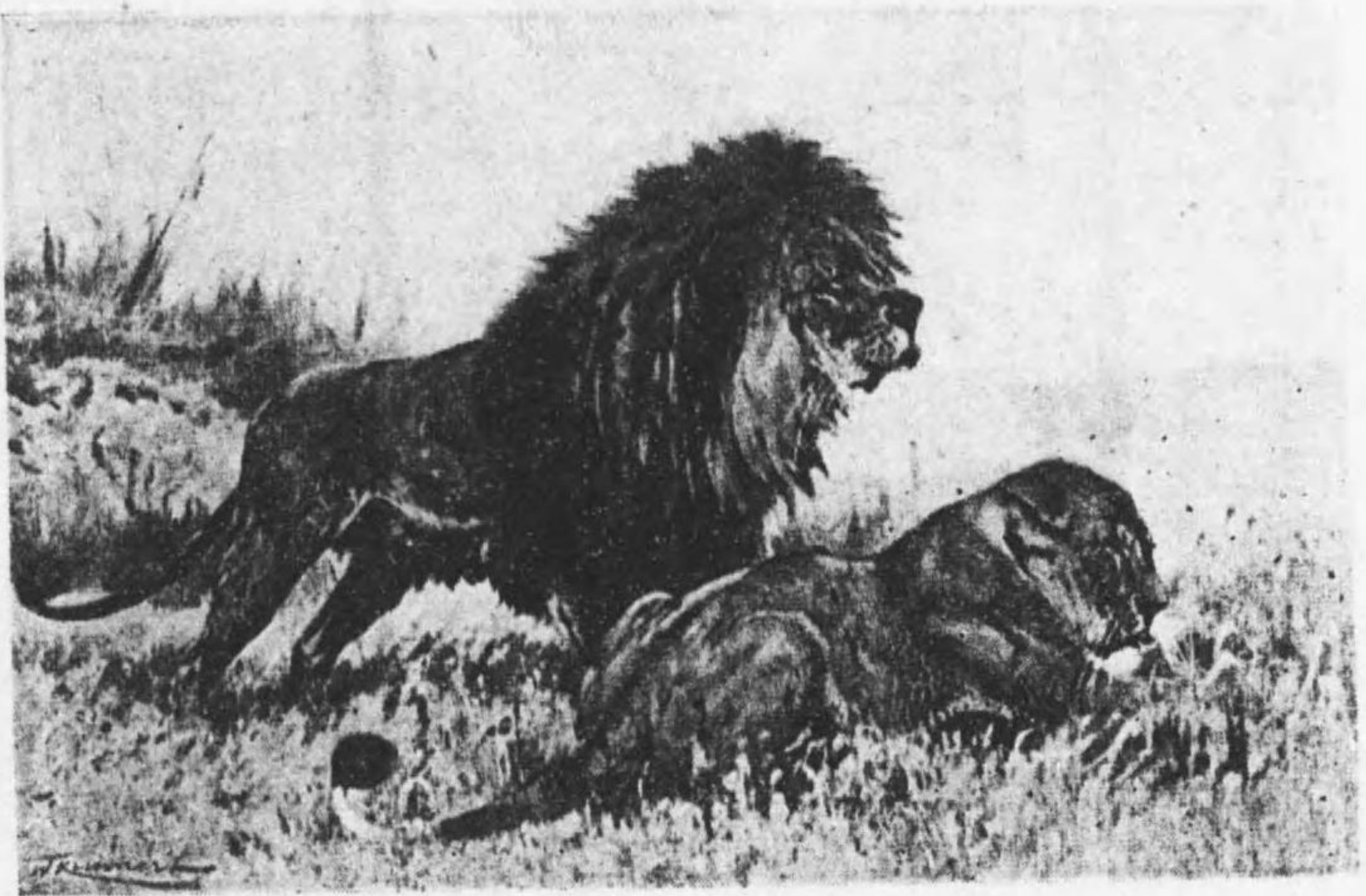


第一章 食肉性の獸類（食肉類）

第一節 猛獸と猫の類

(一) 獸王・ライオン 「叔父さん！ ライオンはさう恐ろしい風をしてゐませんね。」
幸一君は、今日の日曜を幸に、叔父さんに連れられて、今動物園に來てゐる。彼の叔父さんは大學の助教授で、青年動物學者である。子供が非常に好きで、幸一君に何時も印度の虎狩の話や、アフリカの河馬狩の話をしてくれる。幸一君は想像してゐた

第一節 猛獸と猫の類



第一圖 ライオン

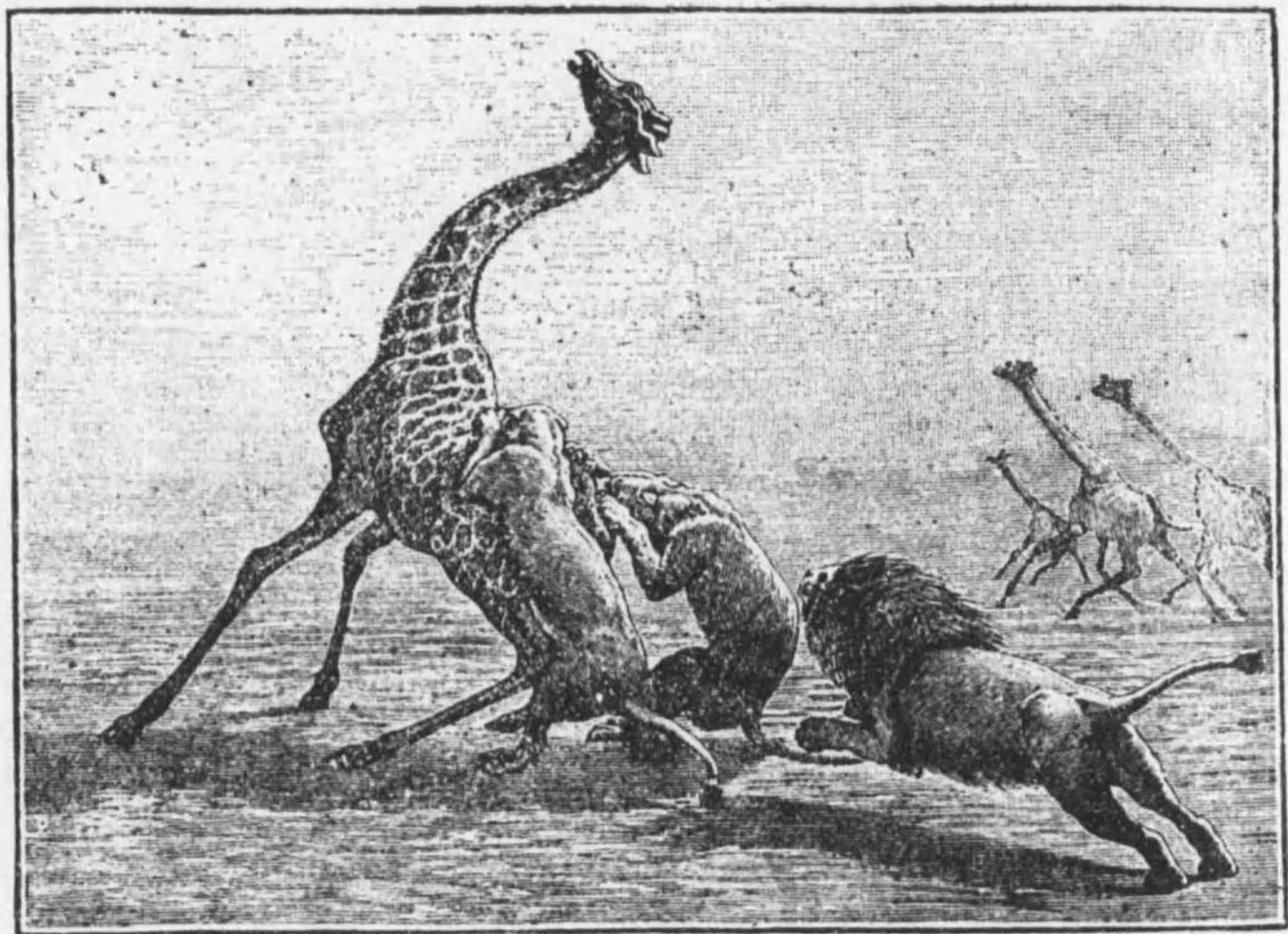
ものにくらべて、動物園のライオンが、あまりにやさしさうなのを不思議に思つたのであつた。

『このライオンは永く飼れてゐるので、もうやさしくなつたのです。』

叔父さんは幸一君の疑問に答へてゐる。

『一体に、ライオンは何時にも猛りくるつてゐるものではない。こちらから攻撃しなければむやみに人を襲ふものでもない。人を襲ふやうなのは、食に飢えたのか、年老いたのか、よほど食物に困つたものです。』

『それではライオンなど恐いことありません



第二圖 きりぎり襲ふライオン

ね。

『いや、恐いことは恐いに相違ない。一旦怒つたが最後、馬でもきりんでも一打ちにやられてしまふ。』

『一打ちつて、何で打つのです。』

『前足です。無論、咬みつく力も強いが前足で敵をはり倒す力が又非常に強いのです。』

丁度その時、牡獅子が立ちあがつて、一聲吼えた。退屈しのに吼えたのである。

『聲も割合に小さいではありませんか。』

幸一君には何もかも豫想外である。



第三圖 獅子狩り

四
『野生のまゝのライオンが吼えるのは、もつと勇猛である。底ひゞきのする、力強いもので、餘程遠方までも響く。そこで昔から、ライオンが一たび吼えると百雷が一時に轟くやうだといはれてゐる。その聲を聞いた獸類は、おそれおののいて、氣が狂つてしまつて、何れからその聲が來たのかわからなくなり、やたらに隠れ場所から出て來て、右に往き左に走り、あはてふためく。そこをライオンがつかまへて食べてしまふ、といふ話です。』

『ライオンは何を食ふのですか。』

『獸類の肉なら、何でも食べる。ライオンの棲す』

欠

欠

物の色について考へる時は、その動物の棲む場所から考へて行かなければなりません。

『それでは虎はごういふ所に棲むのですか。』

『棲む場所を人に質いてから考へるのもよいが、先づ虎の毛色を見て、ごんな所に棲んだらよいか、と吟味して行く方法もあるね。』

幸一君は直ぐに、ライオンのお隣に控へてゐる虎君に目を移した。この動物園の虎君は、この頃ジャバから来たばかりであるが、もうすつかり馴れてゐる。それに毛が脱けかはずたばかりと見えて非常に美しい。腹部と喉部のあたりだけは眞白であるが、頭から脊中にかけては赤黄色で、一面に黒い縦縞が流れてゐる。

『ア、わかつた。すゝきのやうな葉の細長い草の中に隠れたらよい。』

幸一君は虎の毛色を見つめてゐたが、急に獨言のやうに叫び出した。『さうですよ。すゝきのやうな草が少し黄みがかつた藪の間、或は枯れかけた灌木の



第五圖

間なごにゐると、虎の姿が不思議に消えてしまふのです。(第五圖)

虎は亞細亞の特産で、アフリカにも南米にもゐない。北はシベリヤ、滿州から、南はスマトラ、ジャバ島に至る地方に多く、我が朝鮮にも棲んでゐる。そして一般に北の方に棲むものは、毛が深くて色がうすく、南の方のものは毛が浅くて色が鮮かである。

叔父さんは虎の毛色の話を續けてゐる。

『印度のやうな日光の強い所に棲む虎は、朝鮮あたりに棲むものに比べて色が美しい。従つて毛皮の値段も印度地方の方が高いのです。』

『虎の皮は一枚幾らほごで買へますか。』

『さあ、普通三四百圓位なものでせうかね。』

『大分高價なものですね。』

『人は死して名をささむ、虎は死して皮をささむ、と人の名譽に比べられてゐるほどだからね。』

『今叔父さんのおつしやつた、日光の強い所に棲む虎が美しいといふのは、何か理由がありますか。』

『あるらしいんだ。春咲く花の色はうすくて、夏から秋に咲く花は色が濃いやうに、凡て生物の色といふものが、日光の強さに關係があるらしい。つまり色といふものが光に調和しないと、その色が生きて來ないわけなのだね。』

『虎は何を食べるのです?』
『ライオンと同じやうに肉だけしか食へない。鹿、水牛、又は孔雀など、そのあたり』

で得られるものを捕へて食べる。時には村里に出て来て、牛や豚などの家畜を盗み、稀には人を襲ふこともあります。

『それではライオンよりこはいですね。』

『猛悪な點はライオン以上です。体の大きいものは尾まで合せて一丈以上に達するものはあるが、ライオンよりは細長く、力比べをしては到底ライオンには及ばない。この前、私がこの動物園でやはり虎を見てゐた時に、どうした張り合ひからであつたか虎がチョット垣の上から隣のライオンの室をのぞいた。ところが、ライオンから一うなり吼えられて、忽ちひつこんでしまつたのを見ました。虎もライオンには一步を譲つてゐるらしいね。』

『叔父さん！ 英語で獅子をライオンといふなら、虎は何といふのです？』

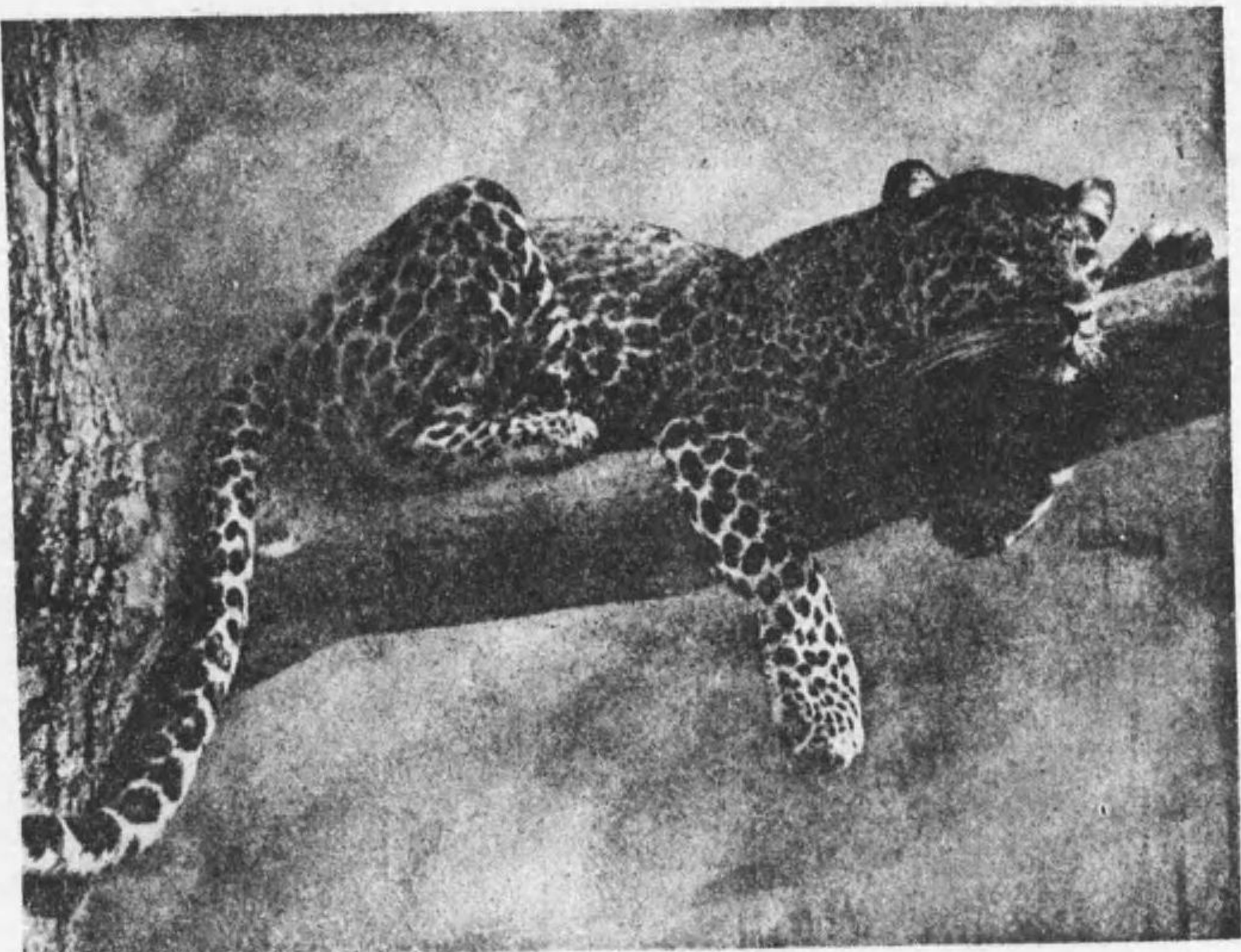
『虎はタイガー、豹はレオバード、猿はモンキー、孔雀はピーコック……。』

『ア、豹はゐませんか。』

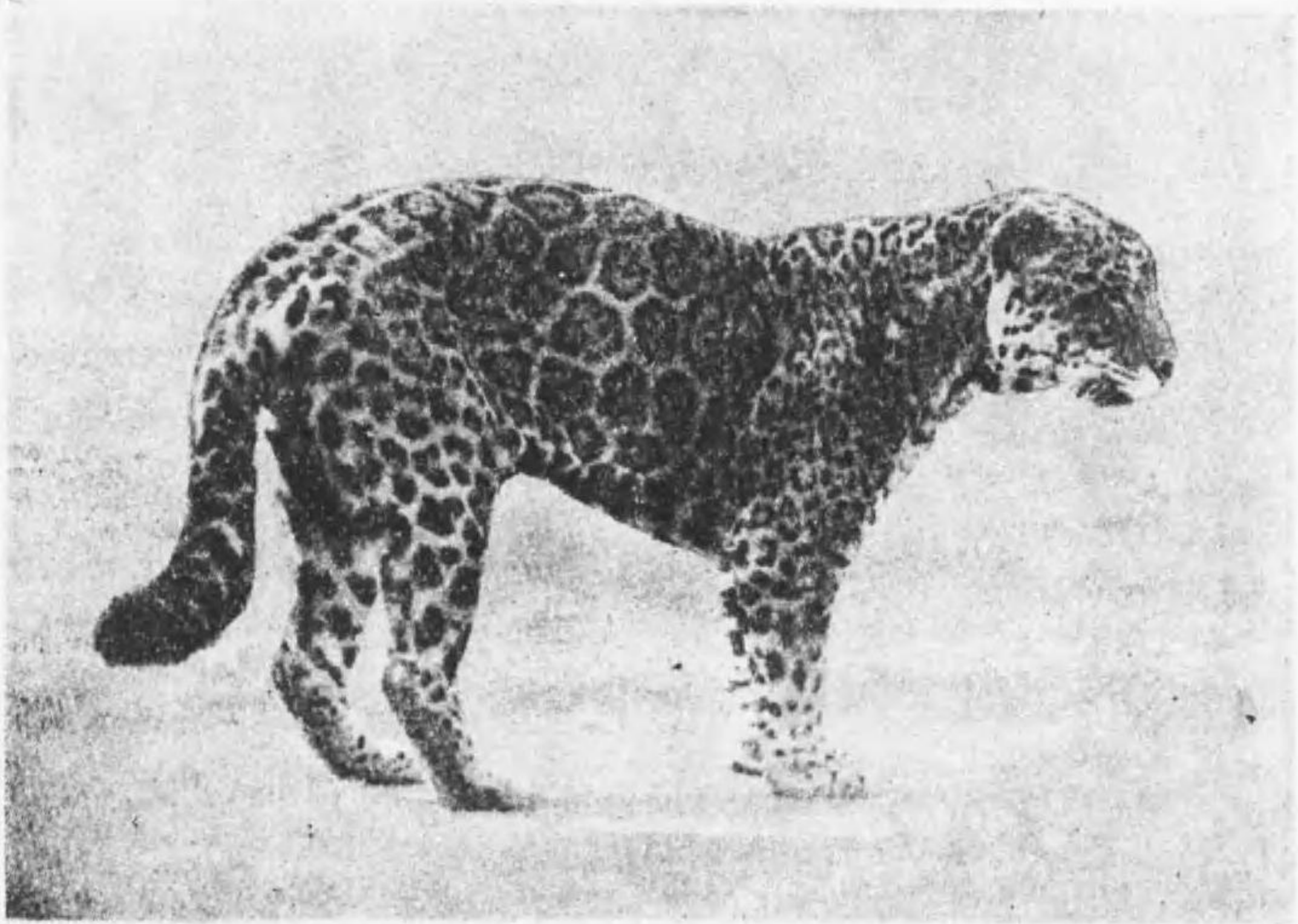
『ゐますよ。こつちです。』

(三) 豹とジャグア 豹は虎に比べると体が小さい。尾まで加へて体の長さが六尺ぐらゐ、胴もすつと細い。耳は小さくて虎のよりも尖つてゐる。それから体の色が黄の強い褐色で、それに黒い點々がある。この模様がまた木の葉の影に似てゐて保護色になる。

豹の体は細長くて、曲り易く出來てゐる。そこで動作が頗る活潑である。よく木によぢ登り、木から木に跳びうつるこゝが出来る。木の上にかくれてゐて、そ



第六圖



(虎カリメア) アグヤジ 圖七第

の下を通るかも知れなごに跳びついて殺して食ふ。この生活に体の模様が便利である。木に登つて他の動物の來るのを待つてゐる時に、木の葉の間から洩れて來る日影と、豹の体の模様とが混同するので、他動物から見つけられないからである(第六圖)。

豹は印度・アフリカ等に産する。毛皮は虎よりもすつと安價である。

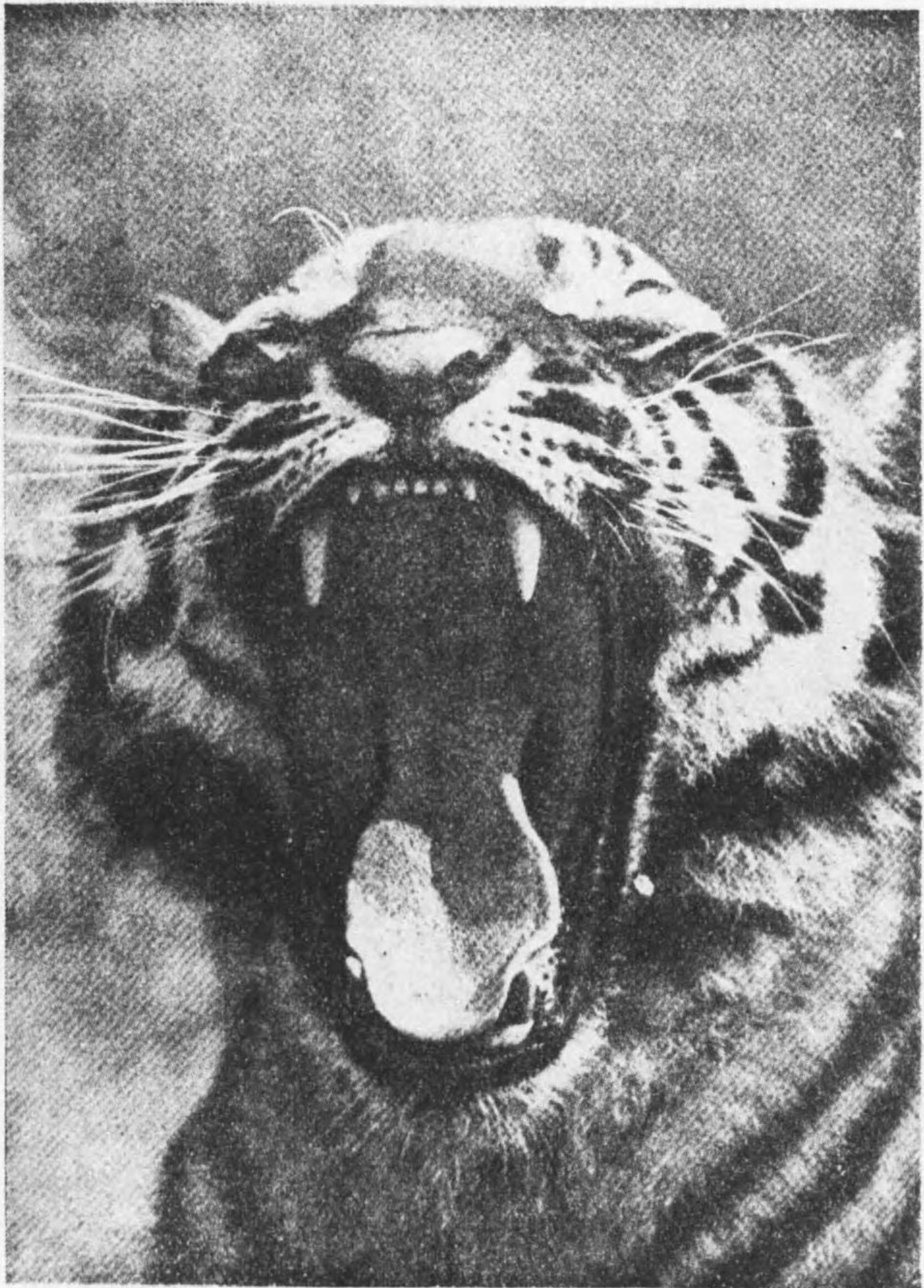
虎と豹との兩方に似たものにジヤグアといふ猛獸がある(第七圖)。南北アメリカに棲むので、またアメリカ虎ともいはれる。樹木の生え茂つてゐる水邊、森林などをさ

まよひ歩いて、鳥・獸・魚類を捕へて食べる。多くは樹の上にかくれて、その下を通る鳥獸を捕へる。体は一体に暗褐色で、それに暗黒色の紋が規則正しくならんでゐる。体の形は虎に似て、少しく四足が短く、その体の色や習性がチヨット豹に似てゐる。その性の兇暴なることは虎や豹以上で、土人もこれを非常に恐れる。動物園などではこれを見るこゝが少い。

(四) 猫には猛獸の相がある 獅子・虎・豹は猛獸中の三傑である。然るにこれ等の猛獸が皆あのやさしい猫の仲間と氣のつくものは少い。

『さういへば虎と猫とは非常に似てゐますね。』
幸一君は叔父さんにもう話しかけてゐる。叔父さんは待つてゐたといはぬばかりに猫の話始めた。

『猫の虎に似てゐるのは、その顔かたちだけではないよ。第一は齒です。猫の齒は鼠・小鳥などの鳥獸を捕へ食ふのに都合よく出來てゐる。前齒は小さいが、奥齒の先は鋸



口の虎 圖八第

齒のやうに鋭く尖つて、それが噛み合つた時には、鉄の刃が互に食ひ合つたやうになつてゐる。そしてその牙は長く鋭く、鼠を突き刺す短刀ともいふべきものです。見た

だけでも、この齒が猫の恐ろしい武器とわかるでせう。(第九圖)

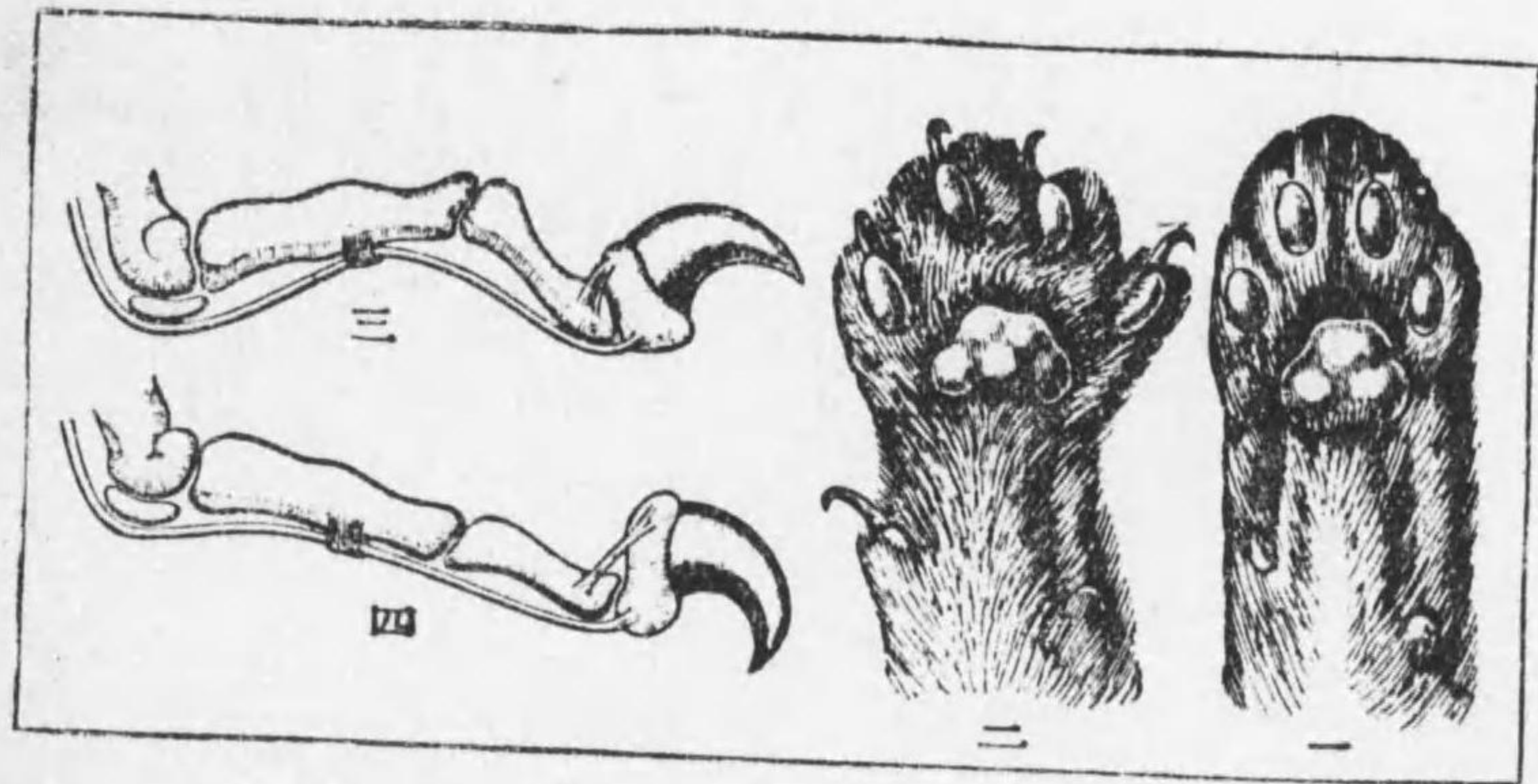


齒の猫 圖九第

『それに猫はソツト忍んで行つて、だしぬけに鼠を捕へます。』

幸一君は叔父さんの話につけ加へてゐる。實際猫の足の裏を調べて見ると、一つ一つの指に座蒲團のやうな柔かい小さい肉の球がある。そして蹠の中央にはもつと大きな肉の球がある。それに又その球と球との間にはあの柔かい毛が一杯に生えてゐる。だから板の間を歩く時でも猫は綿の上を歩くやうに音を立てずに歩く。不意に鼠を襲撃するには持つて來いの足である。

『犬の足音は高いですが、あれは足のひらに座蒲團がないのですか。』
『犬の足のひらにも座蒲團のやうな肉の球があるが、あの音は爪の音なのです。』
『では猫はその爪をどうしてゐるのですか。』



第十圖 猫の足

『そこに猫獨特の魔術があるのです。』

叔父さんの説明は次のやうである。

猫は歩く時や眠る時には、爪を指の間に引込めてゐる。だから爪が地面に觸れないやうになる。この爪が地面に觸れない利益は、第一に音を立てないといふばかりでなく、第二には爪の先が磨りへらない。爪は猫に取つては有力な武器であるから、用あるまでは鞘に入れて置くのである(第十圖)。

猫の爪は、弾力のある鞞帯といふもので、指先の小さい骨に續いてゐる。猫が休んでゐる時は、爪の根元にある腱のはたらきで、爪の先が上の方に引き上げられてゐる。そして上に向いた爪が指の間には

まり込んで、厚い毛の下に隠されるのである。

『では猫の爪は腱と蝶つがひではたらきが出来るのですね。』

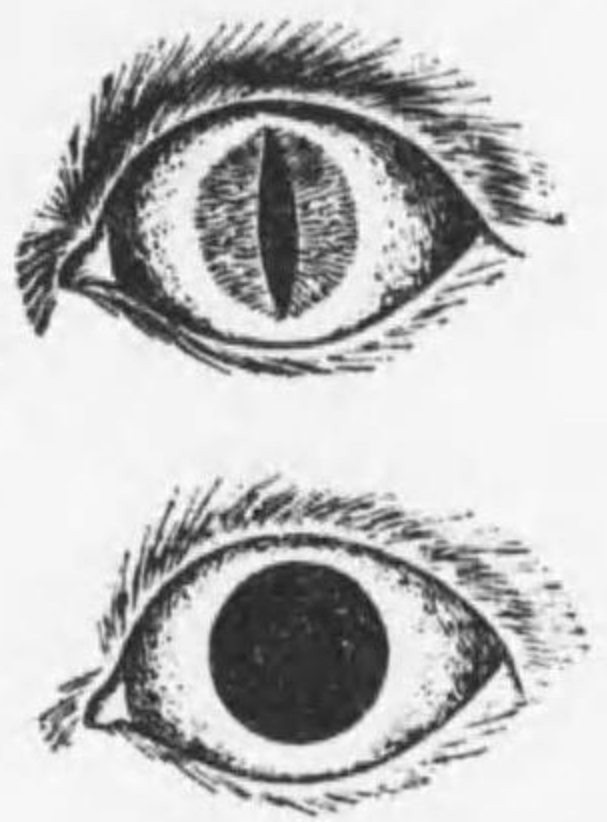
『可なり入り組んだ仕掛になつてゐるが、大体さういへばよろしい。』

それだけではない。猫が鼠を待伏せするに、一番都合のよい時は真夜中である。それには暗闇に物が見える眼をもつてゐなければならぬ。この點でも猫は驚くべき用意をしてゐる。彼の眼は僅かの光で物が見えるやうに出来てゐる。

晝間、猫の眼を見ると、その腫が針のやうに細くなつてゐる。それは餘り明るいので眩しいのを防ぐ爲である。吾々が眩しい時は眼を細くするが、猫は眼を大きく開いたまゝにして、腫だけを閉ぢるのである。

六つ丸く、五七卵に四つ八つは、柿の核なり九つは針

といふ歌は、猫の腫の伸び縮みをよんだものである。六つといふのは朝夕の六時、五つは午前八時、七つは午後四時、四つは午前十時、八つは午後二時、九つは正午十二



第十一圖

猫のひとみ

上は晝

下は夜

時を指したもので、皆昔の時刻である。その時刻の移るにつれて、猫の瞳が針にも柿の核にも卵の形にもなるといふのである。

猫の瞳が廣くひろがる時、他の動物には眞暗と思はれる所でも、猫はかすかの光で物を見ることが出来る。そして暗の中を探して晝間よりも上手に鼠を捕へる。鼠には猫は見えないが、猫には充分に鼠が見える。併し全く光が無くては猫も物を見ることが出来ない。どんな動物でも全くの暗闇では物を見ることが出来ない。

『幾らか光が無ければ、猫は物を見ることが出来ないと思ひますが、昔から、ほんとうの眞暗の所でも猫は鼠を捕るといひますね。』

『それは髭で鼠を知るのです。』

『髭?』

幸一君は驚いたやうに叫んだ。

『面白い髭? あの口のまはりに生えてゐる髭で鼠を探る? どうしてそんなことが出来るのです?』

『多分君は猫がたゞ威張る爲に髭を生やしてゐると思ふのだらう。けれども猫の髭は武器の一つです。髭で物にさはつて歩くと、猫にはその近傍に鼠があることがすぐにわかる。だから決して猫の髭を切つてはならない。』

『わけは知りませんでした。猫の髭を切るものでないと聞いてゐました。さうすると、猫の髭を切るのには、盲人の杖を奪ふやうなものです。』

『かういふ猫の武器——齒・爪・瞳・髭——は獅子・虎・豹などにも同様なのです。その外

- (1) 舌の面はわさびおろしのやうに硬いどげが生えてゐて、骨についてゐる肉をけづり取るに都合がよく(第八圖)、

(2) 顎が短くて咬む力が強い

ことなごも、猫の仲間の特徴です。』

(五) 飼猫の本性 『猫は三年の恩を三日で忘れ、犬は三日の恩を三年忘れない』といつて、猫を悪くいふ人があるけれども、それはよく猫を研究して見ないからである。『猫は浮浪人のやうに足音を盗み、待伏せして機会をうかがひ、チョットの間に悪いことをして逃げ去つてしまふ。猫は人に媚びるけれども、狡猾さうな眼色がそれに潜んでゐる。猫は可愛がつてくれる人の顔を見ない。可愛がつてもらひに来るのにも、廻り道をして近づいて来る。猫は吾々の家に住んではゐるが主人を知らない。人よりは家になれて、人がこれを取締ることが出来ない。』などと、するぶん猫は悪口ばかり言はれてゐる。

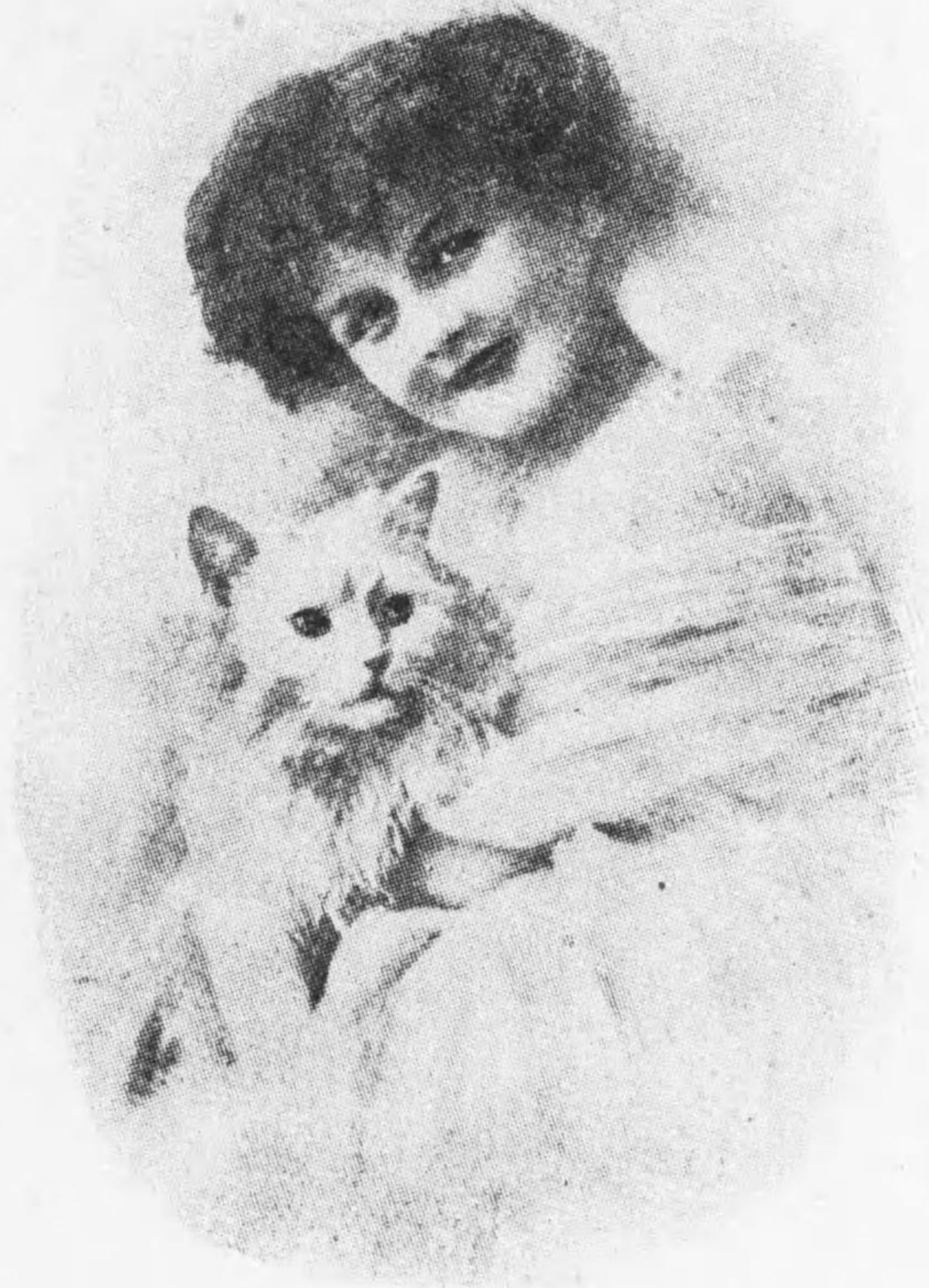
『僕は、あれは猫の嫌ひな人の悪口だと思ひます。僕の経験では猫も仲々主人を知つてゐると思ひます。』

幸一君は彼が猫を飼つた時の記憶をたどるやうにいふ。叔父さんもそれに同感といふ様子をする。

『幸一君のいふ通りです。よく扱つてやれば猫もそんなに野性的にはなりませんよ。食物を多くやれば盗をしません。少し氣をつけてやれば行儀もよくなります。それを猫は人から虐待されてゐる。『餓えさせて置くとかよく鼠を捕る』といふ口實で、猫に充分な食物を與へない人が多い。そして若し何か食べたいと臺所へ鳴いて来ると、理解のない下女は箒で追ひはらふ。骨を拾ひに塵箱に近づけば、犬が唸つて追ひ出す。これでは猫も盗をするより外はない。猫に盗みをさせるのは一体誰の仕業でせう?』

『それは僕じゃありません。』

『さう、幸一君ではありませんね。猫に理解のない人達です。猫は主人を慕はないといふけれども、それは主人が愛情を示さないからです。例へば温和しい猫の玉ちゃん、ゴロくんと喉を鳴らして千代ちゃん、可愛い、赤い鼻を頬にすりつけ



第二十圖 猫を抱いた少女

がすきです。うちの玉は決して盗みをしません。口の中に指を入れても決して咬みま

たら、それは主人を慕はないといへませうか。千代ちゃんはお可愛くてたまらなくなり、夢中になつて猫に頬ずりをしないではゐられないでせう。(第十二圖)『本當に僕も猫

せん。僕にはいつも爪を隠してゐて、まだ一度も引搔かれたことはありません。』

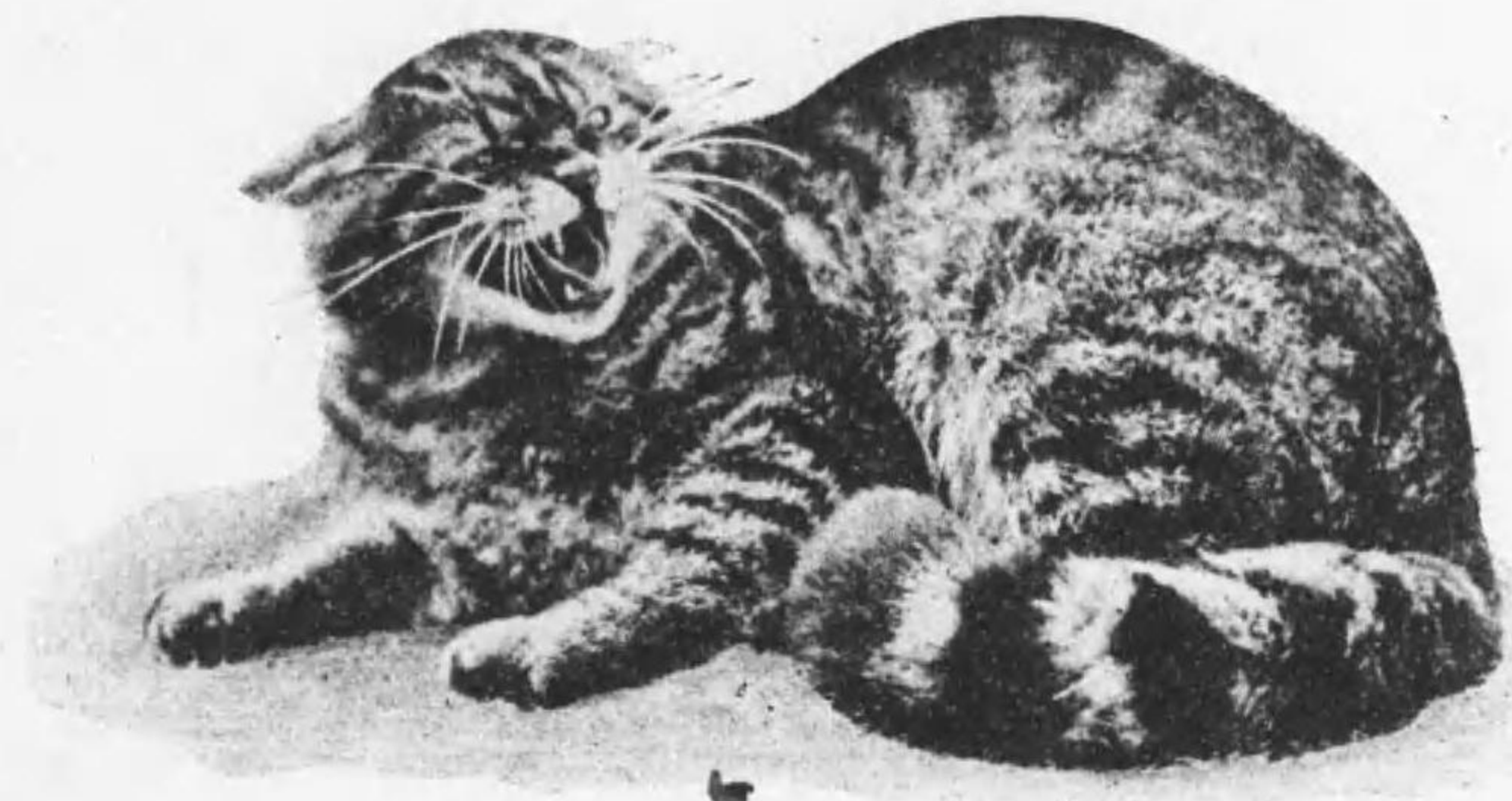
『幸一君は大分猫が好きだね』

『え、僕、猫は好きです。そしてうちの玉は鼠を捕るのが大變上手です。何所かで鼠のカサカサイふ音が聞えると、玉はそこにヂット座つて耳をすましてゐます。音のする方がわかると、抜き足さし足で忍びよります。かうして居るだけの鼠を皆な捕つてしまひます。けれども、うちでは鼠を捕らせるために餓えさせて置くのではありません。』

『えらい猫學者ですね、幸一君は！ その通りです。』

『それに、猫はお天氣がかはりさうになると、足を舐めて、耳や鼻を何度も洗ひます。あれは雨降りか嵐の前兆だといひます。叔父さん、本當ですか？』

『え、動物といふものはよく天氣のかはりを知つてゐるものです。それほごに物をよく感ずる猫が、どうして人の愛情がわからぬ筈がありませんか。』



山猫 圖三十第

(六) 山猫と猫の祖先

『エチプト人は昔から非常に猫を尊んだらしいのです。猫が死ぬとその死骸を町重に葬つたのです。つまりエチプト人は昔からよく猫の本性を理解してゐたからでせう。千代ちゃんも金魚の墓を作つてやるのと同じことです。』

『すると、昔のエチプト人が山猫をならして猫にしたのですか?』

『それはエチプト人も知れない。併し、山猫は幾ら可愛がつて馴らしても猫にはなりません。エチプトの南方にアビシニアといふ所がある。そこでは今も尙ほ時々グラフト・キャットといふ一種の野性の猫が発見されるが、その猫は吾々の飼猫と頗る似た所がある。』

そしてそれは非常に人に馴れ易いものである。そこで、學者はこれが猫の祖先だと認めてゐます。それに何か亞細亞の方から来た猫がまちつて、今の猫が出来たのです。『それでは全然山猫は關係ありませんね。』

『山猫は我國の深山にもゐますが、猫とは性質が全く違ひます。山猫は運動が活潑で普通の猫よりも長く強い足、大きな頭、力ある口をもつてゐる。尾は大變に毛深く、その先の方が太くなつてゐる。体色は黄がかつた灰色で大きな黒い縞が流れて、チヨツト虎の姿に似てゐます。足の裏の膨れた肉、口、鼻などの毛のない部分は皆黒です(第十三圖)。飼猫は鼻も口も足の裏の肉も皆紅色です。この足裏の紅いのが亦アビシニアの野猫に似てゐるのです。』
『ですが、僕は時々口や足の裏の黒い飼猫を見ましたよ。足の裏の黒い猫は鶏を捕つていけないつていひます。』

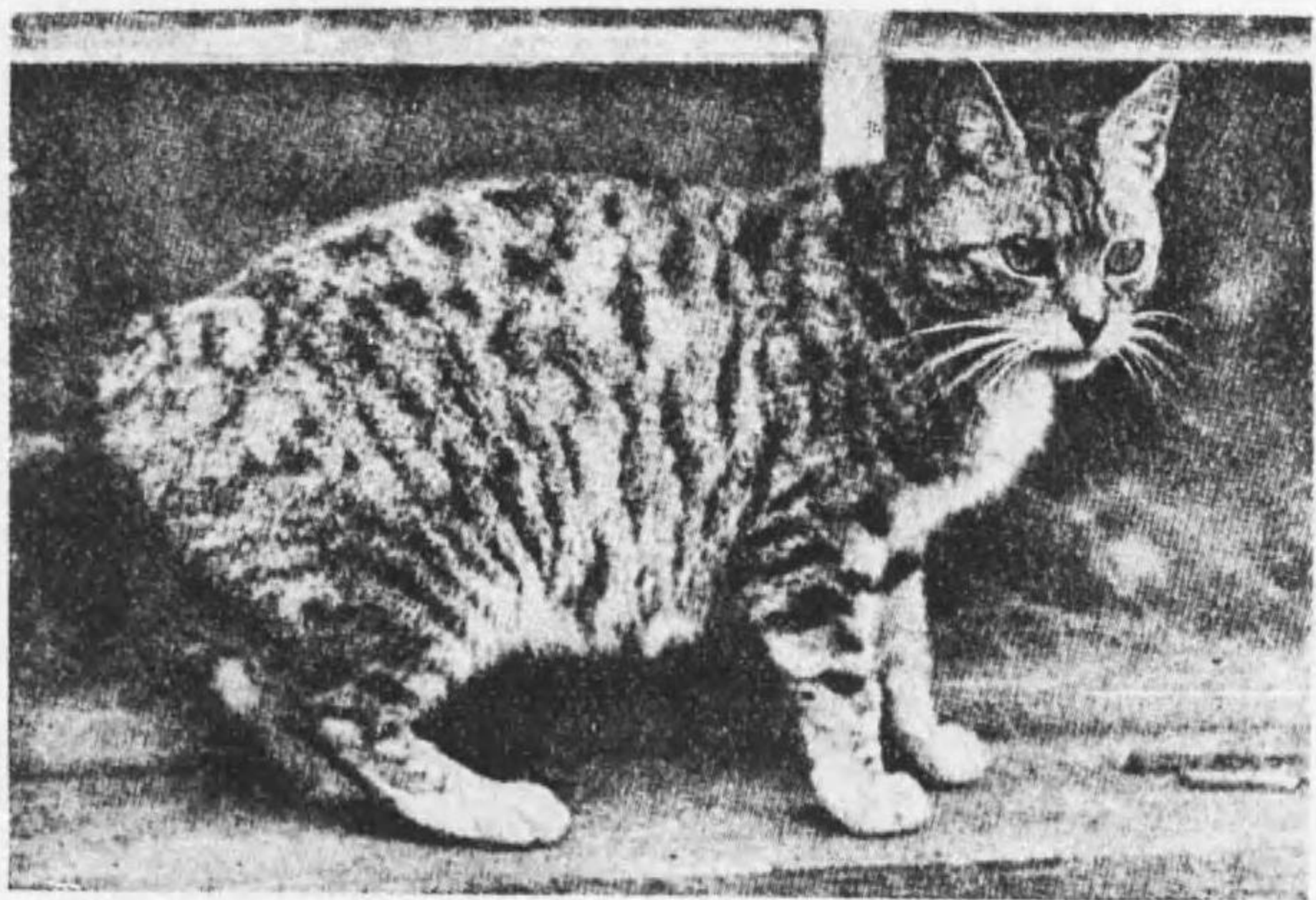
『あの猫は確に山猫の血がまちつてゐるのです。森に近い家の牝猫が、時によると山

猫と一緒にいることがありますがからね。かうして若し山猫の血統がはいるとすれば、

猫の性質は悪くなるでせう。實際、山猫は兇暴で、
ごんなに手を盡しても始末におへない獸です。鶏
を荒すことなどは狐よりも甚しいものです。』

(七) 虎猫と三毛猫 『あの飼猫の一種に虎猫とい
ふのがありませんか。』

『ありますね。毛皮が虎の毛皮に似てゐる猫でせ
う。あれは、その祖先にこの山猫の血がはいつて
ゐるのでせう。その證據には、虎猫はこの山猫の
黒い口と、縞の毛皮を持つてゐて、猫の中では
一番馴らし難く、一番人を疑ひ深く、一番よく鶏
をねらふ。脊中をチョットたゝいた丈けでも、爪



猫 虎 圖四十第

を出すのは虎猫だけです。その代り虎猫ほど勇ましく鼠を捕るものは無いのです。』

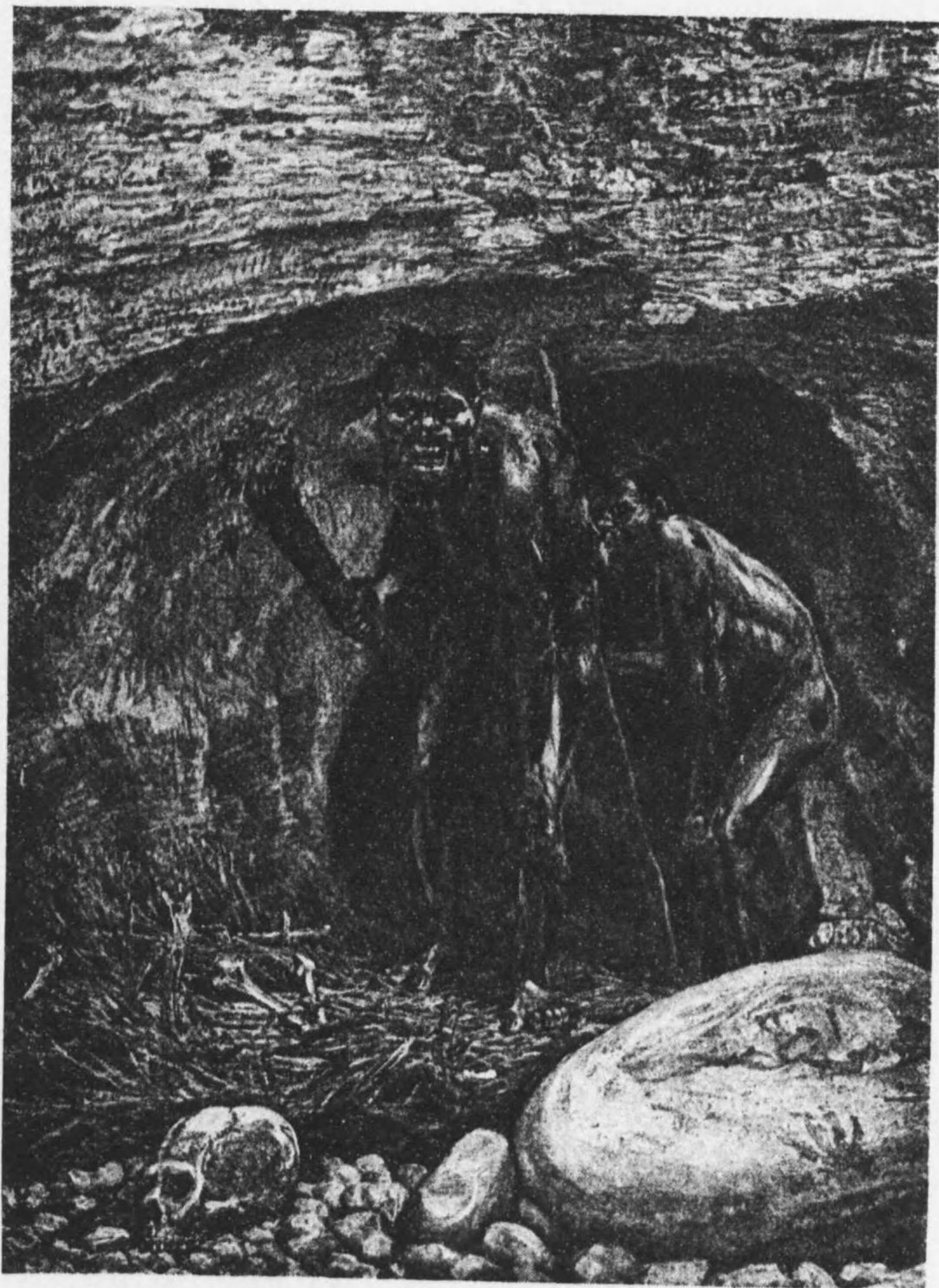
(第十四圖)

『僕は虎猫よりも三毛猫の方が好きです。三毛猫は人に馴れて温和しい。鼠を捕るこ
とも虎猫には劣らない。毛色は純白と黒と赤褐の染分があつて美しく、鼻と足裏は肉
色です。が、奇妙なことには三色あるのは牝猫だけで、牡猫はせいゝく白と赤褐との
二色に限られてゐます。』

『實に奇妙ですね。いまに遺傳學を研究するとさういふこともわかります。君は動物
學者になりますか。』

第二節 狼と犬の類

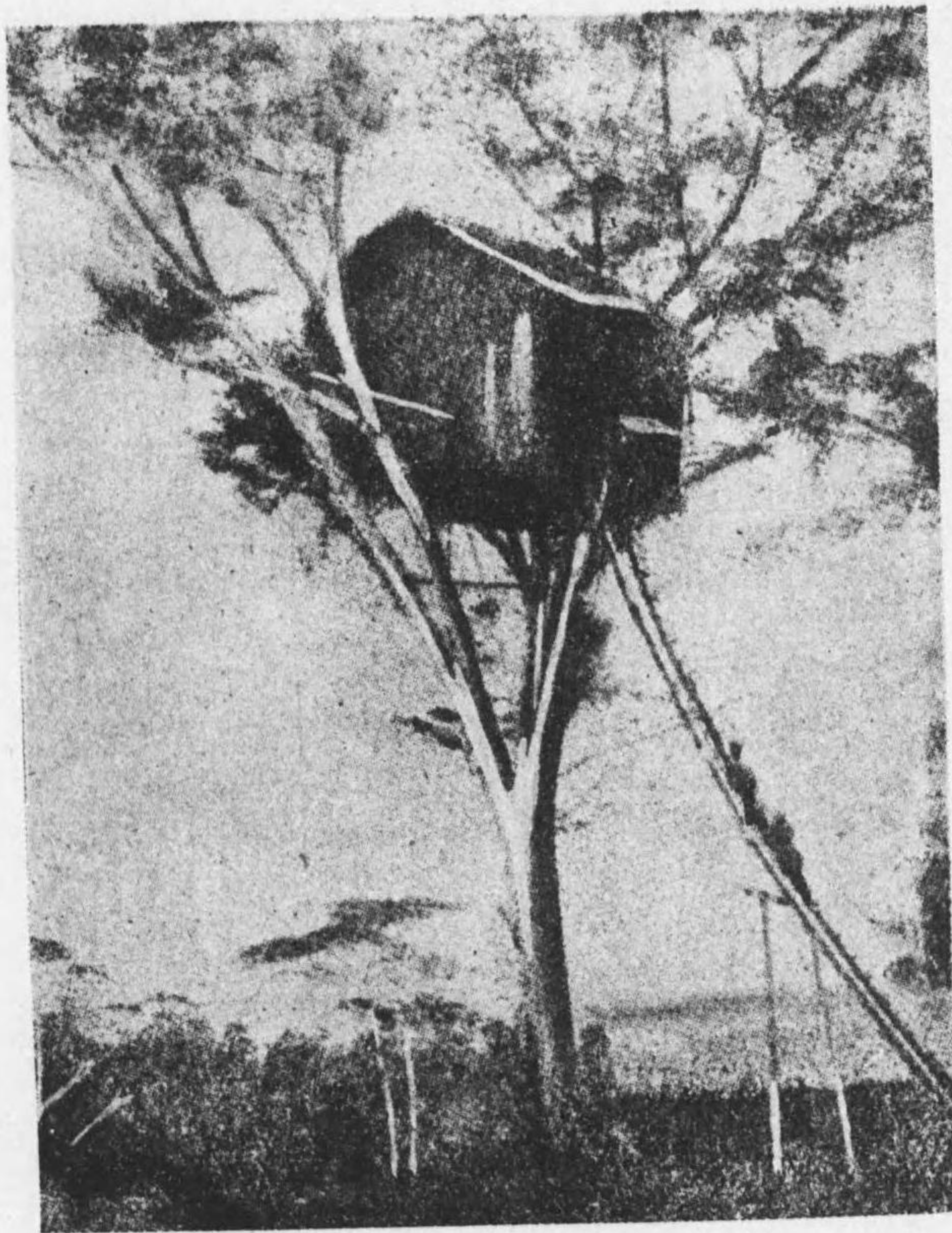
(一) 原始時代の人類生活 茲にかりに吾々人類が一切の文明的の生活から立ちかへつ
て、未開の荒地に放浪生活をするを假定して見よう。さうすれば吾々の生活は食物を



代時始原の類人 圖五十第

求める事
と、猛獸
の害を防
ぐことだ
けになる
でせう。
吾々の周
圍ははて
しもない
薄暗い森
林が廣が
つてゐて

そこには獅子・虎・豹・狼などの猛獸が出沒するであらう。
これ等の猛獸の襲撃を避ける爲めには、吾々は洞穴に隠れて、入口には岩戸を立てる



巢む住の人 圖六十第

か、大木の枝の間
に巣を作つて、それ
に住むより外に道はな
い(第十五圖、第十
六圖)。さうして安全
な場所に住むことは
出来ても、いつも洞
穴にばかり籠つてゐ
るわけには行ない。
食物を探しに出ない

ればならない。すると森の中には虎や狼などの恐ろしい猛獸が待つてゐる。吾々はこれ等の猛獸と戦はなければならぬ。

併し、猛獸と戦ふ爲の銃砲も彈藥もない。頼みとする武器はただ石と棒だけしかない。野獸がとびかかつて來たら、有りつたけの力で戦ふ。それで力つきた時は彼等の餌食となるだけである。

人類社會の文明は、その端を人獸戦争に發したが、この戦争は今なほ盛に行はれてゐる。最近印度に於て、猛獸毒蛇の爲めに害せられた人畜の數は非常なもので、千八百八十三年から千九百〇七年まで二十五年間に、野獸の爲めに殺された人畜は、六萬九千五百六十四人、同じく毒蛇の爲めに生命を失つた人畜は五十三萬八千〇二十八人、合計六十萬七千五百九十二人となる。文明の世に於てすらこの通りである。未開時代に於ける人類生活の慘狀察するに餘りある(第十七圖)。

吾々は餓えに迫られて洞穴を出る。運よく大した危険に逢はずに、何か餓えを凌ぐ

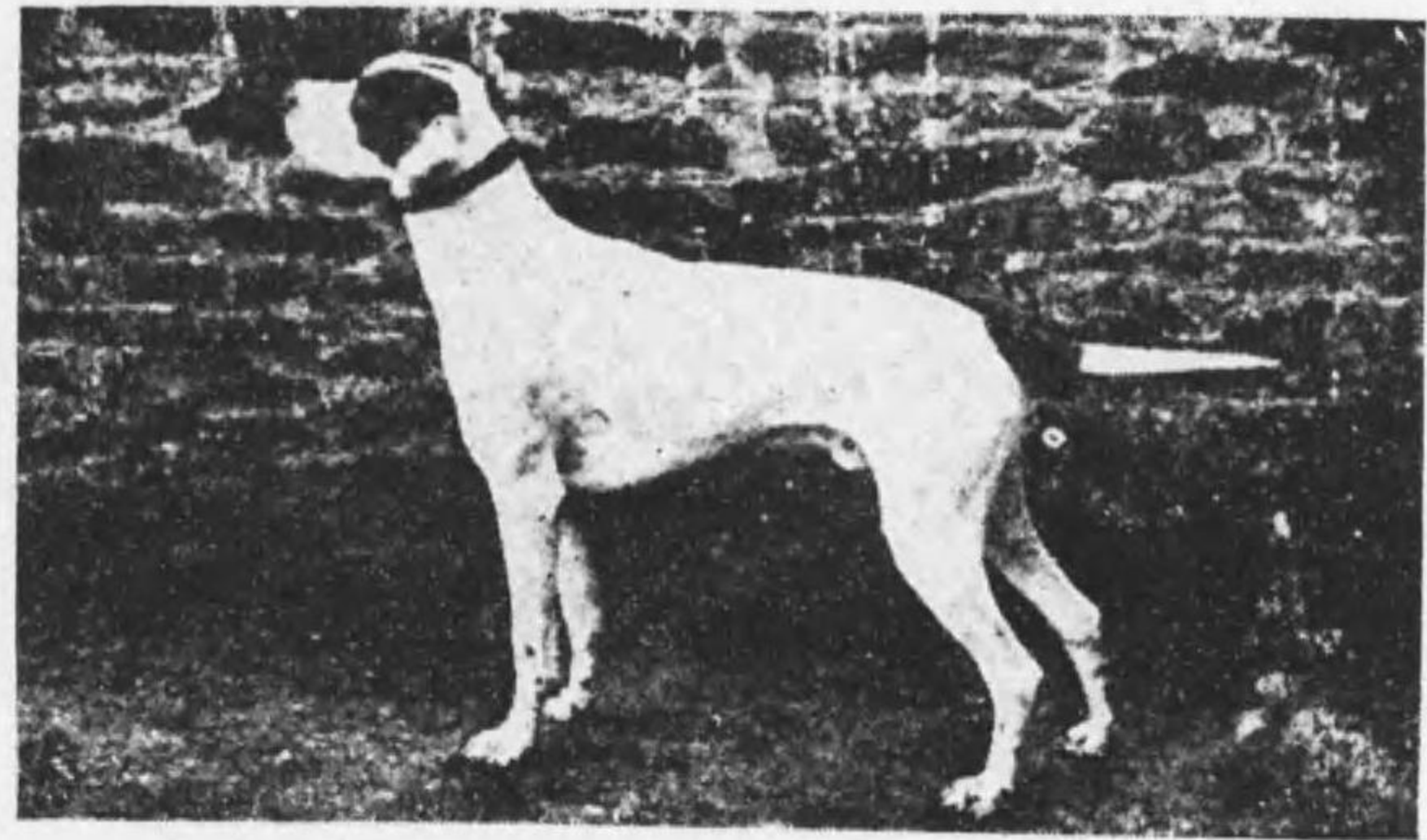


第七十圖 狼に襲はれた馬車

べき食物を見つけたとする。海岸に出たら貝がある。野山をあさつたらあけびの實があるだらう。根氣よく探したら栗の五六合は集まるであらう。不満足なく御馳走ではあるが、それで吾々の餓えを忘れさせるであらう。

(二) 犬は家畜のはじめ この悲惨な生活の中では、とても、兎の肉をも炙つて食べるわけには行くまい。昔も兎は澤山にゐたらう。然し兎は早耳で眼敏いから、吾々は近づくことは出來ないだらう。追かけても、石と棒だけでは一匹の兎を得るには容易なことではあるまい。そこであけびと栗と木の葉と貝で僅に餓えを凌いでゐる。そしてひどく腹が空いたら帶

をきつくしめなほすだけだ。現に兎は目の前にあるが、それを捕へるすべがない。こんな時に犬がゐればよいがと讀者諸君は思はないか。



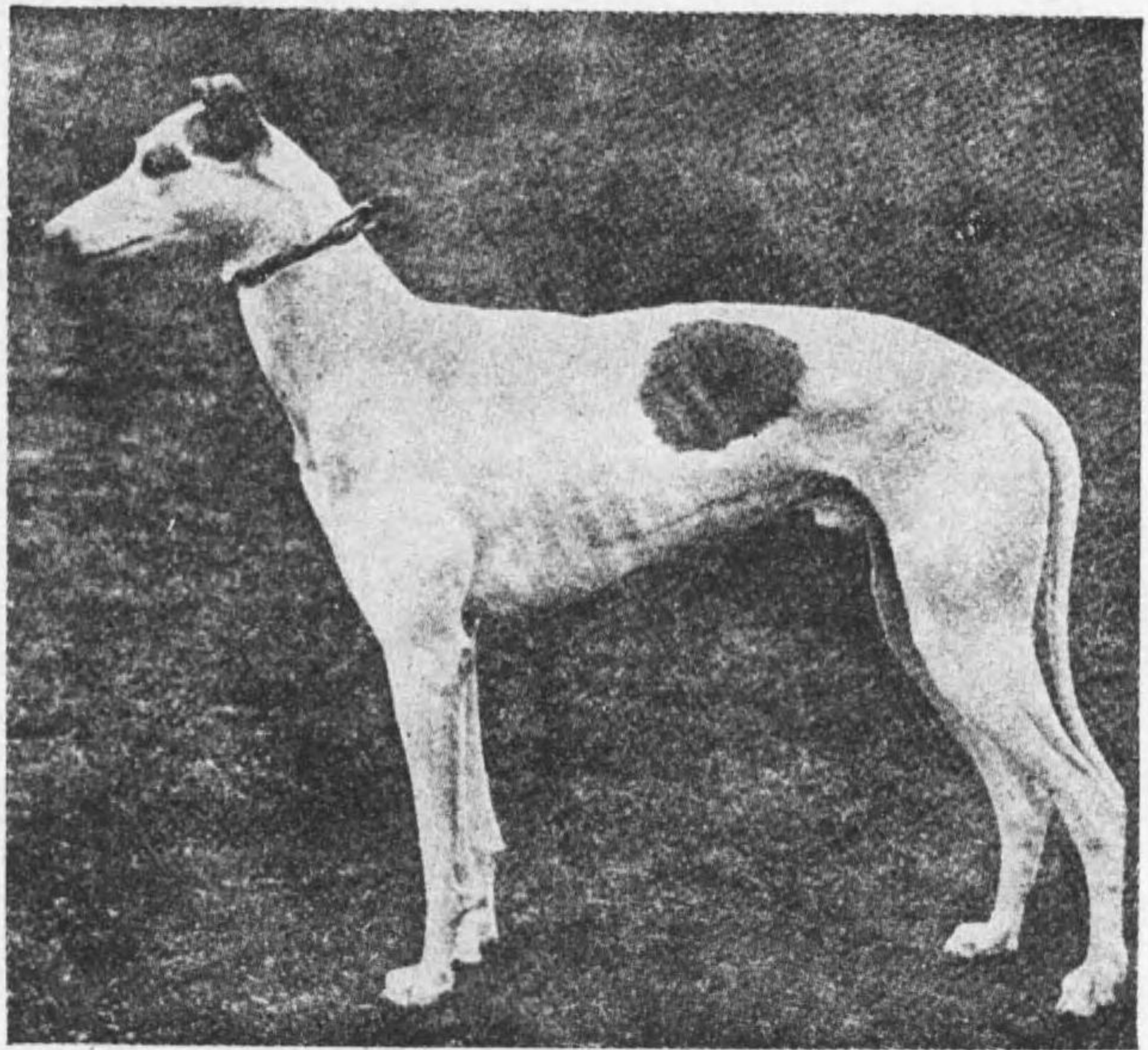
犬—タンイボ 圖八十第

こんな時に犬がゐれば非常に役に立つ。犬を連れて兎狩に行けば、追ひ出した兎を犬が捕へる。そして人が兎の肉を食べ、犬には骨をやつて共に餓を凌ぐことが出来る。犬を連れてゐさへすれば、急に野獸に襲はれるやうなことはない。狼ぐらゐなら、勇敢な犬が跳びかかつてその頸に食ひつく。そこを人が棒で狼の急所を打つて倒すことが出来る。さうして夜は犬が洞穴の前で番をするから、人は安心して眠ることが出来る。昔の昔、その又昔、人類が野蠻生活をしてゐた頃は人類は獸を獵つて暮してゐた。その時分には、まだ牧

畜や農業は開けなかつた。野獸が彼等の食物で、彼等は石器や棍棒で獸を打ち殺した。獸の肉は食物になり、その皮は着物になつた。野獸を追ふ時、人の有力な助をなしたものは實に犬であつたのである。人類は犬の助力を得て、はじめてその生活が安全になりそれから人は獵を止めて、牛・馬・羊などの牧畜を始めた。

最初の家畜は人に馴れないで、油斷をする。以前の野獸にかへらうとしたものであるが、犬がよく見張つてゐて、逃げ出す獸を連れ戻し、悪性のものを追ひ出して、つひに立派な家畜となした。かういふ風に人は犬のお蔭で、家畜から豊富な食物と着物を得て、日日の生活に心配がなくなると、今度は土地を耕して穀物を作り始め、まもなく工業を始め、少しづつ、文明に進んだものである。だから人類の文明は犬のおかげであるともいへる。

(三) 犬の種類 犬は現在でも人類に非常に役立つ。世界各国何處の國でも犬を飼つてゐない所はない。従つて種類が多く、使用の目的によつて色々の變種が出来て

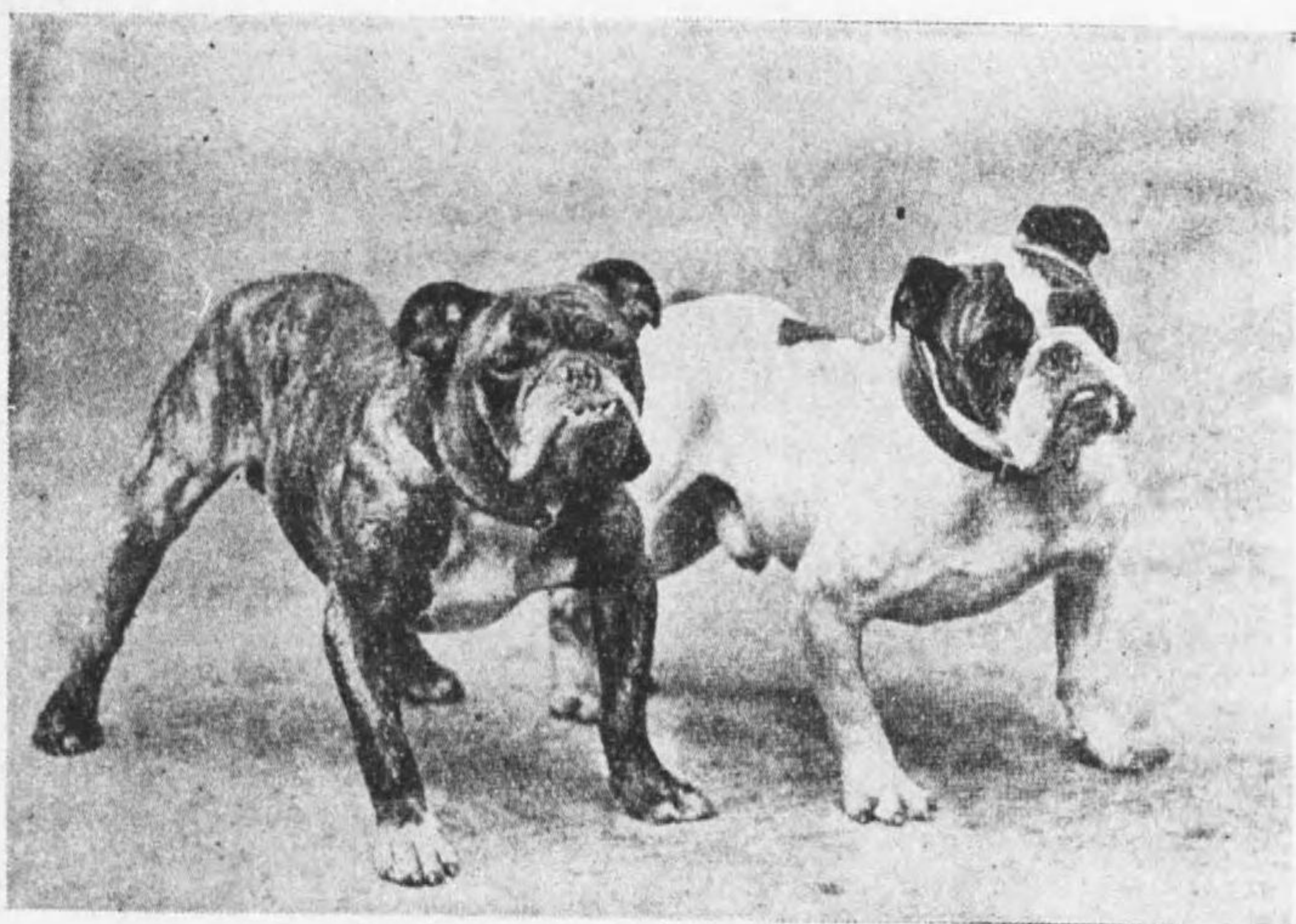


犬ドンウハーレグ 圖九十第

の方を向いてゐて争鬪をするに都合よいもの、擧げ来れば多種多様の言葉につきる。

中にも牧羊犬といふのはよく羊の群の番をするので有名だ。全身に長い毛があつて耳は短く立ち、尾は垂れてゐる。主人が休息して笛を吹いてゐる間に、この犬は近所の高い丘にゐて、家畜の群を見守り、牧場の外に出ないやうに氣をつけてゐる。作物の中に羊がはいり込むと、走つて行つて定め場所に連れ戻す。主人の合圖一つで散ばつた羊を寄せ集める。

牧場から牧舎に羊を歸らせる時などは、後になり先になり、注意して羊を散らさぬやうにする。道で附近の村の犬が出て来て牧羊犬に挨拶をすること、
『お前たちは彼方へ行け。御覽の通り私は忙しいのだ。お前たちと話をしてゐる暇はないのだ。』
といふやうな様子を見せる。そして側目もふらずに羊の後から追つて行く。羊が立ち止まつて道草を食ふやうなことがあれば、直ぐに追つて續かせる。他の羊の群と行き違ふ時などは、右に走り、左に廻はり、他の群へ紛れ込まないやうに注意する。



犬クツドルブ 圖十二第

この他狩獵用としてはグレーハウンド種・ポインター種、運搬用としてはベルナード種・闘争用としてはブルドックなど有名なものがある。エスキモー犬が橇を引くことは人のよく知つてゐることであるが、日本に來てゐる洋犬も馴らせばよく車をひく。近畿地方では荷車の綱引をさせる。山間にはいると人力車の先綱を犬に引かせる。四國の山間に行くに五六頭の犬にトロツコをひかせて、材木を運ばせてゐるのを見ることが出来る。犬の肩及び胸部の筋肉の發達は、よくこの勞役に堪え得るものであらう。

(四) 犬の祖先と豺狼 家畜をまもること、門番をすること、車や橇を引くこと、



犬ドーナルベ 圖一十二第

狼を追ふこと、獵の獲物を見つけること、あるが、賢い犬は教へられ、ば色々の仕事をする。諸君は犬がお使をすることを聞いてゐるであらう。犬は財布と用事を書きつけた紙片を入れたバスケットを主人から受取ると、煙草でも、牛肉でも、豆腐でも、よく主人の言ひつけを呑み込んで、その使を果す。歸途で仲間の犬が出て來て、牛肉の臭を嗅ぎつけ、バスケットの中を吟味しようとする。

『どうだ、よい都合じゃないか! 中味を山分けにしよう。』
『いふやうなことがあつても、使ひ犬は足をゆるめようともせず、少し齒をむき出して唸りつける。』



第二十圖 可愛い荷物

ない。私も犬を飼つたことがあるが、馬でも牛でも犬のやうに賢い家畜はないと信じ
てゐる。犬は實に可愛い獸である(第二十二圖)。
さて犬が今日見るやうに馴らされる前の姿は何であつたらう。或はやまいぬ(豺)で

「邪魔をするんじゃない。
碌でなし奴！これはおれ
の主人の物だといふことは
お前にも解つてゐるではな
いか。」
といつたやうな様子をする。
そして、犬がその肉を
仲間と一緒に食べて
しまふやうなことは決して

あるといひ、或はおほかみ(狼)であるといふ。併し學者の研究は全然これとは違ふ。
先づ話の順序として、この二つの猛獸につい

て説明して置かねばならぬ。

日本の内地で俗に狼と稱するものは皆やま
いぬのことである。箱根山中で宮本武藏が襲
はれたといふ狼も、多分このやまいぬであら
う。やまいぬは体の形は犬に似てゐるけれど
も、眼尻がもつと吊り上つてゐる。一体犬は
猫に比べると口が突き出てゐるが、やまいぬ
はそれがもつと長く、口は大きく耳の下まで
裂けてゐる。耳は割合に小さく、毛は全部茶
褐色で少しく赤味を帯びてゐる。但し頬には

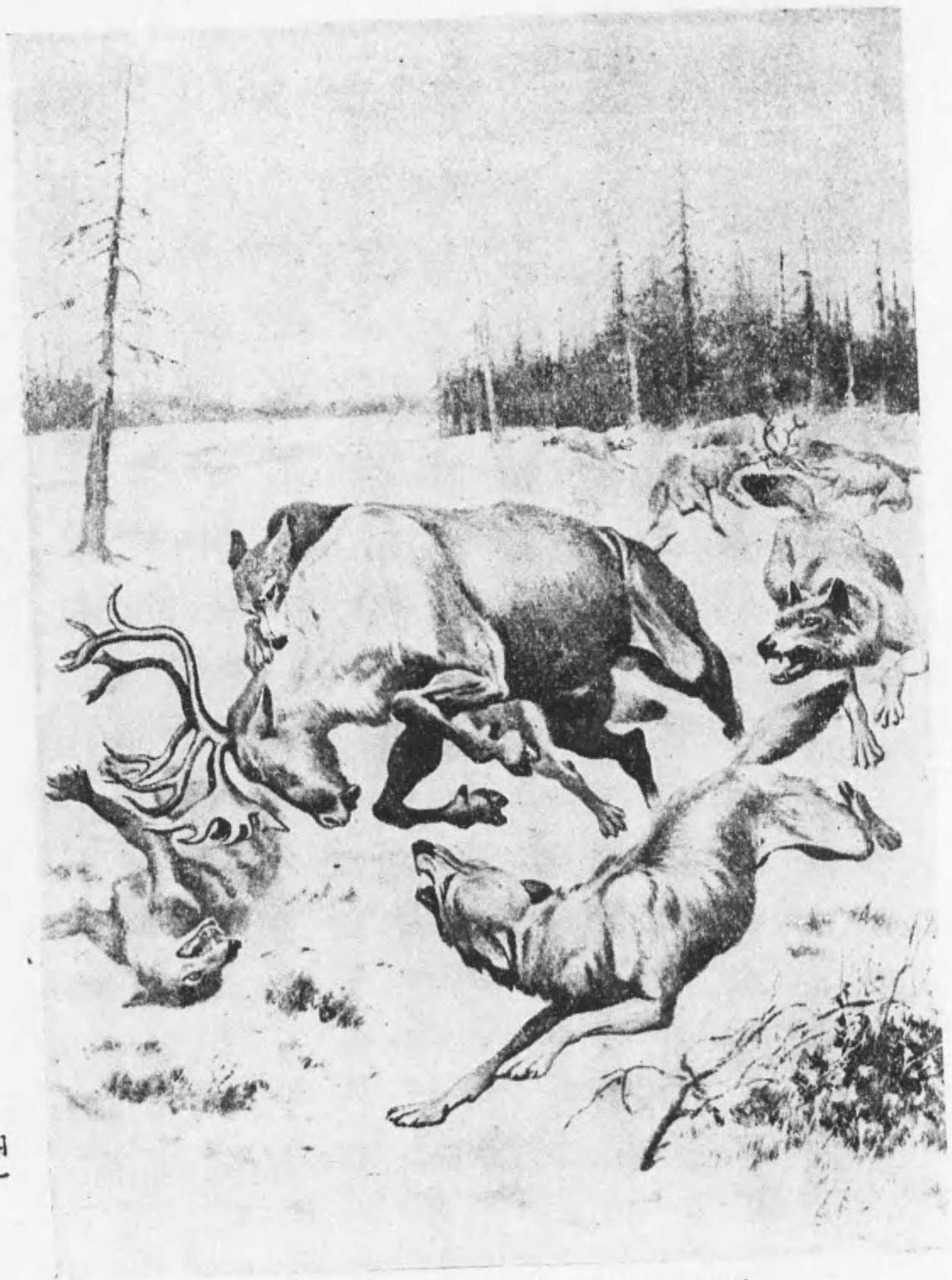


第二十三圖 やまいぬ

小さい白い斑點があり、尾にも白毛が雜つてゐる。本州の深山に棲んでゐて、鹿なごを捕へて食べる。今でも山間に近く住んでゐる人は、曉方又は深夜に時々あの高い唸り聲を聞くことがあるといふ(第二十二圖)。

狼は日本の本州以南にはゐない。ロシア・北米・我が北海道に棲む。体はやまいぬよりも大きく、尾まで合せて長さ五尺五寸に達する。肩がいかつて、足は長く、体はやせ、尾は長く常に後足の間に垂れてゐる。毛なみも粗く、殊に頸には剛い毛が厚く生えてゐて、その部分が膨れてゐるやうに見える。毛色は一体にやまいぬよりも淡い。山地・平原・深林等に棲み、鼠・兎・鹿、その他鳥類等を捕へて食べる(第二十四圖)。行動が敏速、神出鬼没、忽ち現はれ忽ち去る。性残忍で往々旅人が害を被ることがある(第十七圖)。外國産の狼に近いものにハイエナ(縞狼)といふのがある(第二十五圖)。これも恐ろしい猛獸である。

やまいぬやおほかみは右のやうに犬の形に似てゐるけれども、その性質の上から、



狼ふそおを鹿馴 圖四十二第

とても今の飼犬の祖先とは考へられない。飼犬には、その毛色や形や、大きな種々が、種々なものがあ



ナ エ イ ハ 圖五十二第

四二

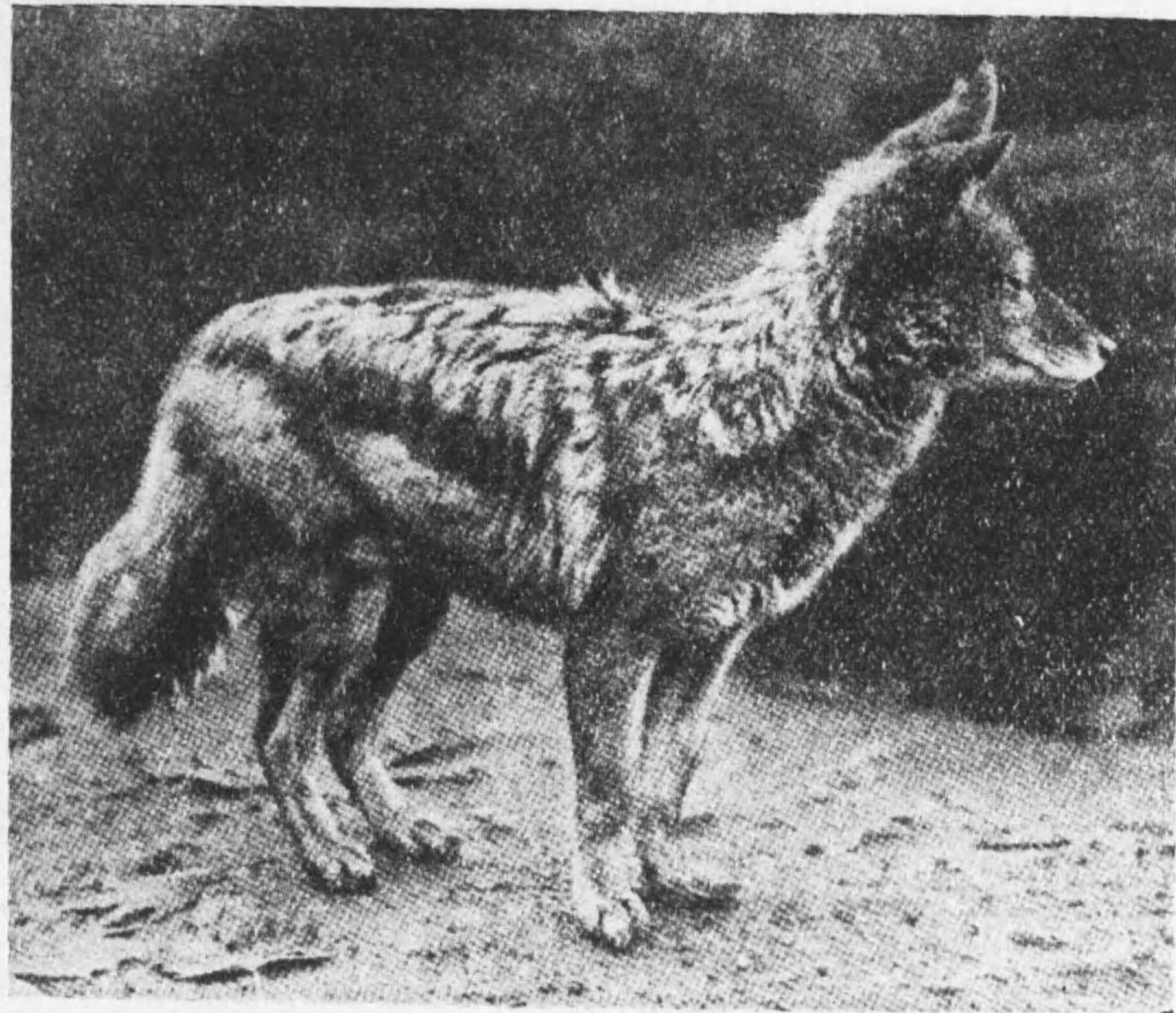
る所を見ると、犬は唯だ一つの祖先から出たのではなく、人の手で馴らした様々な獸を雜種にして巧妙にその野性を變化させたものであらう。さうしてそれ等の犬の祖先の一つと考へられるものに

ジャツカルがある。

(五) ジャツカル ジャツカルは今もアジアとアフリカに澤山ある。少し狼に似てゐるが、狼よりも形が小さく、そして人を害しない。毛色は概して赤褐で、腹は白く、背中は黒い。口が尖つて、耳は立つてゐる。非常に臆病な獸で、虎や獅子が食ひ残して

行つた肉を食べてゐる。時に群をなして村はづれに出て来て、鳥や魚の肉を見つけよ
うとして集つて来る。晝の間は岩の洞穴にねて、夜になると食物を求めに出て来る。
そして夜中鋭く吠え續けて、村民の安眠を妨げることがある。その鳴き聲が野性にか
へつた犬の鳴聲に似てゐる(第二十六圖)。

ジャツカルは犬のやうにワン／＼と吠えることを知らないが、ジャツカルを犬と一
緒にして置くと、その吠え方を覚える。初めは下手だが、段々少しづつ上手になり、
間もなく犬と同じやうになる。ジャツカルは全身から強い魚のやうな生臭い臭を出す
が、犬は駆けまはつて身体が熱くなつた時の外は何の臭も出さない。ジャツカルは今
も容易に人に馴れる。腹が空くと何か食物を興へる主人に優しくまつまりつく。けれ
ども犬のやうには温順でない。多少犬と違つた性質はあるけれども、それは狼ややま
いぬとの比較ではない。そこで犬の祖先の中には多分ジャツカルなどが雜つてゐると
いへやう。



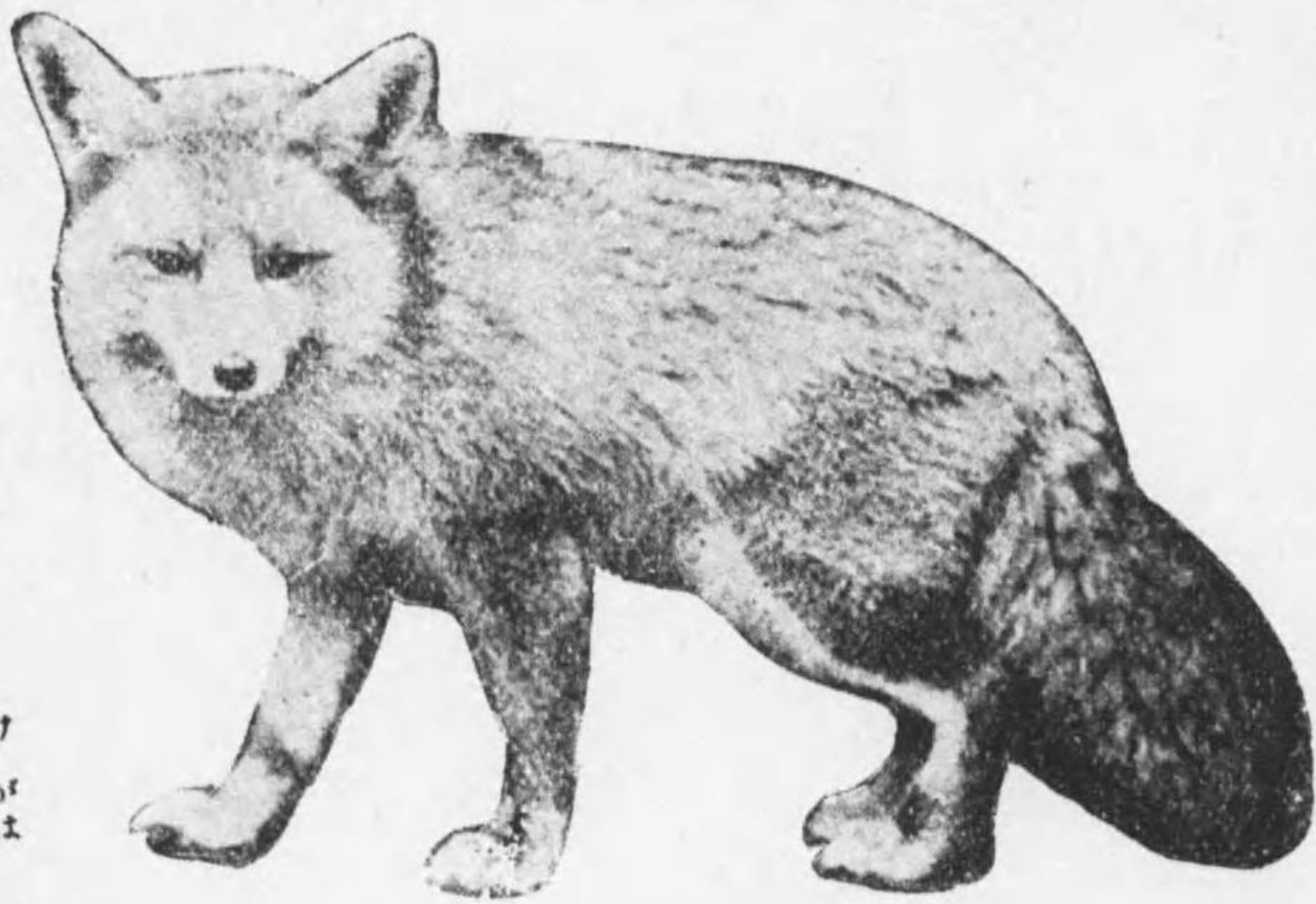
ルカツヤジ先祖の犬飼 圖六十二第

そればかりではない。アピシニアの山中には、非常に身体の細長い、長い尾の捲き上つてゐるジャツカルがある。耳が垂れずに立つてゐる外は、何所から見ても全くグレーハウンド種の犬と同様である。さうしてその地方には現にジャツカルが非常に澤山棲んでゐて、人家に近づき、自由に犬の仲間にも入つて遊んでゐる。この状態は犬とジャツカルが同族であることを物語るものといつてよい。犬の祖先の中にはおほかみ

ややまいぬの血がまぢつてゐるといふ説もあるが、その性質から見て、ジャツカルが中心といはなければならぬ。

(六) 狐と狸と貉 日本にほんの人家にんかに近く棲む獸けものに

狐きつねと狸たぬきと貉くさびがある。狐きつねは我國わがくにでは四國しこくと他の小島せうとうの外ほかは何所どこにでも棲んでゐる。晝ひるの間は穴あなの中なかにかくれて眠り、夜よるになると出て来て野鼠のねずみ・鼯いたち・鳥類てうるみ・蛙かへるまた又は昆虫類こんちゆうるみを食べる。時に果實くわじつを食ふこともある。飢えるうと村里むらさこに出て鶏にはどりなどを掠め去るさことがあるので人に嫌きらはれてゐる。犬いぬと同様に耳みみがさくく、嗅かぐ力が強く、動作敏捷びんせふである。忍耐力にんたいりよくが強く、その上狡猾うへかうくわつである。寒い地ち方はうに産さんするものは、その毛皮けがはが上等じょうとうなので高價かうかに賣買ばいばいせられる。今いまではその毛皮けがはを目



ねつき 圖七十二第

方に産するものは、その毛皮が上等なので高價に賣買せられる。今ではその毛皮を目

的としてこれを飼養する地方もある(第二十七圖)。我が千島には一種の白狐を産する。狸は沖繩諸島・小笠原・伊豆諸島の外は我が國何所にでも棲む。狐と同様に穴を穿つて巢となし、夜出て小さい鳥獸を捕へて食べる。形は狐に似てゐるが、足は短く耳



第二十八圖 狐

は小さく、尾は太く、毛は暗灰色に黒褐色の長い毛を交へてゐる。鼻先黒く、目のあたりが白い。毛は筆となし、皮は鍛冶屋のふいごに使はれる。肉も食べられる(第二十八圖)。

狐や狸は昔から人をだますと言ひ傳へられてゐる。かういふ狡猾な獸が旅人をおびやかして、その持つてゐる油揚げやいわしなどを掠め去ることは事實であらう。けれども狐が嫁さんの姿になつたり、狸が大入道に化けたりすることははない。それ等は大方作り話である。又眞に狐や狸に化

かされたといふ人は、大抵村中での馬鹿者か、精神の不確な酔つぱらひか、ぼけた老人かである。それ等の人が藪を見て入道と思ひ、そば畑に迷うて海と思ひ誤つたものを、針小棒大に言ひふらしたものが話の種になつたものであらう。狐・狸と共に怪獸視せられるものに貉といふのがある。所が實際は世の中に貉といふ獸はゐない。或は狸を指して貉といひ、或は次節の中に述べるあなぐまをいふことがある。何れにしても貉といふ獸は世の中に實際は居らぬことを心得て置かねばならぬ。

第三節 熊と熊の類

(一) 熊とひぐま 『アラ! 熊が立つてゐる。叔父さん! 手に何か持つて食べてゐる。』と、幸一君は今度は熊のはいつてゐる檻の前に立つた。見れば黒熊が、今一人の見物人の投げてやつた甘藷を食べてゐるのである(第二十九圖)。

「オヤ熊はお諸なんか食べるのですね。」叔父さんが何の返事もしない中に、幸一君は自分の観察を遂げてゐる。多分肉食をする熊がお諸を食べるのを不思議に思つたからであらう。

「ウム、熊は雑食動物です。」と、叔父さんは説明し始めた。

「雑食つて何？」

「雑食といふのは、植物性の食物も動物性の食物も両方共食べるのをいふのです。」

「それでは人類も雑食ですね。それから犬も。」



活生の熊 圖九十二第



圖十三第 熊の足と足とあ

「人類は雑食動物に相違はないが、犬は違ふ。犬はもと肉食動物であつたが人に飼はれてから雑食に變じたのだ。猫も同様です。併し犬も猫も本來は肉食類が好物なのです。」
「熊は食物が人間に似てゐるばかりでなく、よく立つことも人に似てゐますね。」

「さうです。熊の足はよく人の足に似てゐるのです。」

「どこが似てゐるのですか」

「犬や猫は趾だけを地に着けて、人間の蹠にあたる所は地につかない。そこで踵はぶつと上の方

に上つてゐる。けれども熊は人間と同じやうに踵までも地につけて歩くのです(第三十圖)。熊や人のやうな歩き方を蹠行、犬や猫のやうな歩き方を趾行といひます。(第三十圖獅子の骨骼・第十圖猫の足参照)。
「さういへば熊の足は短いやうですね。」

幸一君の叔父さんの説明によると、熊は踵までも地に着けて歩くから足が短い、従つて歩行は割合におそい。又犬猫のやうに跳躍することが出来ない。けれども爪は鋭く丈夫で、それを以てよく穴を掘り、木に登ることが出来る。またよく水を泳ぐことも出来るといふ事である。



まぐひ 圖一十三第

『こつちの熊は色が變です
ね。』幸一君はもう隣の檻を
のぞいてゐる。
『それは種類が違ふので
す。』
『ア、ひぐま(熊)と書いて
ある(第三十一圖)。そつち
はくろくま、こつちはひぐ

ま。』

『いや熊といへば黒熊のことをいふのです。この方は全身が眞黒で、喉の下にだけ三日月状の白いところがある。これを日本熊ともいひます。この熊は我國の津輕海峽以北にはゐない。主に本州に棲んでゐる。本州に棲んでゐるものでも、寒い地方に棲むものは冬眠し、暖い地方にすむものは夏眠をする。つまり自分に都合のよい氣候の時だけ活動する獸ですね。』

同じ黒熊でも朝鮮に産するものは、三日月形の斑が特別に大きい。これを月の輪熊といふ。この方はアジア大陸の特産で、日本熊の祖先であるらしい。支那人はこの熊の掌の肉を美味として食べるといふ話です。』

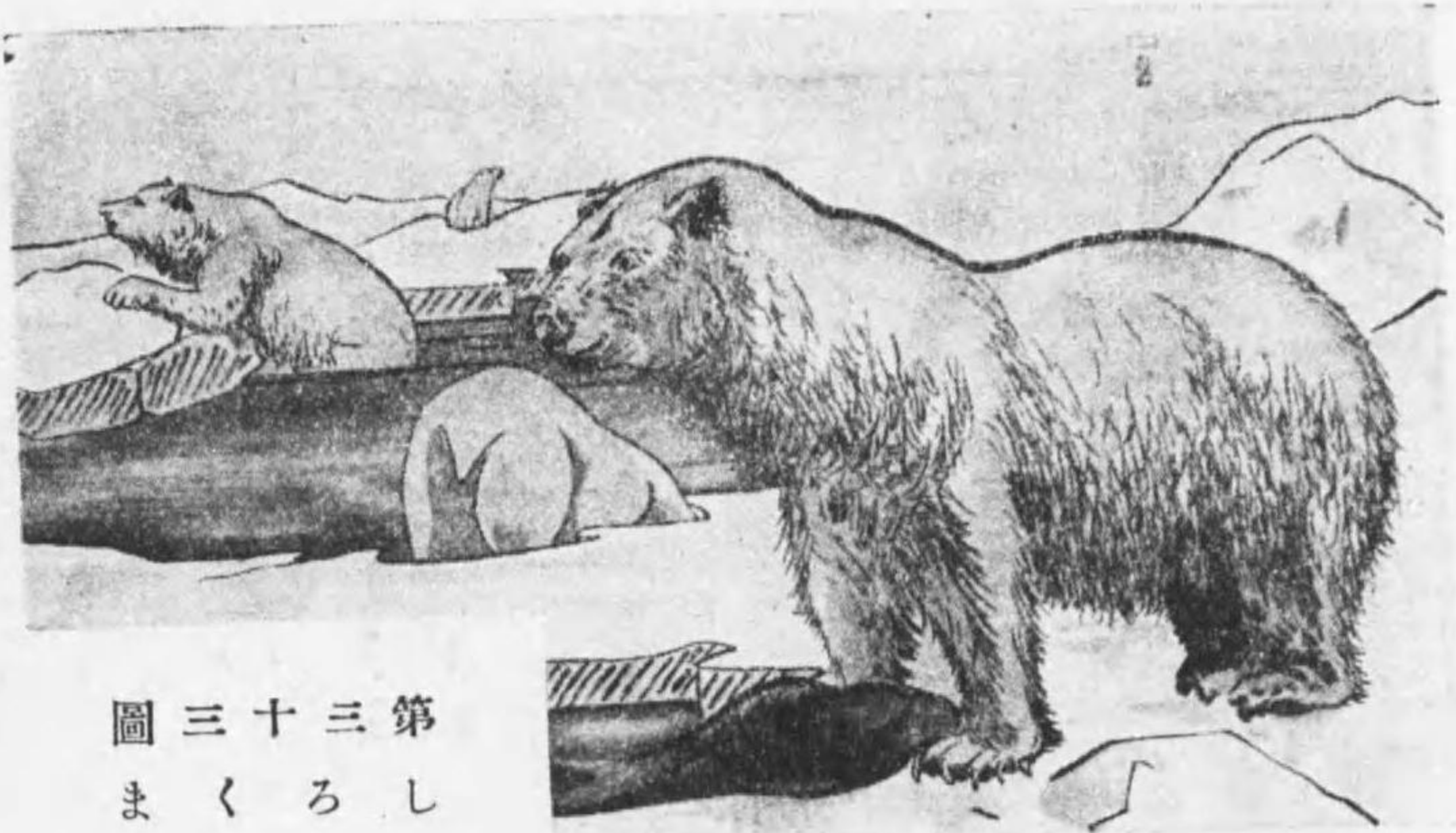
『ひぐまも本州にゐますか。』

『これは又津輕海峽から北方にしかゐりません。我が北海道・シベリヤ・北米等がその産地です。』



まぐイラマ 圖二十三第

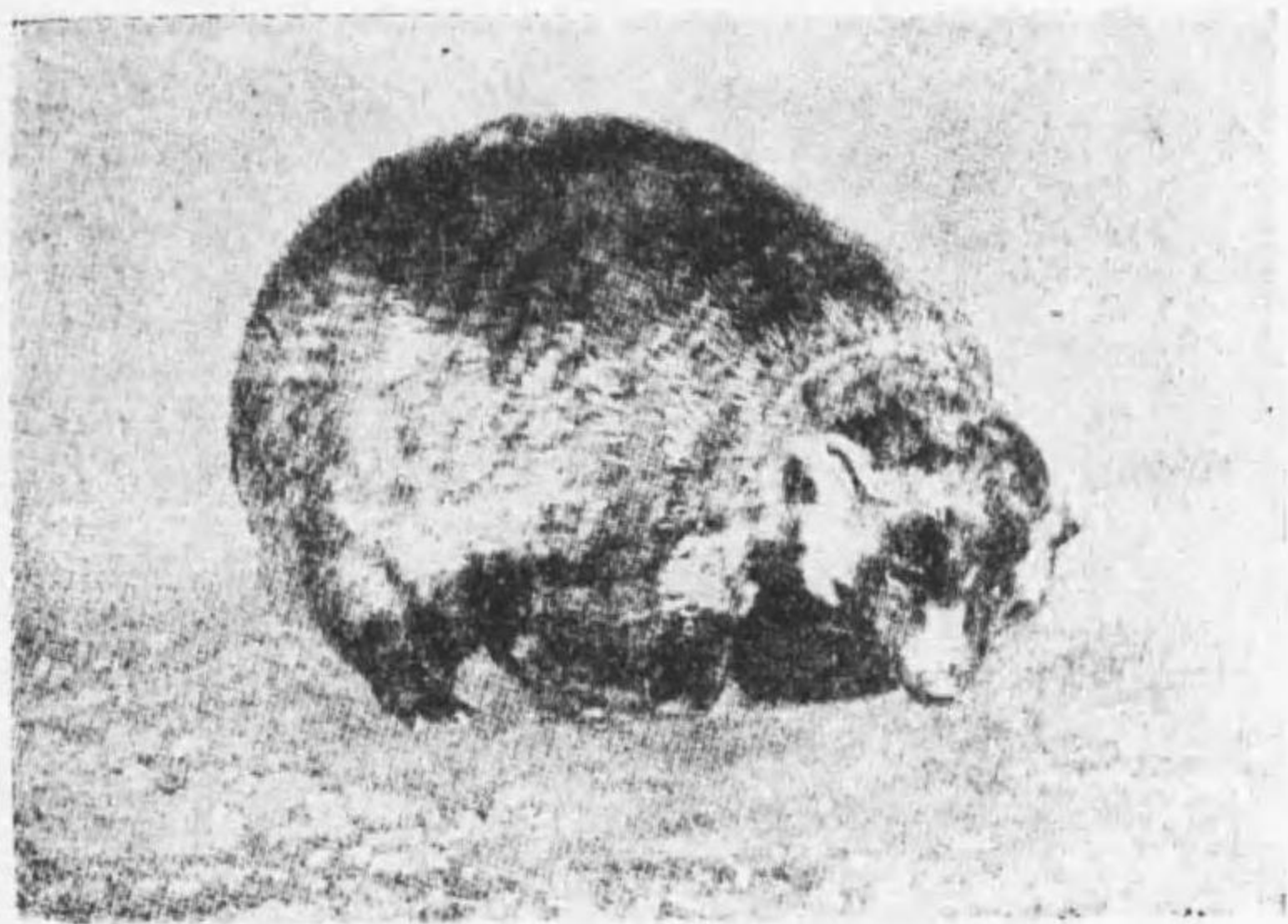
「体が大きいですね。くろくまに比べて。」
 「さう六七尺ぐらゐのがゐます。それで力が非常に強くて、北海道では時々ひぐまに馬を盗んで行かれることがある。それでゐて、木の根・果實・魚類等を食べる。幸一君は知らない？」
 「北海道の熊が川をさかのぼる鮭を捕へて食べることですか。」
 「え、そのこと。それから不思議なことは、ひぐまは蟻を食べることが非常に好きです。」
 「こんな大きな獸が蟻のやうなものを好むつ



圖三十三第 まくろし

て、おかしなものですね。」
 「オツ、これは馬來熊か。」(第三十二圖)
 「滑稽な顔をしてゐますね。」
 「そして大分毛が短い。やはり熱帯地方に産する獸だから。」
 (二) 白熊 ひぐまに似たものであかぐまといふのがあ
 る。よくひぐまと混同するが、毛の色が少し赤味を帯
 びてゐて、その爪が白いといふことである。これは擇
 捉島に産する。
 もつと北方の北極地方には白熊といふのがゐる(第
 三十三圖)。千島あたりにも見ることがある。白熊はそ
 の名の示すやうに体の毛が眞白である。むしろ銀白色

といった方がよい。この色は北極地方の氷雪の上に棲むのに都合よいもので、全く保護色の役目をする。よく水を遊び、又水中を潜つてをつとせいのやうな海獸、又は海鳥・魚類などを捕へて食べる。氷雪の上に休んでゐるこれ等の獸や鳥に近づくには、



まぐなあ 圖四十三第

この白色がどれほど役に立つかわからない。その上に足の裏にも厚い毛が生えてゐるから、音を立てずにこれ等の餌に近づくに便利である。

白熊は頭が長く少しく扁たい。頸も体の割合に太くて長い。その大きいものは、後足で直立する。一寸以上に達する。冬の間は岩の隙間又は海岸の雪の下などに冬眠する。雪の下に冬眠する時には、その頂上に孔をあけて置いて、空氣の流通をよくするやうにする。

(三) あなぐま 一名ささぐまともいふ(第三十四圖)。



まぐひらあ 圖五十三第

大きさは狸ぐらゐで、頭は長く、鼻先が尖り、耳と目は小さく、尾は短い。足は短く、爪は鋭く、前足の爪は地を掘るに都合よく出来てゐる。日本内地に廣く産するもので、關東地方に殊に多い。晝間は山林又は穴の中に棲み、夜出て食を求め。又木に登ることも出来る。肉は食用になり美味である。貉といふのは多分この動物を指していふのであらう。

(四) あらひぐま(浣熊) これも小さい熊である。体は横に扁たく、足は短い。尾は長くて、それに白と黒との輪の模様が

連つてゐる。米國産の毛皮が襟巻として我國に輸入せられ、廣く用ひられてゐる。この獸に奇性がある。餌を喰べる時にそれを水で洗ふことである。何所の動物園にもよく見られる(第三十五圖)。

第四節 いたちといたちの類

(一) いたち(鼬鼠) いたちは体の長さが一尺あまりで、ごく小さい獸ではあるが、やはり食肉類である。足のひらを半分ほど地につけて歩く點は、犬猫と熊との間にあるといへる。田野といはず市街地といはず、到る所に棲んでゐて、鼠や兎の類を捕へ、鶏や家鴨などを掠め、又はその卵を奪ふ。田野に出で、はまた好んで蛙を食べる(第三十六圖)。

いたちの体は細長くて屈曲し易いので、その足が短くて強いので、容易に藪の間や垣や塀などの狭い隙間を通り、出没自在の行動を取る。それにあの黄褐色の毛色

活生のちたい 圖六十三第



が多少保護色の役目をする。なか／＼大膽なやつで、他の妨害を受ける時には、立ち止つて前足を額にかざして、敵の動作をのぞき見ることがある。さうしていよく敵に追窮せられると、肛門のまはりにある腺から一種の惡臭を出して敵を困らせる。その臭は甘たるいやうな、頭が痛くなつて嘔吐氣を催すやうな極めて不快なものである。これをいたちの最後屁といふ。屁

といふけれども人間の放屁とは性質がちがふ。いたちは鶏などを害するので、人に憎まれるが決して害獸のみはいへない。或る所で、いたち

狩をして、その地方にゐるいたちを悉く殺してしまつたところが、こんどは野鼠が非常に殖えて困つたといふ話がある。いたちは確に野鼠を驅除する點では益獸といはねばならぬ。

(二) スカンク いたちに似た特性をもつてゐる小獸に、スカンクと名づくるものがある。北米では、このスカンクが、日本に於けるいたちのやうにゐて、時には人家にはいり込むことさへあるといふ。体はいたちのやうに細長く、尾も長くてそれに長い毛が澤山生えてゐる。全体の大きさは殆ど猫ぐらゐなもので、美しい眞黒の所へ、背中から尾の方にかけて、白色の縞が二條流れてゐる。尾の下側も白い。常に尾を立て、その下側の白い部分を示すかのやうな姿勢で歩いてゐる(第二十七圖)。

スカンクは元來臆病な弱い獸で、常にのそく歩いて走ることがない。けれど非常な有力な武器を持つてゐるから、敵の害を被ることが少い。その武器といふのは、いたちと同様に肛門のまはりから出す悪臭である。その悪臭といふのがまた猛烈なも



第三十七圖 スカンク

ので、それを嗅いでほども我慢が出来ない。すぐに嘔吐氣を催すといふ有様、それがまた一哩四方にもひろがるといふのだから、たまつたものではない。

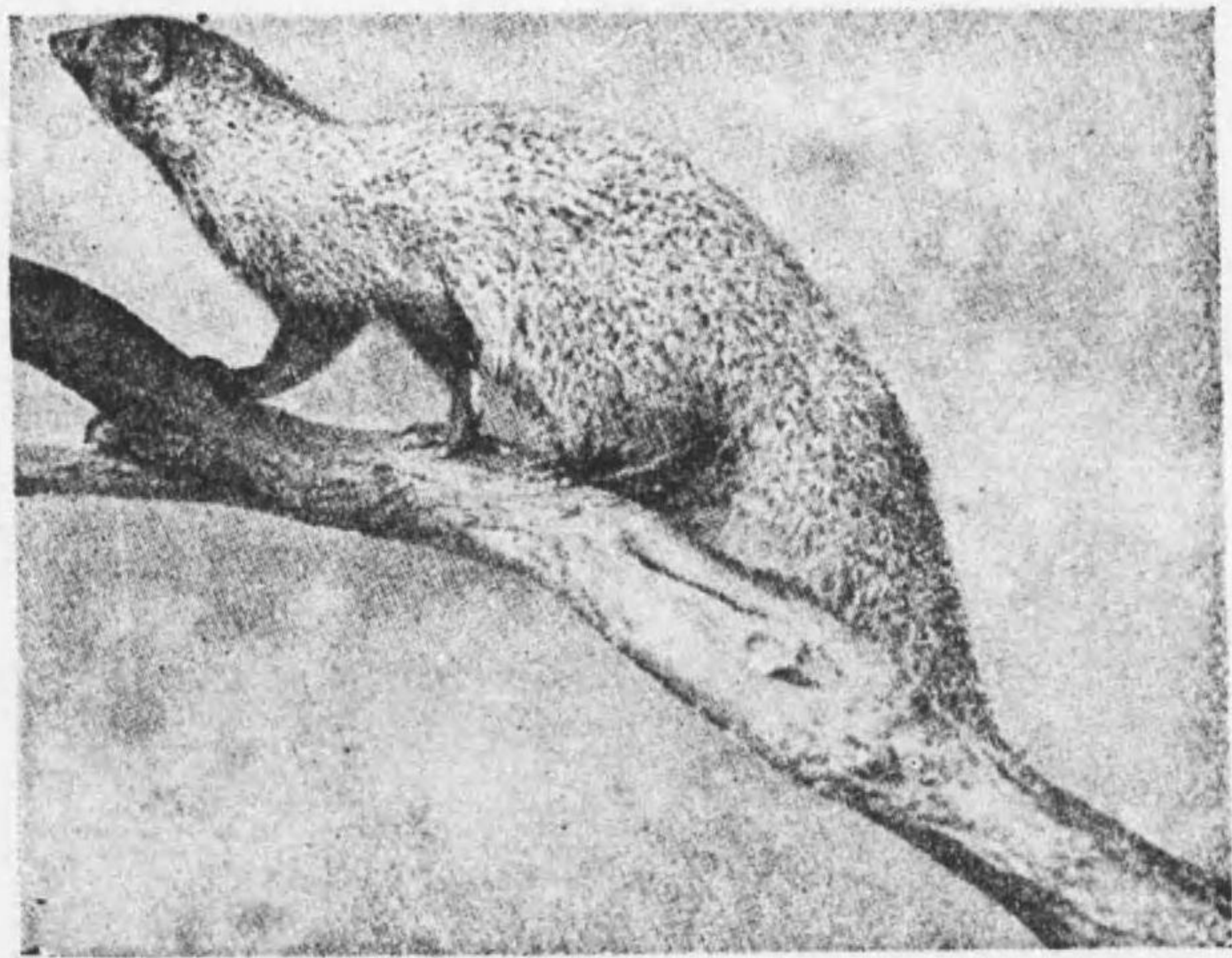
スカンクが肛門のまはりから出す悪臭は、この獸に取つては唯一の武器で、敵

が来たなら一發放つて苦しめる。だから、たとへその動作が不活潑でも、その生を完うすることが出来る。然るに体の色が黒と白で、最も目につき易い。全く保護色とは反對であるが、これが却て我が身を守るに都合がよい。

『乃公は悪い臭を出す親玉だぞ！ 乃公にさはつたら、それこそひどい目に逢ふからみんな氣をつけろ！』

といったやうに、特に目立つた色を持つてゐるから、他の動物はこれに近づかない。そこで眠る時なども安全である。動物がかういふ何か特別な武器をもつてゐて、特に目立つた色ざりをしてゐることを警戒色といふ。蜂の鮮かな色などもその例である。

スカンクは北米の灌木の繁つてゐる原野又は河岸などに、晝は穴居し夜は出でて鼠・鳥・蛙・蛇及びみづなどを捕へて食べてゐる。然るにこの頃面白い話が新聞紙によつて傳へられた。それはスカンクが度々鐵道往生をすることである。北米の大平原を伐りひらいて敷かれた鐵道線路の上に、のそりとスカンクが現はれたとする。スカンクは藪から開いた所に出て、暫く左右を見通し、時に悠々と月を眺めてゐるとする。そこへごろりと響を立て、急行列車が幕進して來る。スカンクは何時もの態度で一向にあはてない。



スーゲンマ 圖八十三第

『えらい大きな奴がやつてくるな。ナニニ彼奴も乃公の毒瓦斯で撃退して見せる。』

と、腹をふくらまして最後の一發を用意して待ちかまへてゐると、無残にも轢き殺されてしまふのである。世の中が變化してゐるのにそれに伴つた進歩をせずに、何時までも、もとのまゝの方法でやつてゐると、かういふ憂目を見る。

(三) マングース 印度地方にはマングースといふやはりいたちに似た小獸がある。併しいちより毛が長く、毛の色も淡褐色で、それに霜ふり模様がある。この獸は不思議なことには蛇をよく食べる。はぶのやうな毒蛇を

も平氣で食べてしまふ。それでその毒には少しもあたらぬ(第三十八圖)。



第三十九圖

琉球諸島にははぶがある。これには島民も非常に困められてゐる。マングースが毒蛇を食へるといふことを知つて、先年これを琉球諸島に移入繁殖せしめたことがあつた。ところが最初は大分効果があつたやうであるが、後には用をなさなくなつた。だんくその原因をしらべて見たら、マングースがはぶを食はなくなつてゐる。マングースは琉球に來て見たら蛇よりもつと好きな鼠が澤山にゐる。骨折つて蛇を探すよりは鼠を食へた方が

樂だ。そこでだんくはぶを食はなくなつた、といふ話である。

(四) てんとかはをそ てん(黃鼬・貂)はいたちよりは少し大きく、毛はもつと黄色を帯びてゐる。尤も時節によつて多少濃淡があり、夏は黄褐色だが、冬は淡色になつて尾の部分だけが黒い。毛が光澤あつて美麗であるから、その毛皮は價が高い。田舎の古寺又は人目寂しい古家などに棲み、又は古木などの洞穴などに棲んでゐて、夜出て鳥の巢などを襲ふ(第三十九圖)。

我が國で昔から雷獸といふのは、このてんをいふのであらう。抑々雷獸といふのは雷雨の時に出て來るので名けられたものであるが、老木などに落雷があると、そこに棲んでゐたてんが感電して死ぬ。その死骸が落雷の場所に横はつてゐる。それを無智の人が見て、

『ヤア、雷獸が足を踏み外しておつこちて死んだ。』

といつたものであらう。電氣の正体のわからなかつた昔のことであるから止むを得な



第十四圖 かはそ

六四

捕へて食べる。その際、蹠を以て水をかき、尾を以て舵となし、巧に水中を游泳し、出沒自在である。養魚家は、この動物をおそれる。毛皮は襟巻として上等なものである。(第四十圖)。

かはそ(水獺)もいたちに似てゐる。但し体は少し大きく、その尾はもとが太く先が尖つて頗る強い。四足は短小であるが、趾の間に蹠がある。常に河岸や池沼のあたりに穴居し、夜出て魚類を



第十四圖 ころ

ラスカにわたつてゐるアリユーンシアン群島は、道及び千島群島で獵獲せられる。

(五) 毛皮の尊いらつこ(臘虎) 虎・豹・狐・貂・水獺等、何れも上等の毛皮を供するけれども、毛皮の中で最も貴重なものはらつこのである。大きい上等のものは一枚で三千圓以上もする。だかららつこ獵はえらい金儲になる。

らつこはかはそなどに近い獸であるが、その体は大きく、体長四尺ばかり、やゝ

丸みを帯びてゐる。前足は小さいが、後足が非常に大きくて、趾の間には蹠があり、やゝ鰭の形をしてゐる(第四十一圖)。陸上の運動は甚だまづいが、水の中の游泳は極めて巧で、海流の打ちあふ波の荒い所に於て、魚類・貝類・うに類などを捕へて食べる。常に多数群をなし、遊ぶ時にも眠むる時にも、互に警戒する。それに耳と鼻とが非常に敏いから、人がこれに近づくことは容易でない。肉は悪臭あつて食ふことは出ないが、毛皮は毛が短く、軟く、黒色の美しい光澤があるので、外套の襟、帽子などとして非常に珍重せられる。しかも、この動物は一産一子で、一年に一頭の子しか産まないのに、人々が争つてこれを獵するから、今ではその数が減じ、だんく子孫が絶えやしないかといふ心配がある。そこで今では、政府はその獵期を制限し、又は禁獵區域を定めてその繁殖を助けてゐる。

群のいせとつお 圖二十四第

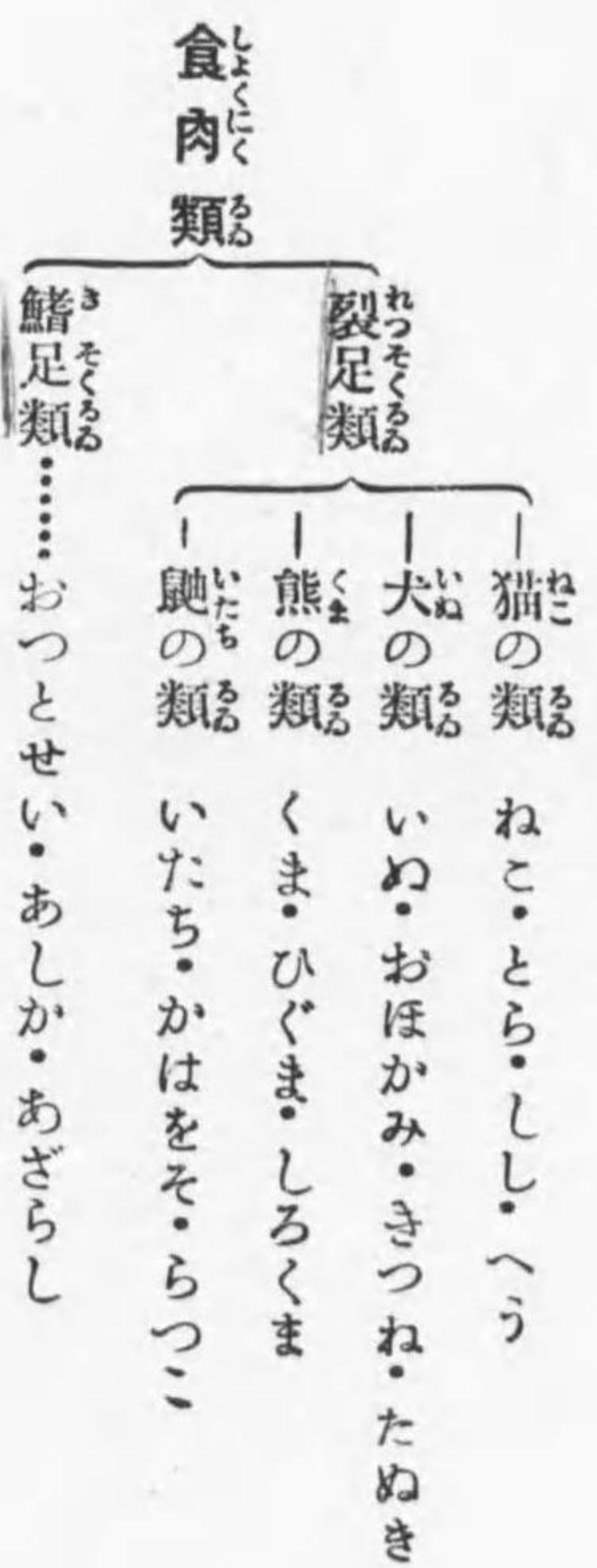


第五節 おつとせいと海獸類

(一) おつとせい(膾膾) おつとせいはらつこに次いで重要な海獸である。これは食肉類の一種ではあるが、その体の形が非常に變化してゐる。即ち体全体は甘藷のやうな形をなし、それに短い毛が一面に厚く生えてゐて、四足は鰭の形に變つてゐる。皆水中の動物を捕へ食するに都合のよい形だ。らつこの足も水中を泳ぐに都合よい形になつてゐるが、まだ鰭にはなつてゐない。らつこの方は趾が一本々々離れてゐて、その間に膜が張つてゐるが、おつとせいの方は足全体が

第五節 おつとせいと海獸類

一枚の板になつて、外からは一本々の趾が見わけられない(第四十二圖)。そこで學問上では食肉類を次のやうに二大別する。

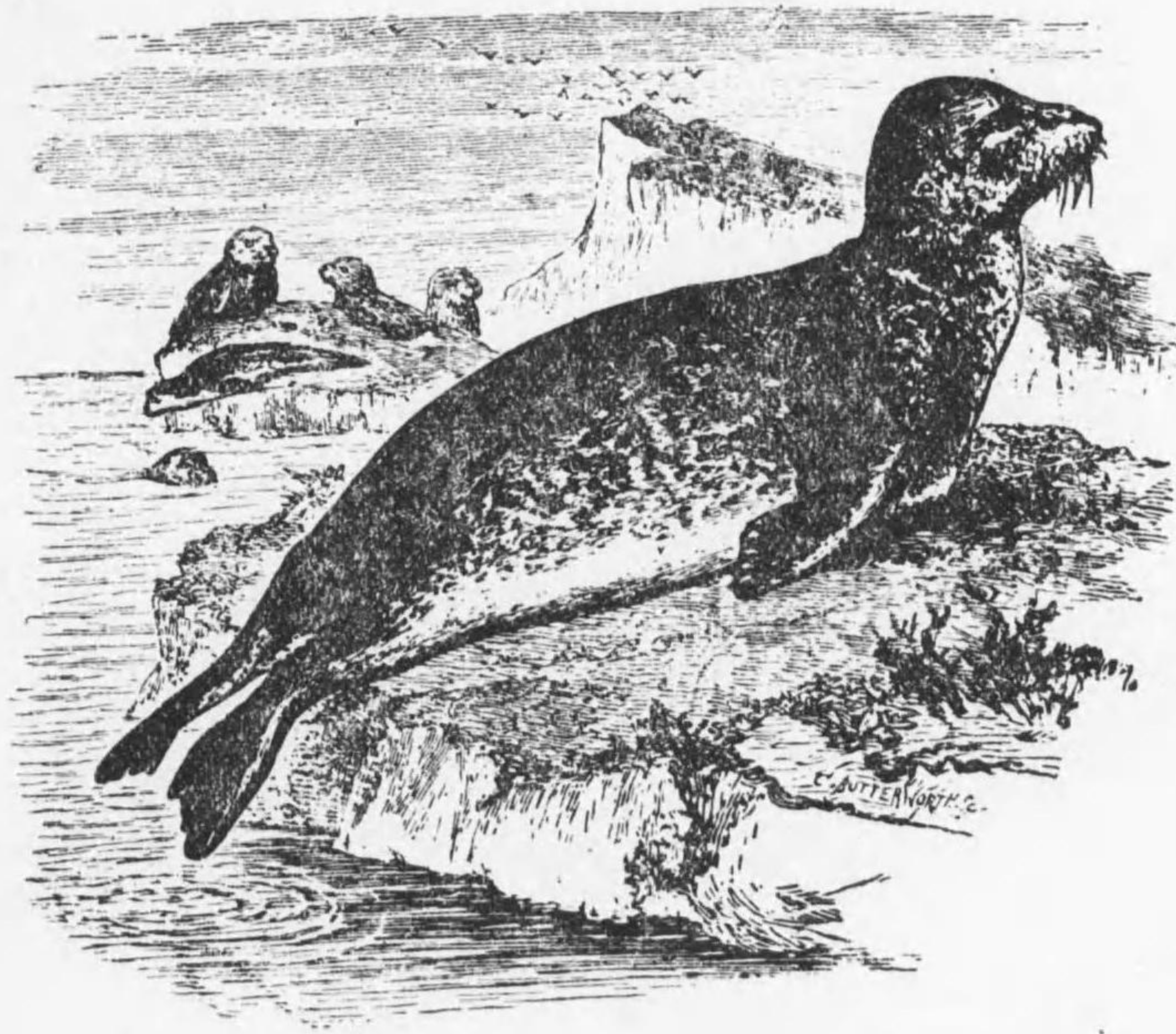


おつとせいは鱗足食肉類の中では、体の大きい方で、体長七八尺に達する。毛皮は青黒色で外套・胴衣・帽子等に賞用せられ、肉は滋養分に富んでゐる。夏になると北海の小島に集つて子を産み、冬になると再び南の方に來る。我國では金華山沖・厚岸灣・千島群島などで獵せられる。さうして海豹島を禁獵區としてある。アリユーシア群島中のプリビローフ群島とコンマンダースキー島との附近は、おつとせいの有名



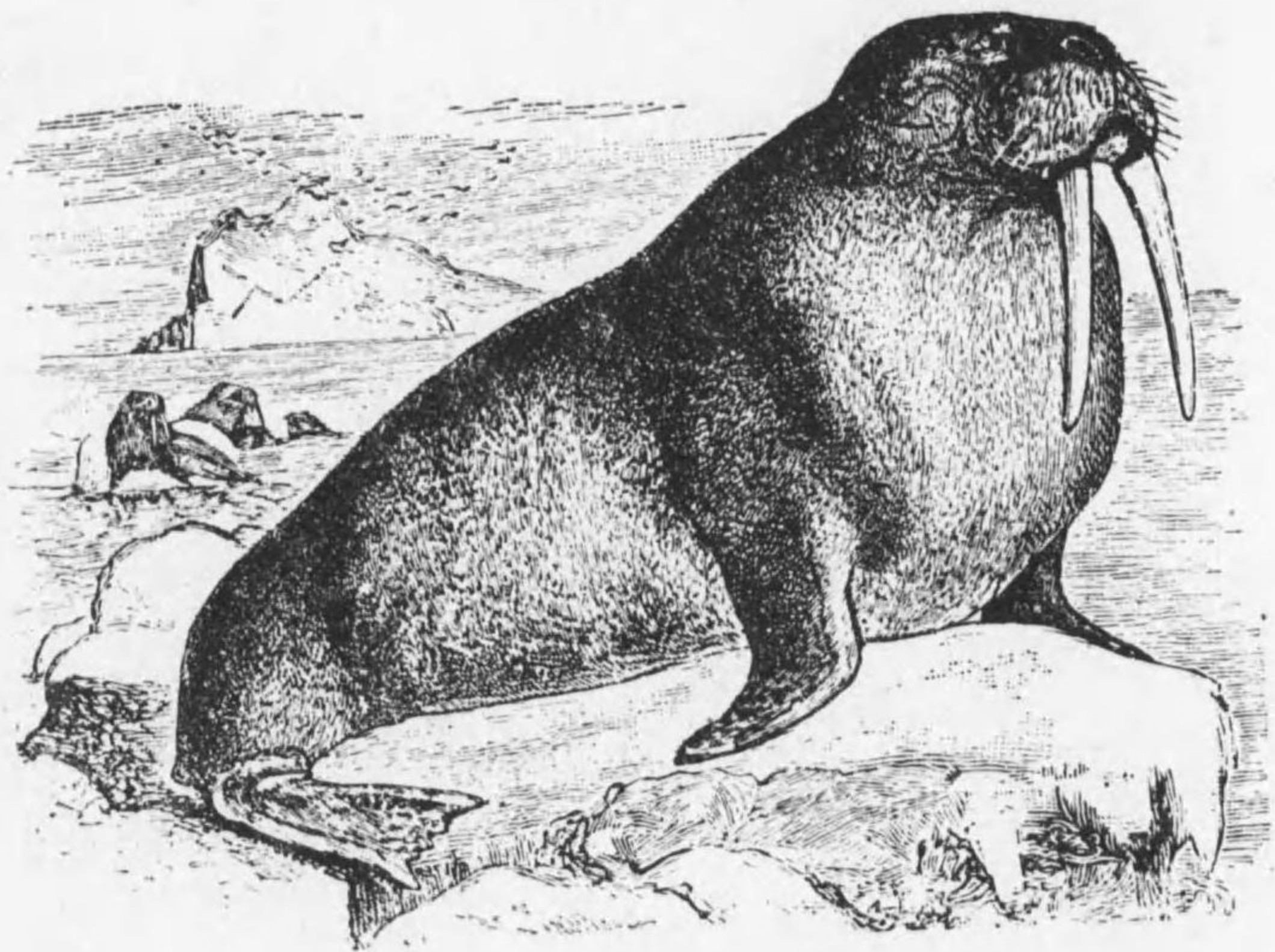
あしか 圖三十四第

なる繁殖地で、年々プリビローフ群島に集まるものばかりでも四五百萬頭に及ぶといふことである(第四十二圖)。
(二) あしか(海驢) あしかは一にとどこもいふ。我が國の近海では北は根室、南では隠岐の島がその主なる産地である。身の丈は一丈あまり、おつとせいよりは大きい。毛皮は暗褐色で毛が粗いからあまり尊ばれない。僅に敷物ぐらゐにするに過ぎない。但し皮は鞣して靴又は雨具を作るに用ひられ、齒は彫刻の材料となる。肉は少し臭いけれども食べられる



し ら ぎ あ 圖四十四第

(第四十三圖)。
 (三) あざらし(海豹) あざらしはよほご魚に近い形をしてゐる。おつとせいごあしかとは魚に似てゐるとはいへ、陸上に於て、後足を前の方に向て歩くことが出来る。然るにあざらしになると、耳のたぶさはなく、後足は体の後の方に突き出てゐて、全く魚の尾緒のやうになつてゐる。だから後足を歩く用には使へない(第四十四圖)。体の大きさも小さく、大抵五六尺よ



ち う い せ 圖五十四第

り上にはならない。その代り遊ぶことは自由自在でまことに巧なものである。毛色は灰色から灰褐色で、それに白い斑點がある。皮は濕氣を防ぐ性あるから皮箱・雨具に作り、又は敷物に使ふ。その肉も食べられる。これも亦北海に多い海獸で、我が北海道の近海にも産する。
 (四) せみうち(海象) せみうちといふ海獸は、同じくこの類ではあるが、北海道あたりにはゐない。又動物園などでは見られない。これは白熊と同様に北氷洋の氷雪上に群棲するものである。

せあうちは非常に大きい獸で、長さ十尺から十二尺、時に二丈あまりに達することがある。そして体が非常に肥え太つてゐる。併し、体の大きい割には頭が小さく、眼も亦小さい、上顎の犬齒が二尺あまりも長く口の外に出てゐて、如何にも象を思はせる所がある。海象とはかういふ所から名けられたものであらう(第四十五圖)。

さてこの牙は無論攻撃防禦の武器となるものであるが、その外種々の目的に使ふ。先づ海面にはりつめた氷を突き破つてその上に出る時に使ふ。又は岩角などにこれを突つけて、氷山などに上るのにも使ふし、或は又砂の中の貝類を掘り求むるにも使ふ。この牙が所謂海象牙といはれるもので、彫刻の材料となり、又はその他の裝飾品に用ひられる。

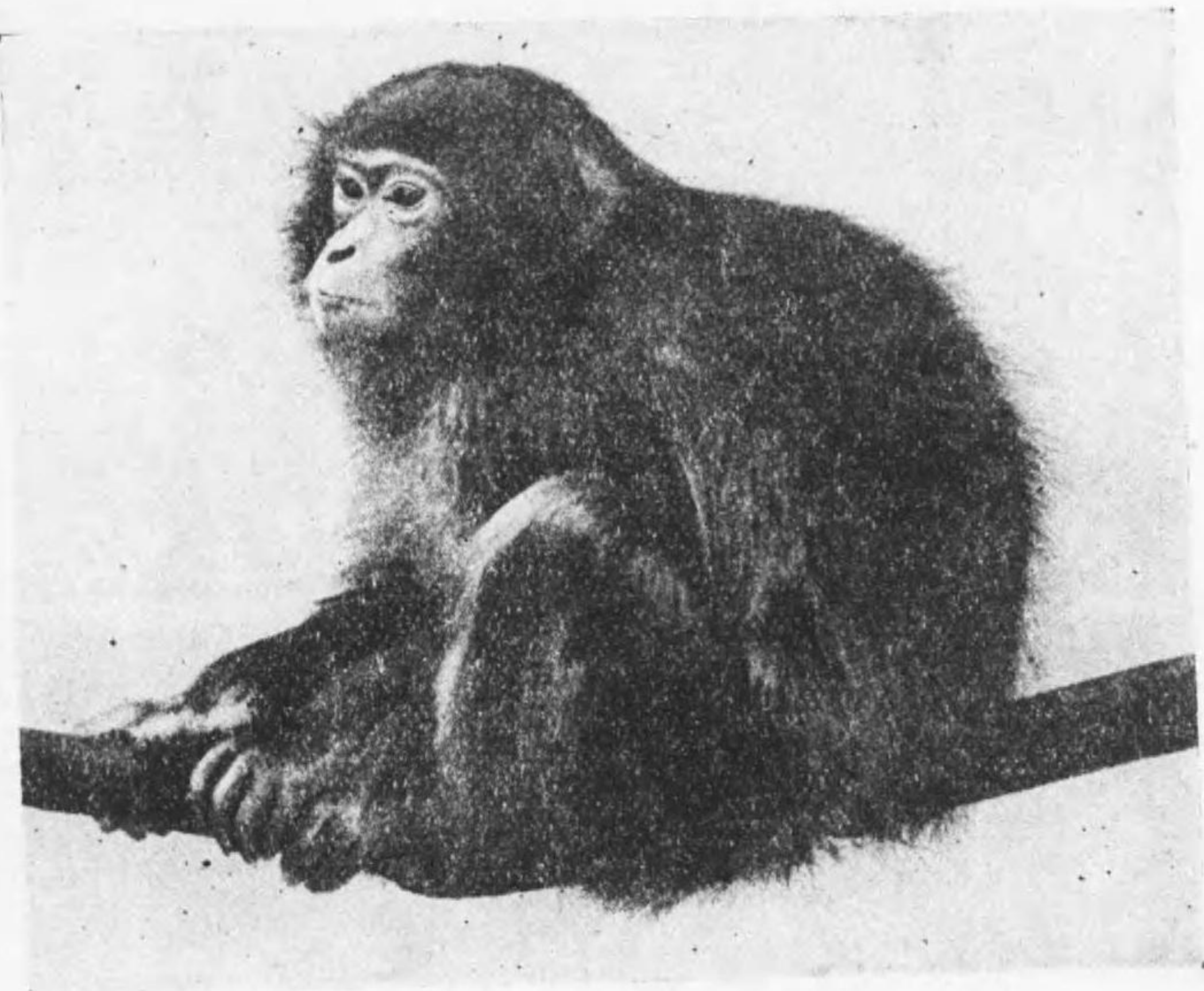
圖で見てもわかる通り、容貌が如何にも獐悪である。人が近づいても容易に逃げ去らうとせず、却つて一隊に集合して進撃して來るといふことである。

第二章 猿 猴 類

第一節 普通の猿と擬猴類

(一) 日本産のさる(獼猿) 日本特産の猿を動物學上たゞさると呼ぶ。北海道・琉球・對馬などにはこのさるを産しない。日本内地の山林中に樹上に群棲し、果實や木の葉などを食べてゐる。身長は二尺ばかり、全身に暗褐色の毛が生えてゐるが、顔だけは人に似て毛少く、眼は前に向いてゐる。併し、これを人の顔にくらべて見れば、顔の色が赤く、鼻が低く、唇は殆ど外に現はれず、口吻が突き出てゐる。その上頬に頬袋といふものがあつて、食物を一時これに貯へて置き、後少しづつ出して食べる(第四十六圖)。

さるの齒は又人の齒に非常によく似てゐる。その數もその形もまことによく似てゐる。



猿 本 日 圖 六 十 四 第

七四
る。骨の構造・内臓・扁たい爪・握ることの出来る手・後足で立つ姿勢・智能の發達したところ・一産に一匹の子を産むことなど、舉げて見ると、人に似てゐる所が多い。

さるは人によく似てゐるが、詳しく吟味するとまた異なる點がある。その一は、前に述べた全身に長い毛の生えてゐること、口の中に頬袋のあることである。

その二は、尻に胼胝と一寸あまりの短い尾とがあることである。その三は

て
手は足よりも長く、足も亦物を握ることが出来ることである。これは手と足とで枝を握り、木の上の生活をなすに便利である。その四は、さるは足で立つことが出来るけれども、長く直立をうけることが出来ないことである。

第四十七圖 をながざる



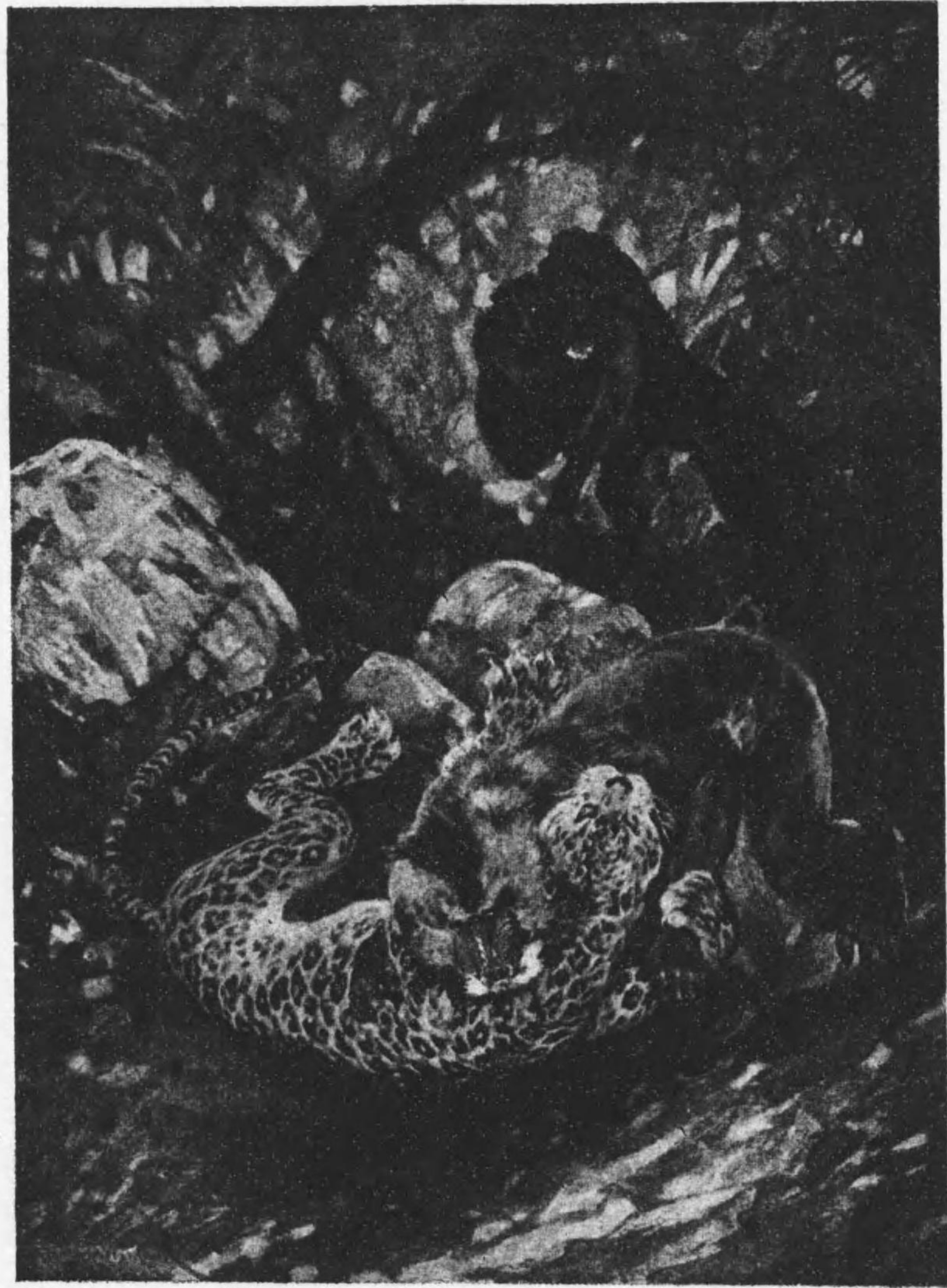
(二) をながざる(尾長猿) アフリカ・アジアの熱帯地方に産する猿に、を

ながざるといふのがある(第四十七圖)。種類が多い。我が臺灣にもその一種がある。よく人に馴れ、公園や動物園などの愛嬌者になつてゐる。体は小さく、胴は一尺五寸



ひ ひ 圖八十四第

ばかりであるが、尾は長くて二尺以上に達するものがある。
(三) ひひ(狒々) ひひは兇暴なる猿である。口吻が長く突き出て、顔の様子がやゝ犬に似てゐる。体長三尺から五尺ほど常に地上に生活して



闘 の こ 豹 こ 々 狆



第四十九圖 たるざぐる

(四) てんぐざる ボルネオ島に産する小形の猿である。鼻が長く、天狗のやうに突出してゐる。牡の老いたるものは殊にこの鼻が長い(第四十九圖)。

犬のやうに四つ這ひの姿勢を取ることが多い(第四十八圖)。顔に黒色の胼胝があつて見にくく、性質も極めて荒い。よく猛獸と戦つて敵を倒すことがある(第二彩色版)。アフリカ及びアラビヤの深林に棲む。バブーン・チャイマ・マンドリルなど種類が多い。



第五十五圖 尾をまきざる

これに反して印度、アフリカ等に産する猿は、尾は長くとも物に巻きつくことは出
 来ず、齒は三十二枚、鼻の孔は狭くて下の方に向く。故にこれを狭鼻類といふ。
 (六) くもざる これも南米に産する小形の猿である。手は短く、その拇指がない。足
 と尾とが非常に長く、深林中の運動が如何にも蜘蛛の姿勢に似てゐる。爪は皆扁平
 ある(第五十一圖)。

(五) をまきざる 尾が長くても力強く、枝に
 巻きつくことが出来て、樹上の運動自在で
 ある。南アメリカに産す(第五十圖)。南米
 産の猿は、何れも皆尾が長く、これを枝に
 巻きつくことが出来る。そして齒の数が三
 十六枚あり、鼻の孔は前側方に向つてその
 間が広い。故にこの種の猿を廣鼻類といふ。



第五十五圖 尾をまきざる

爪で、他は皆猫のやうな鋭い鉤爪をもつてゐるから、
 それでまた樹に登ることが巧である。毛は絹のやう
 に柔く、耳に長い毛が生えてゐる(第五十二圖)。

(七) ほえざる これも南米産。その聲が大
 きく、十數町の遠方までも響く。爪は皆扁
 爪である(第五十一圖)。

(八) きぬざる 中央アメリカ及南米の産。
 体が小さく鼠に似た所もあるので、一にねず
 みざるこ

もいふ。
 手の拇指
 だけが扁



第五十二圖 尾をまきざる



第五十三圖 獅子をしるる

八〇

(九) ししをざる 南米産。

きぬざるに近いもので、手の拇指だけが扁瓜、他は皆鉤瓜である。頸の部分にある長い毛が獅子に似てゐる(第五十三圖)。

(五) 擬猴類 南方印度・

マダガスカル・アフリカ

なごの森林中には、半ば普通の猿に似て、半ばは食肉類に似たものがある。これ等を擬猴類と呼ぶ。主として夜獣で、顔に毛が生えてゐる。門歯と犬歯とは猿に似てゐるが、臼歯には多くの小突起を有し、食肉類、食虫類のそれに似てゐる。その主なるもの次の通り。

(1) ねござる

ロリス・

コンカン

又は夜猿

ごもいふ

時々見せ

物に出づ

る結界と

名づける

ものが亦

この種で

ある。尾



第五十五圖 つきねざる



第五十四圖



るぎびゆ 圖六十五第

八二
の無い、肥つた小さい獸。足の第一番目の趾だけが鉤爪で、他は皆扁爪である。印度・マライ・ボルネオ等の産(第五十四圖)。
(2) きつねざる 俗にマキ又はレムウルともいふ。マダガスカル島の森林に産し、顔に毛あり、形狐に似てゐる。足の第二趾は鉤爪。

口に上下二枚の舌をもつてゐる(第五十五圖)。

(3) ゆびざる 俗にアイアイといふ。猫ぐらゐの猿で、第一の指と趾とは扁爪があり、他は皆鉤爪である。手の中指が非常に細長く、針金のやうに細くなつて、木の中に棲む昆虫を掘り取つて食べるに都合がよい(第五十六圖)。

第二節 高等なる猿類

(一) 高等なる猿類とは 一口に猿類といつてもいろいろゝゝある。その下等のものは顔に毛が生えてゐて、爪は鉤爪、齒の



々猩黒・人黒・々猩 圖七十五第

數も人どちがふのがある。普通の猿は口に頬袋あり、尻に腓胝と尾こがある。然るに、高等の猿になると、さういふものがなく、非常によく人に似てゐる(第五十七圖)。よつてこれを類人猿といふ。猩猩・黒猩猩・ゴリラ等はその例である。

(二) **てながざる(手長猿)** 手が非常に長くて、直立しても地に達する。身長は三尺ばかり、直立して歩むことも出来るし、尾・胼胝・頬袋なく、よほご人に近い所がある。



るざがなて 圖八十五第

(第五十八圖) 音聲が頗る高い。スマトラ・マライ等の東印度地方の森林に棲んでゐる。

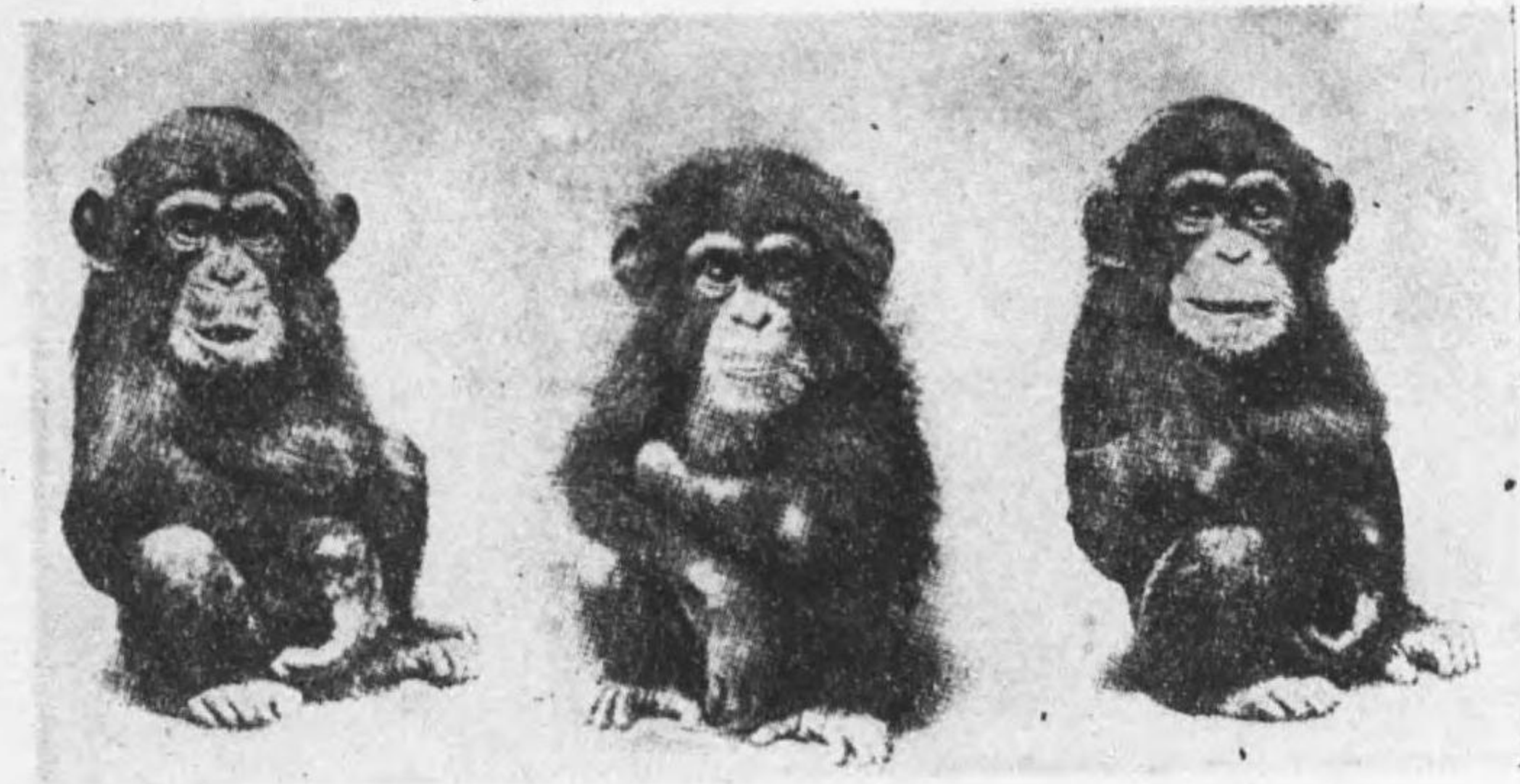
(三) **しやうじやう(猩々)** 最も人に近い猿は

猩々である。普通**オランウータン**と呼ぶ。オランウータンとは、マライ語で森の人といふ意味である。スマトラ・ボルネオ兩島の森林にだけ産する。身長は四尺ばかり、皮膚は黒く、顔はやゝ鉛色をしてゐる。毛は赤褐色で長く、牡にはそれが一尺も長いがある。頬に袋なく、尻に胼胝も尾もない。手足が長く、殊に腕の力が強い。足も枝を握ることが出来るから、樹上の生活に最も適してゐる。



々猩るるに巢 圖九十五第

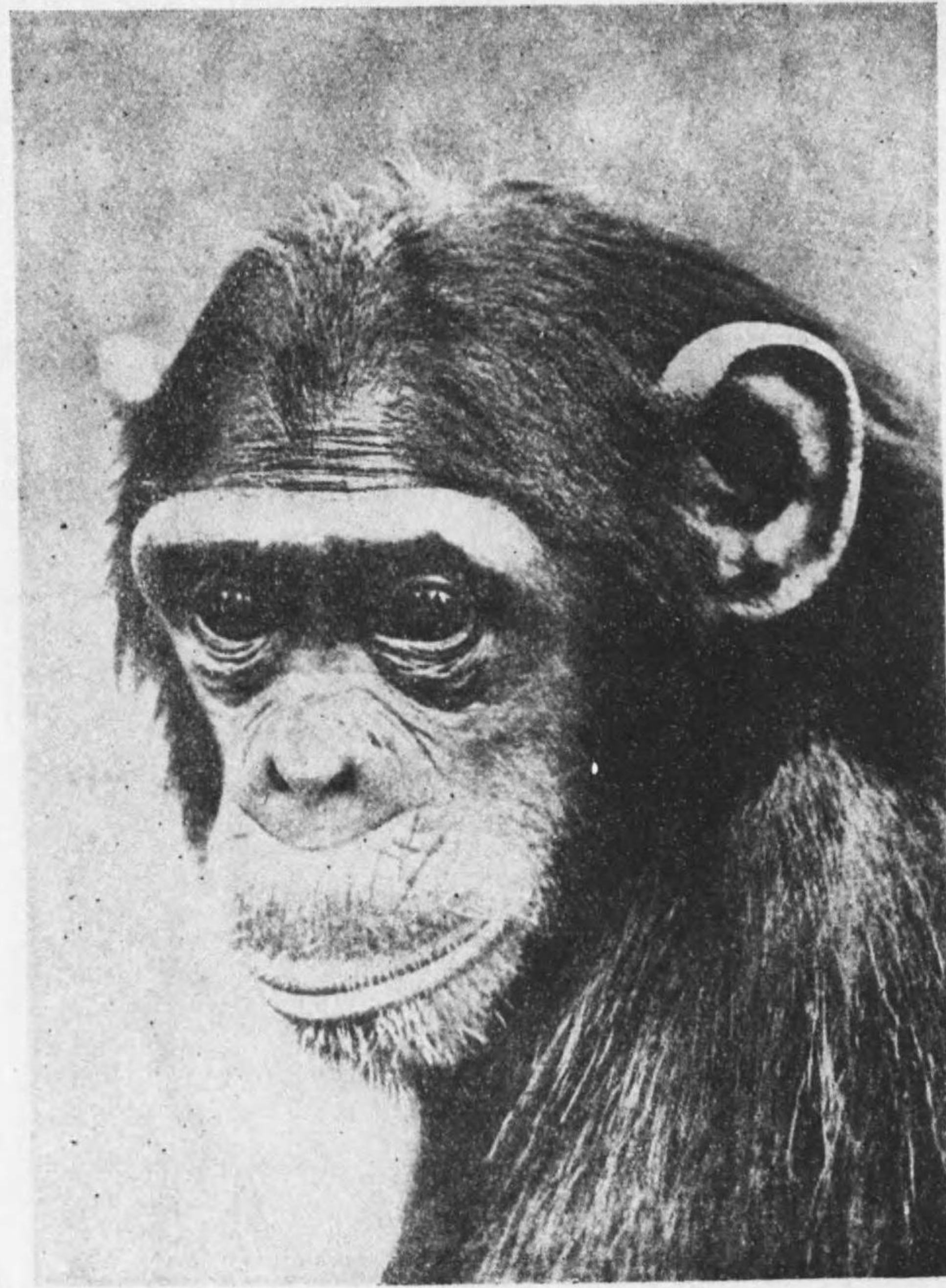
第六十六圖 黑猩猩



おそれ よころび いかり

八六
樹の又のある所に小枝を積み、葉を敷いて、鳥の巢のやうなものを作り、夜はその上に眠る（第五十九圖）。若葉・新芽・果實などを食物とする。稀に地上に下りて來ることはあるが、人のやうに直立しない。常に手を以て体を支へて歩く。怒れば兇暴となるけれども、平常は人に害を加へない。性質は温和であるが、さう賢しい方ではない。

（四）くろしやうじやう（黑猩猩） 猿類の中で最も賢いのは黑猩猩である（第六十圖）。俗にチンパンチーと呼ばれる。アフリカの熱帯地方に産し、身長四五尺ある。全身暗黒色で顔は黄色、毛は黒褐色で柔である。鼻は小さいけれども口は大きく、唇は

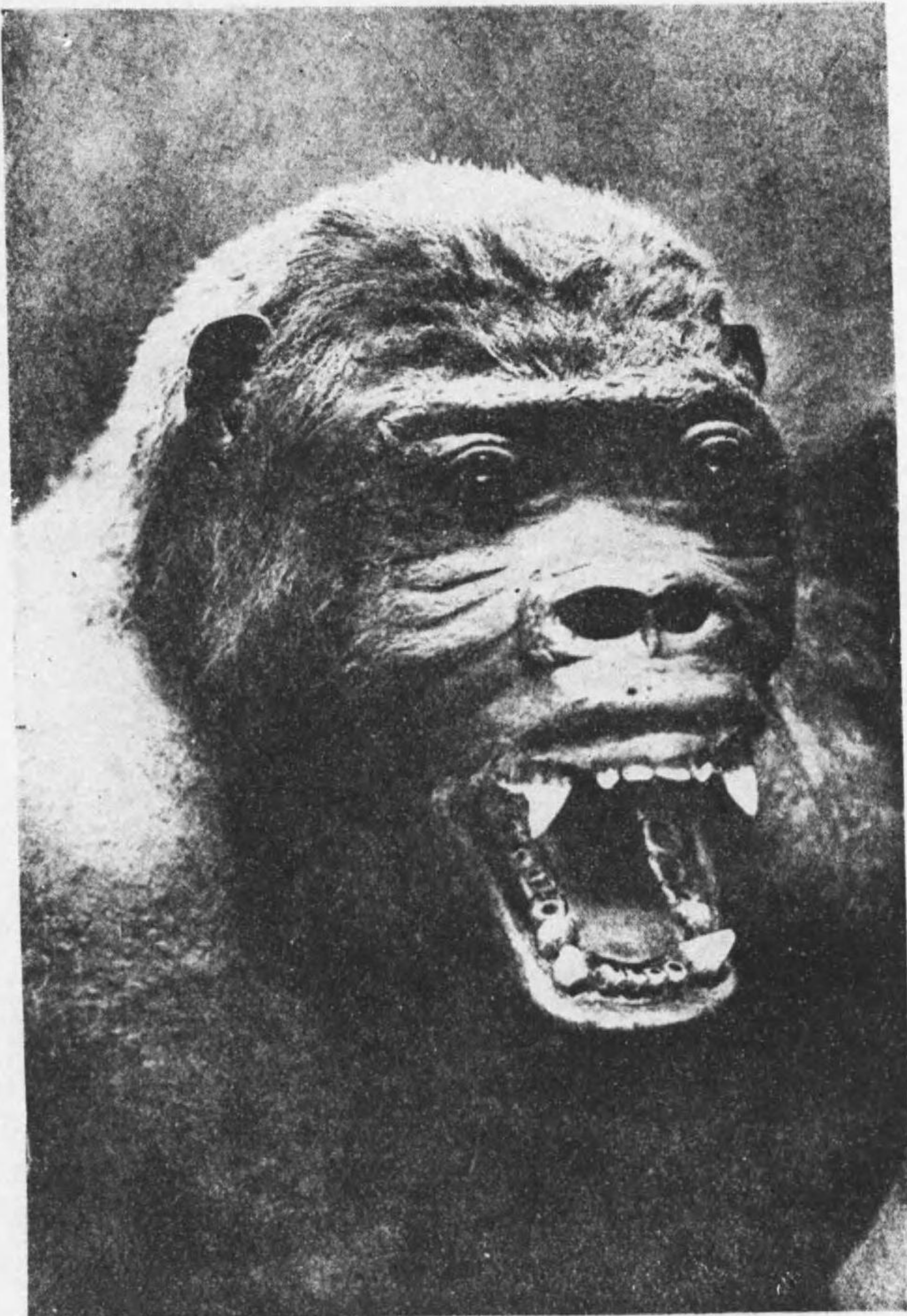


八七

第六十一圖 黑猩猩

割合に厚い（第六十一圖）。手は細く、足はほぼ同長である。足の平を地につけて直立する有様なども

よほど人に似てゐる。無論、頬袋や胼胝や尾をもつてゐない。木の上に巢を作る時には、その上に屋根を設ける。
（五）ゴリラ（大猩猩）大猩猩



ラリゴるれ怒 圖二十六第

は黒色を帯び、体には黒褐色の毛が生えてゐる。骨格偉大(第六十三圖)。腕の力と顎

いふ和名がついてゐるが、むしろゴリラといふ方が一般に通じる。体の長さが五尺五六寸から七尺に達するものがある。顔

の力が殊の外強く、様子が如何にも猛悪さうである。アフリカの森林に棲み、常に果實を食としてゐる。土人は獅子よりもこれを恐れる(第六十二圖)。

六) ゴリラ狩の話 『これで私の猿類の話はすんだのです。』

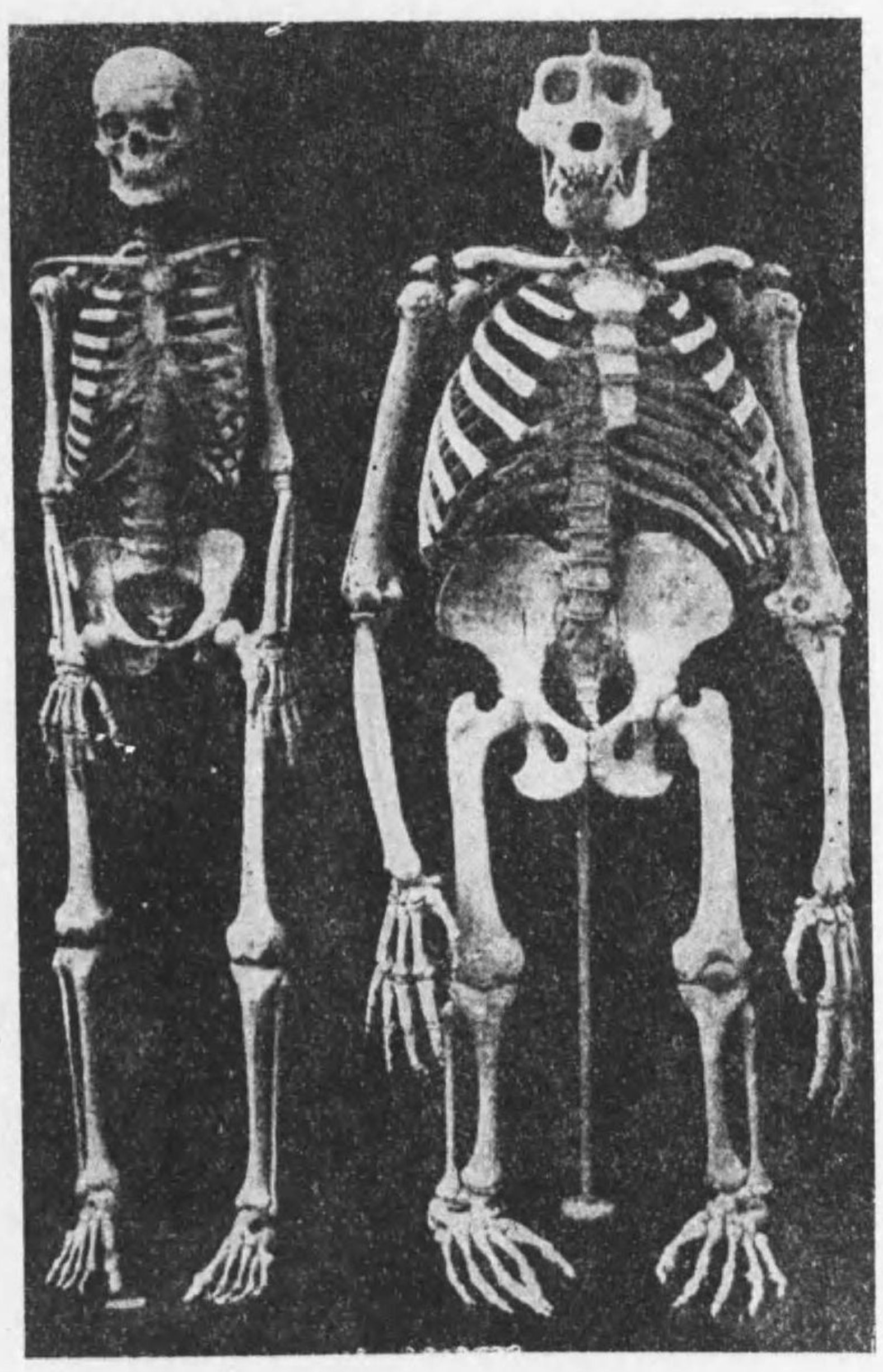
叔父さんは動物園を出る時に、幸一君にかういつた。今日一日を動物園で暮らし、叔父さんの説明で、幸一君はもうえらい動物學者になつてゐる。

『ゴリラを見ることが出来ないのは残念ですね。どうしてこの動物園にはゐないので。ゴリラの生捕は出来ないのですか。』

『いや少しは生捕りも出来るのだが、捕へられてからゴリラは長く生きてゐないんだよ。』

『大きいゴリラは人より大きいといふが本當ですか。』
『そりや本當だとも。まあ仁王様のやうなおそろしい奴だね。七尺もあるといふのだから。』

『それで仁王様のやうにまる裸なのですか。』
 『いや、毛はうすいけれども、そんなまる裸ではない。体ちうには暗黒色の毛が生えてゐる。腕と顔と手と足とは黒ん坊のやうに眞黒です。……そして腕に非常な力があつて、君の首の太さぐらゐるな木をポキポキ折つてしまふ。銃身ほどの鐵の棒などは、へし曲げて、齒で食ひつぶす。最初の一發で打ち殺すことが出来なければ、獵師の命はない。ゴ』



第 三 十 六 圖 人 の 骨 格 と ゴ リ ラ の 骨 格

リラは直ぐにやつて来て、そのおそろしい手で、獵師を引き裂いてしまふ。』

『人間などはとても相手にならないのですね。』

『それはとても駄目だ。さすがの土人もゴリラ狩はめつたにやらない。土人は獅子や象よりもゴリラがこはいのです。』

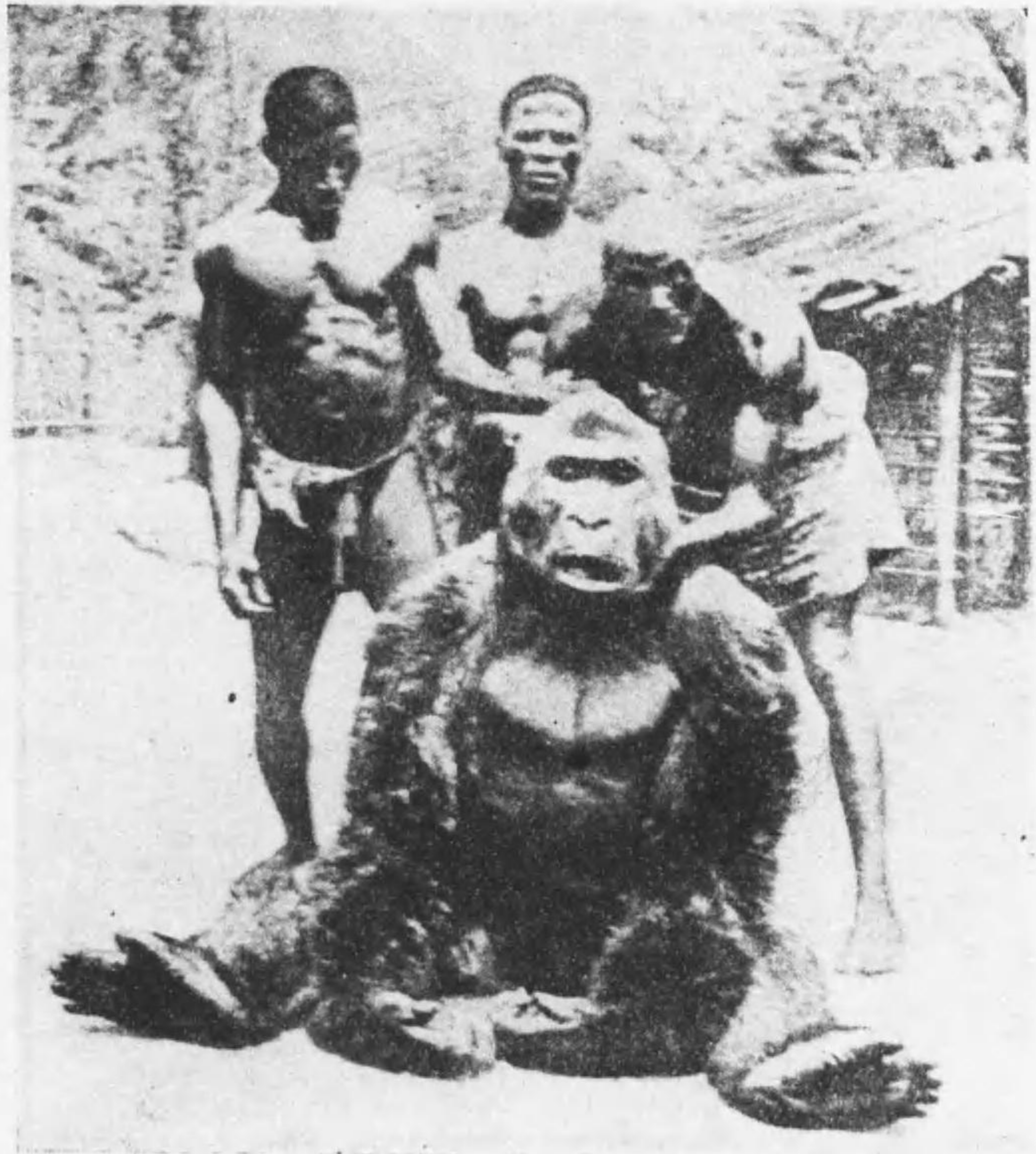
『どうしてそれが生捕にされたのですか。』

『生捕といつても、ゴリラの大人はめつたに捕れない。生捕になるやうなのは、多くはごく若い子供です。それとても捕へられてから間もなく死んでしまふ。何故に死ぬのかわからないが、多分食物が彼等の口に合はないのでせう。』

『何かゴリラ狩の話はないですか。』

『あるとも。或る時象狩の一隊が、ボートに乗つて川を上つて行つたことがある。無論アフリカでの話です。よい上陸地があつたので、ボートを捨て、川岸の森林に向つて出發した。』

欠



ラリゴたれきに捕生 圖四十六第

九二

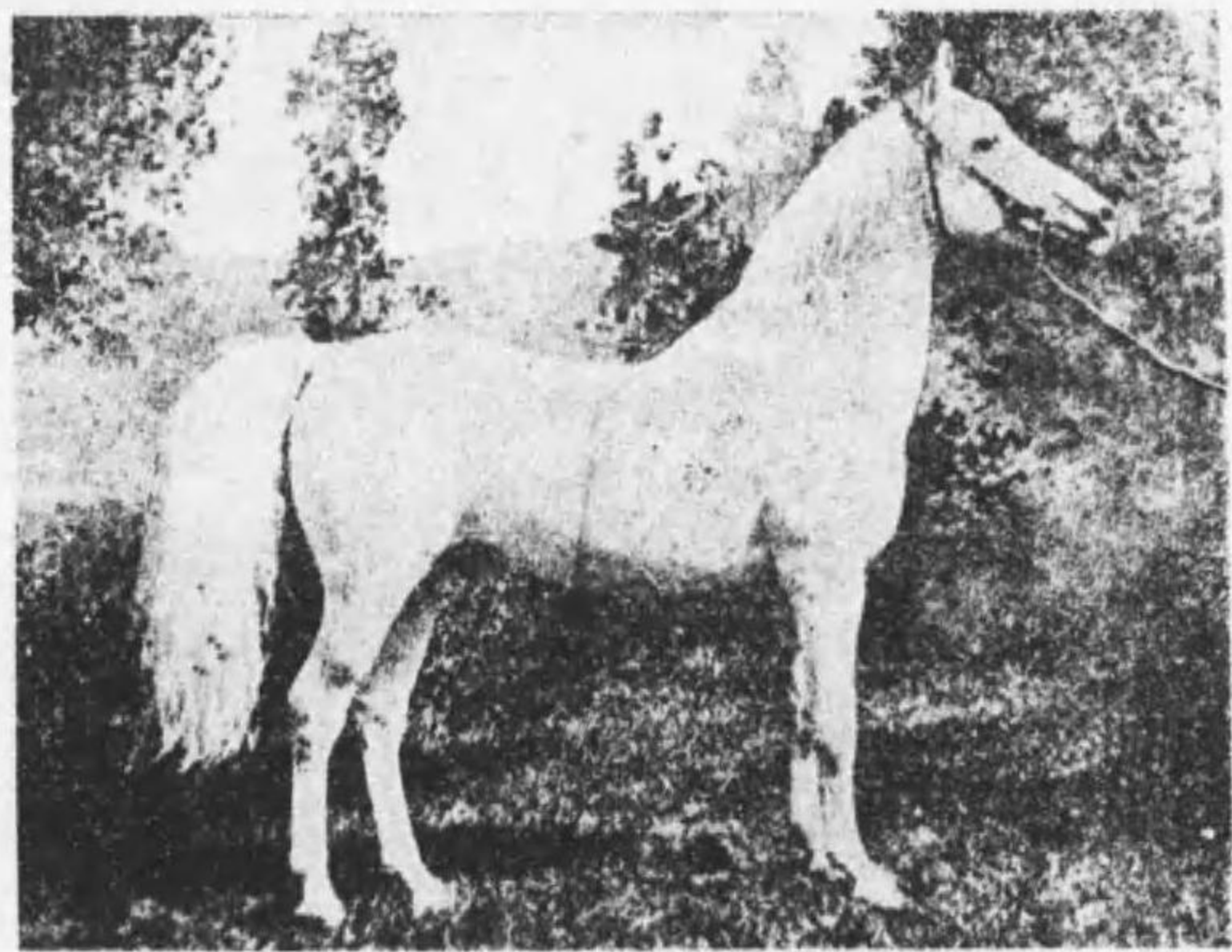
一隊が森林に入つた
と思つたら、何か雷
の轟のやうな音が聞え
た。土人は直ぐにそれ
がゴリラの叫び聲だと
知つたのです。土人は
色を失つてポートの方
へ逃げ歸つてしまつた
けれど、白人だけは
まごまごしてゐた。何
にせ、白人はゴリラが
さう恐ろしいものとは

欠

第三章 有蹄の家畜類

第一節 馬とその一族

(一) 馬の手柄 昔からの大將勇者は、その戦争の苦みと、勝利の光榮とを、あの勇ましい馬と分たなければならぬ。秀吉でもナポレオンでも、馬の厄介にならぬものはない。馬は主人と同様に大膽で、危険を見ても尻ごみをしない。馬は矢叫びに馴れ、砲聲に驚かない。主人と共に發奮し、主人と共に勇み立つ。狩りや競馬などでも主人と同様に歡びを味ふ。而かも極めて従順で、主人の指圖に従ひ、乗り手の意志を察して行動をする。馬は全く主人の心のまゝに生きてゐる動物である。胸は廣く臀は丸く、肩と股とは逞しい。馬はまた力量と敏速とを結合した動物である。胸は廣く臀は丸く、肩と股とは逞しい。足はすらりとして、頸は立つてゐる。頸に沿うたたてがみ、長い毛の豊かな尾、涼

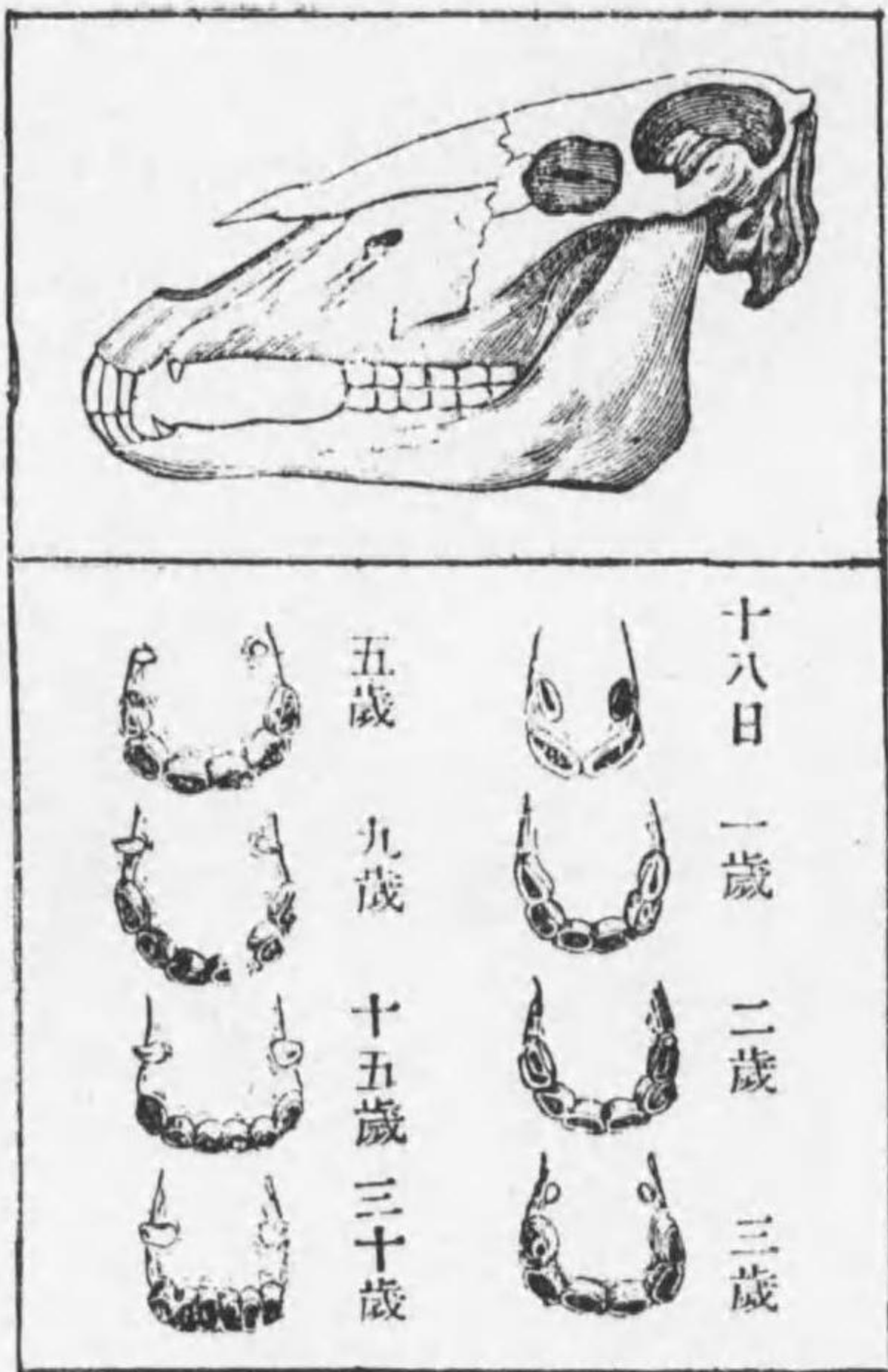


馬 アピラア 圖六十六第

しい眼、ラツバのやうな耳、さつぱりした柔い毛
 なみ、勇者の面影とは實に馬の姿である。
 馬は軍用に使はれるばかりでなく、交通用とし
 て人を乗せ、また車をひき、運搬用としては荷車
 をひき、又荷物を負ふ。農事用として田畑を耕し
 運搬を助ける。今日馬なくては人類はどれほど差
 支へるか知れない。

(二) 馬の特性 馬の特性は植物質の食物を取ること

ころから現はれて来る。先づその歯を調べて見る
 がよい。齒の中で特別に發達してゐるものは奥齒(臼齒)で、その表面に、珐瑯質(陶
 磁器のうはぐすりのやうなもの)が田畑の畝のやうに出張つてゐる。その有様は磨臼
 の面のやうである。馬は食物として取つた草や木の葉を、この奥齒で磨り碎く。だか



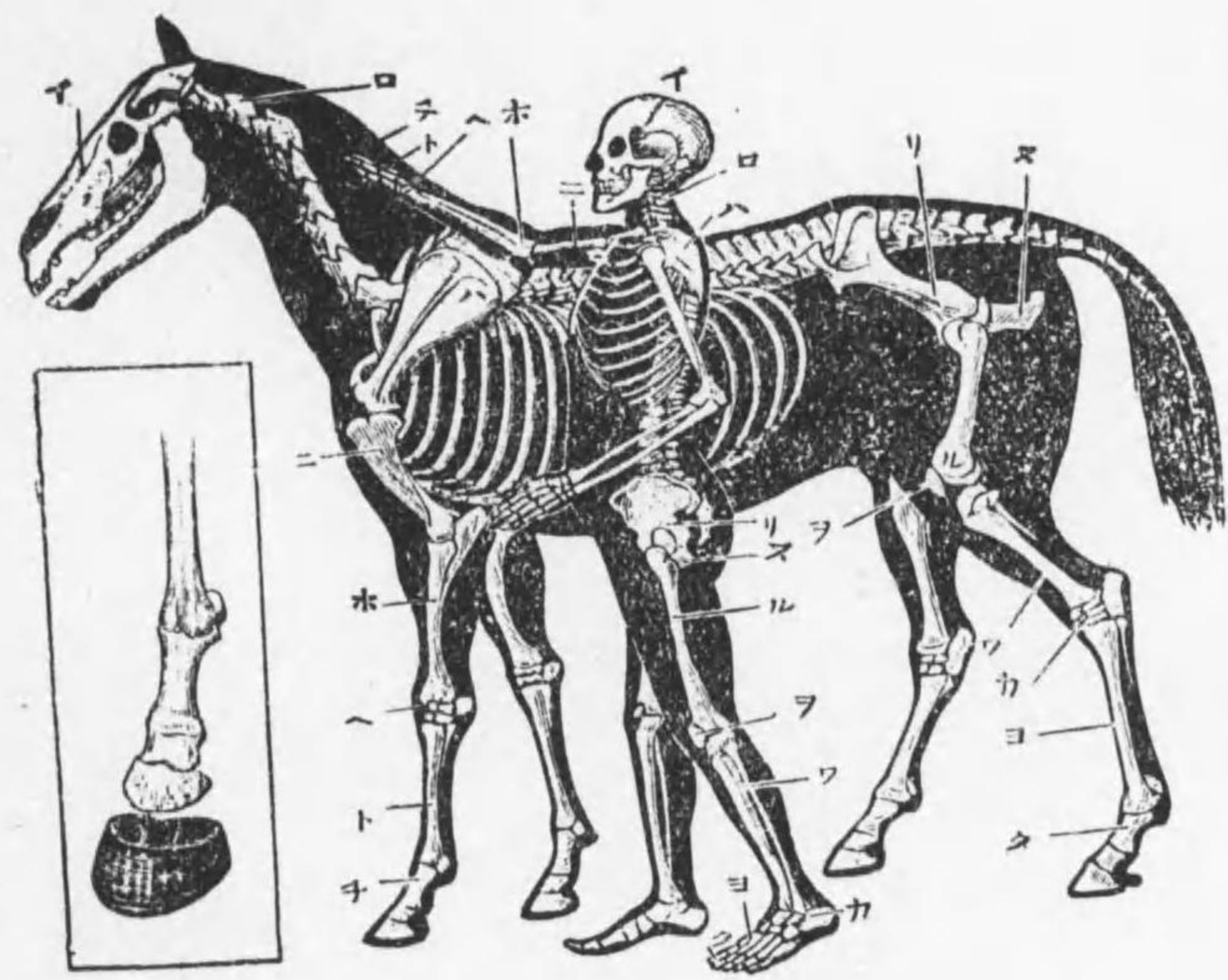
馬の齒と年齢 圖七十六第

ら馬の食物を食べてゐる所を見る
 と、下顎を多少水平に左右に動か
 して、上の齒と下の齒とが磨り合
 ふやうにする。無論前齒(門齒)も
 共に働くもので、永年使へば齒の
 面がへる。そこで馬の年齢は通常
 前齒の磨面を見て判断する。尙ほ

序に、馬の上唇は大きくなって自由に動くものであるが、あれは食物をからみ取るに役
 に立つ。

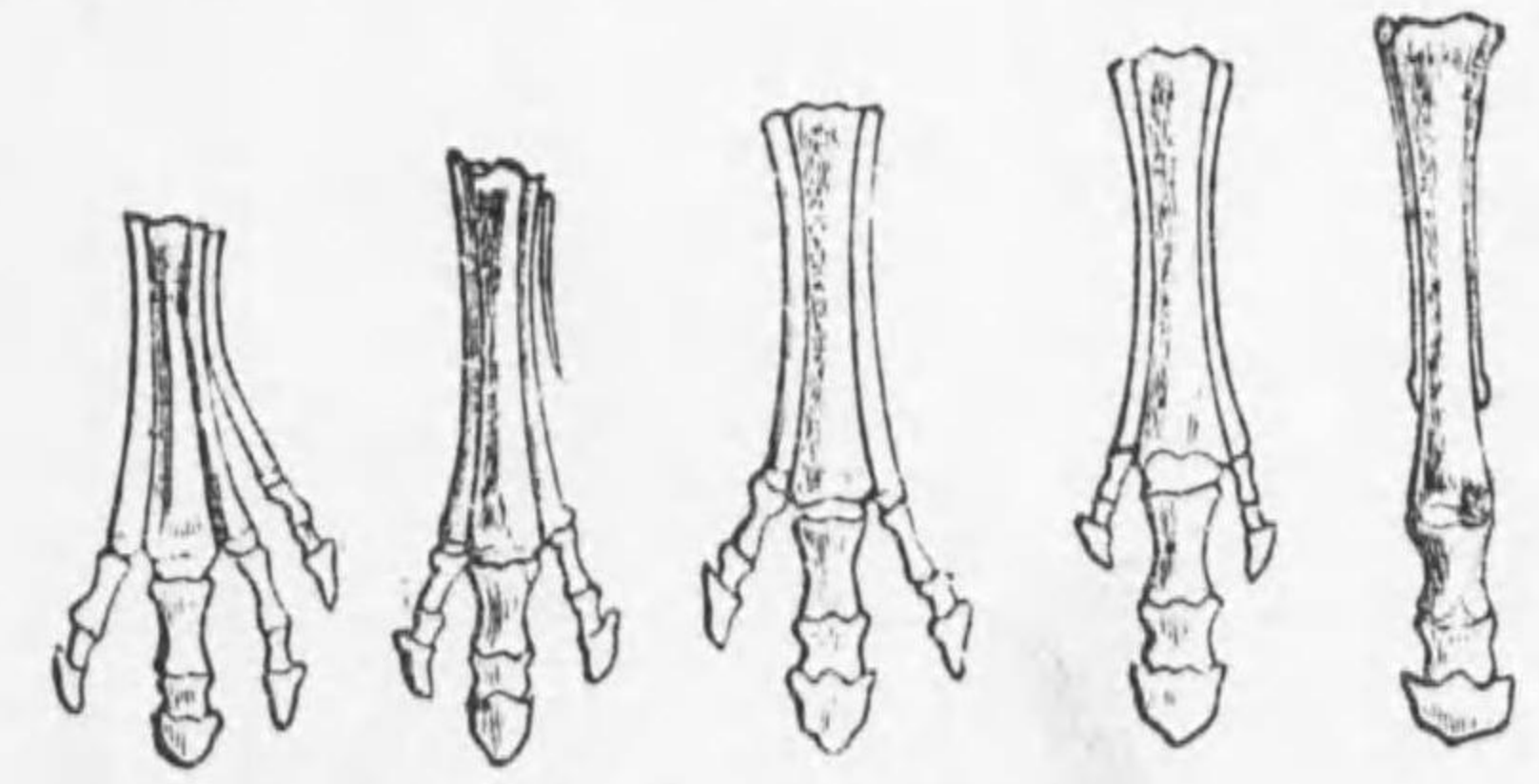
馬が犬猫の食肉類と違ふ點は齒ばかりではない。齒の次に考へて見なければならぬ
 ことはその足である。馬の足には趾が一本しかない。その一本が非常に太くて、その
 先端だけを地に着けて歩く。あれだけの重い体を支へるのに一本の趾では細くては役

に立つまい。そして、その趾の先は箱の形をした爪で包まれてゐる。この箱形をした



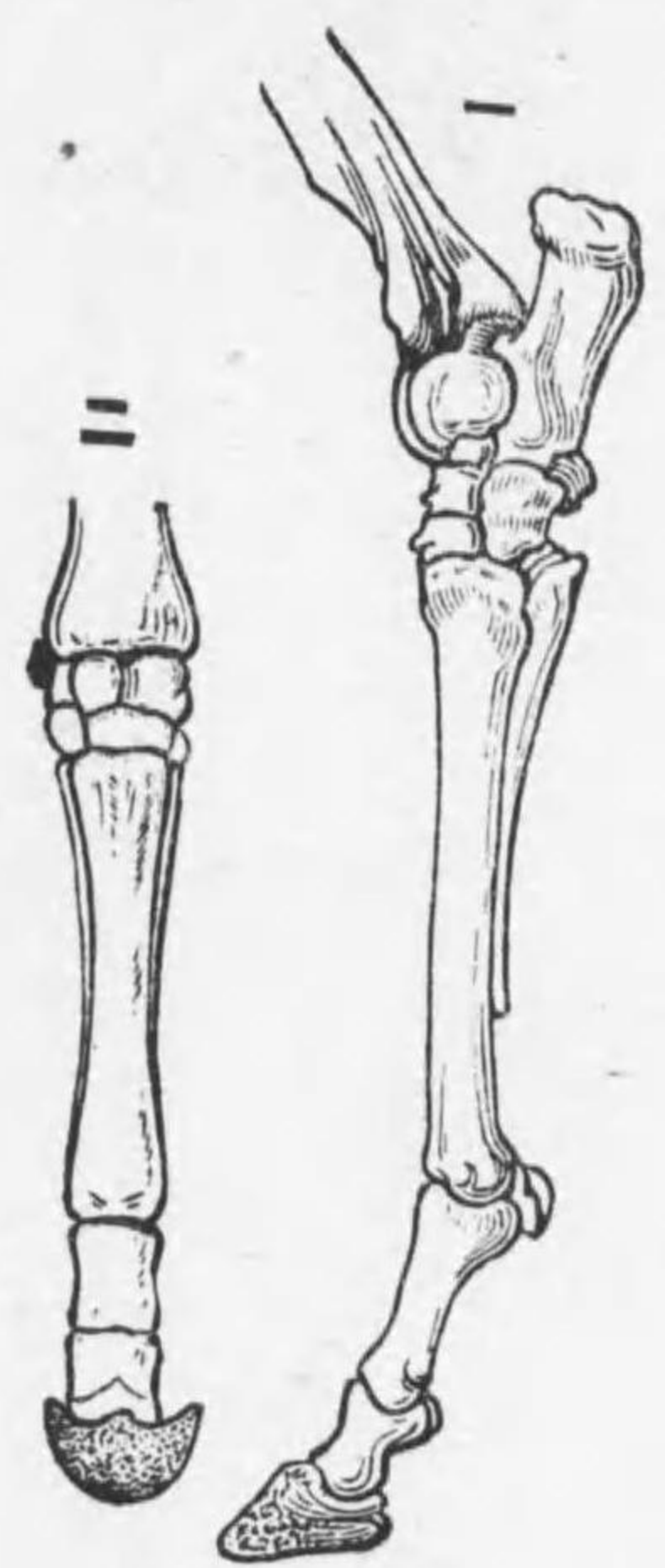
・ 骨格の人と骨格の馬 圖八十六第

爪のここを蹄といふ。馬の化石を研究して見ると、その最も古い時代のものは趾が四本もある(第六十九圖)。その中趾だけが用をなして他のものはだんぐ退化してしまつた。だから今の馬でも、足の骨

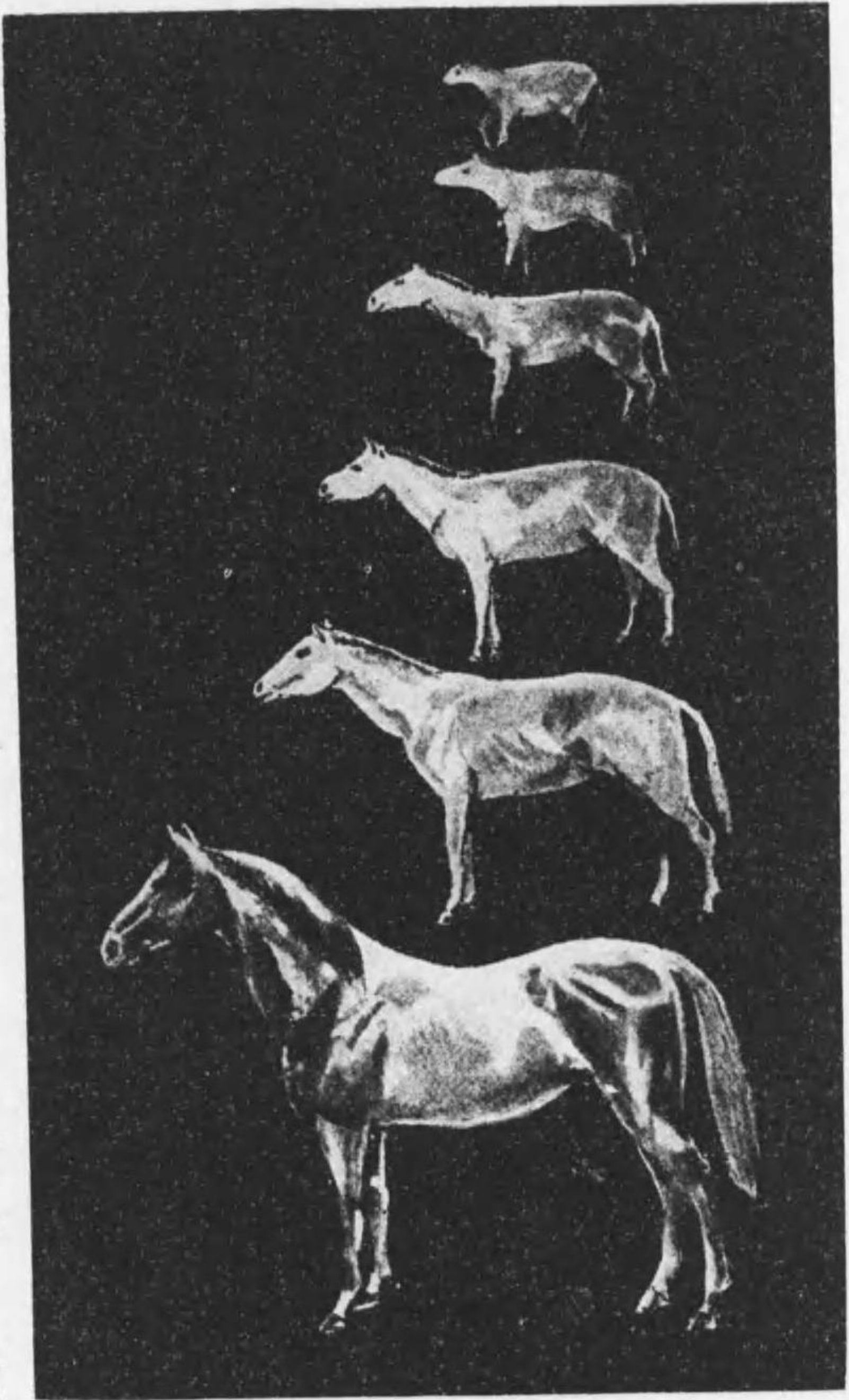


石化の趾の馬 圖九十六第

第七十圖 馬の趾



常に長いものになつてゐる(第六十八圖)。足全体の長さが長ければ走ることが速である。走ることが速ければ、敵に襲はれた時に逃げるに都合がよい。馬は尖つた牙はなく、鉤爪がなく、また角をもたない。獅子・虎・狼のやうな猛獸に逢つた場合には、三十六計逃げるに如かずである。さうして見ると、この足の變化はつまり走る爲に役に



第七十一圖 馬の進化

立つといへる。

馬はたゞ歩く

場合には一時間

に四哩ぐらゐし

か行かないが、

トットくと少

し速くかける場

合には九哩、競

馬のやうに走る

馬の走る

時は三十三哩も行く。普通の汽車の速度は、先づ一時間三十哩ほどだから、馬の走る時は汽車と同じ速さといへる。

馬はそれに耳がささい。あのラツバの形をした品のよい耳は、キョトくと動かし

て、物音をよく聞き取るに都合よい方に向ける。これでは猛獣も容易に馬を捕へ食ふことは出来まい。

(三) 野生より家畜へ 初めて馬を飼ひ馴らした所はアジアである。今も尙ほタルタリの草原地には澤山の野生の馬があるが、恐らくこれがアジア地方にゐた馬の祖先であらう。南アメリカのパンバス荒原にゐる無数の野馬は、飼馬がその主人を離れたものの子孫である。これ等の野馬の一群には全群を率ゐる強い主將がある。狼や豹などの敵が来ると、澤山の馬が一緒に集まる。これが馬の普通の防禦法である。それだけで敵は大抵近づかないが、若し敵が侮つて跳びかゝつて来れば、その主將が躍り上つて敵を踏み潰す。そして強い顎にかけて敵を啄へ飛ばす。それを寄つてたかつて息の根を止めてしまふ。

今日パンバス地方で、馬を捕へて飼ひ馴らす方法を見れば、古代の人々が如何にして馬を馴らしたかを想像することが出来る。人が近づくこと、馬群は草を食ふのを止め

て圓陣を作る。人はその中のよい姿の馬を選んで、巧に投索を投げかける。それが馬の頸や足にからまつて動けなくなつてしまふ。かうして馬を生捕ると、馬乗りの上手な人が、鋭い拍車をつけてその馬に乗り、からみついた索を取り外してやる。



種血純の國英 圖二十七第

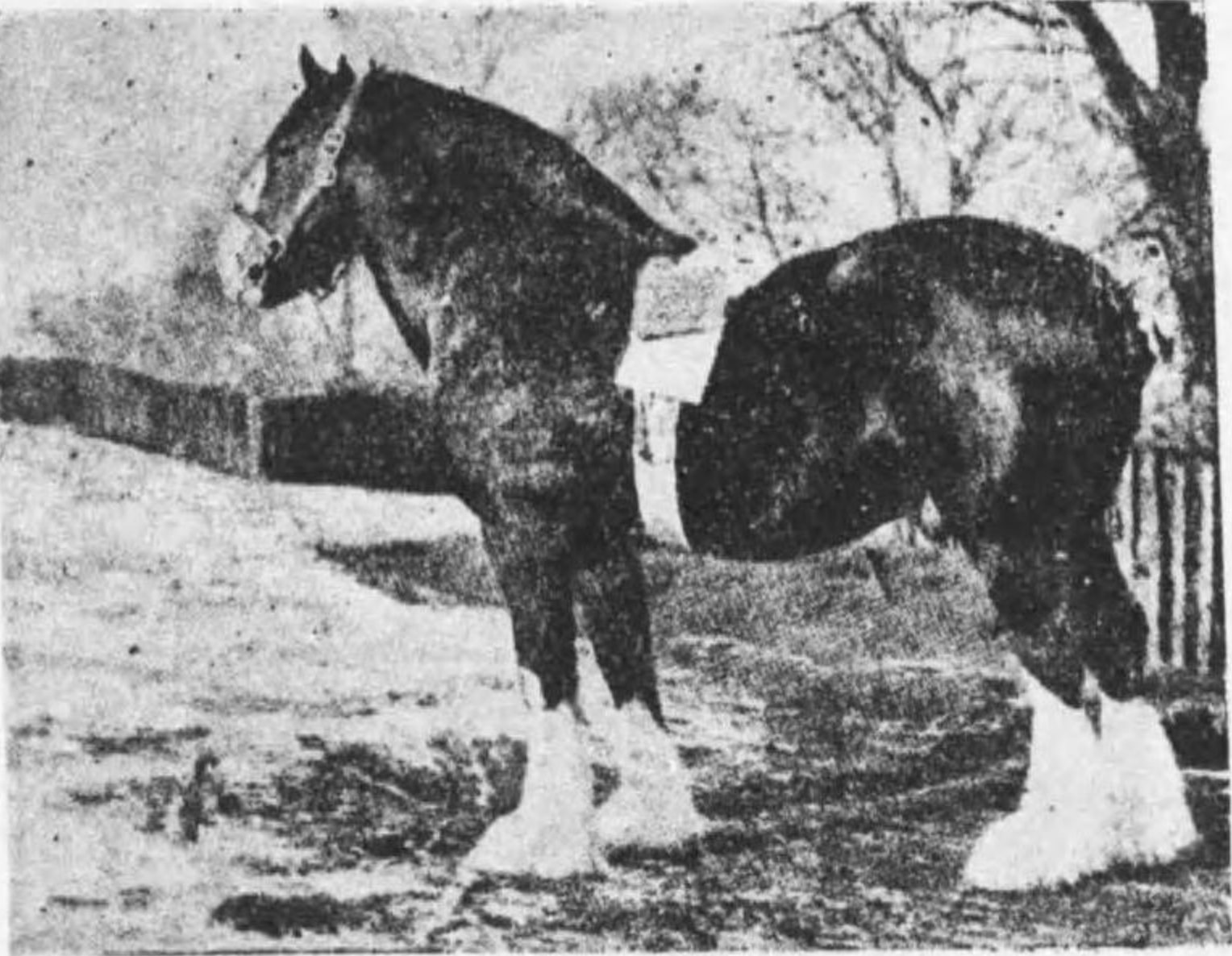
馬は立ち上るや、怒つて棒立となる。躍り上り、蹴り、走り、背中の人を振り落さうとする。乗り手は拍車を刺して馬の怒りを抑へ付ける。それから殆ど息のつまるほど驅けさせる。この無法な驅けさせは、野生の馬を十分に馴れさす方法である。そのあとでは、馴れた馬と一緒に置いて、もう逃げようとはしない。

(四) 馬の種類 今日の馬は野生の馬を飼ひ馴らしたものであるが、人々の好みとその風土との關係で、

いろいろの品種が出来てゐる。これを、その使用の目的によつて、乗馬と挽馬との二つに大別せられる。乗馬は人を乗せるもので、主として騎兵の馬に使はれる。挽馬は荷車を曳くもので、荷馬車馬といふのがそれである。

乗馬の中で、最も名高いものはアラビア馬である(第六十六圖)。その勇氣と伶俐と従順と足の速いのと、飲まず食はずに堪へるのが特色である。優美な皮膚と、小さい頭と、細めな骨格と、活氣ある容子と、美しいすらりとした足と、しまつてゐる腹と、小さい滑な蹄と、何といても乗馬中の優者である。

アラビアにこんな優等な馬を、如何して産するやうになつたかといふに、アラビア人は馬が好きで、馬を育てることを神聖な事業と信じてゐるからである。英國に純血種(第七十二圖)といふ世界第一の稱ある駿馬があるが、それもアラビア種に改良を加へたものである。その他各國の優良な馬は、皆アラビア種の系統が混つてゐないものはない。

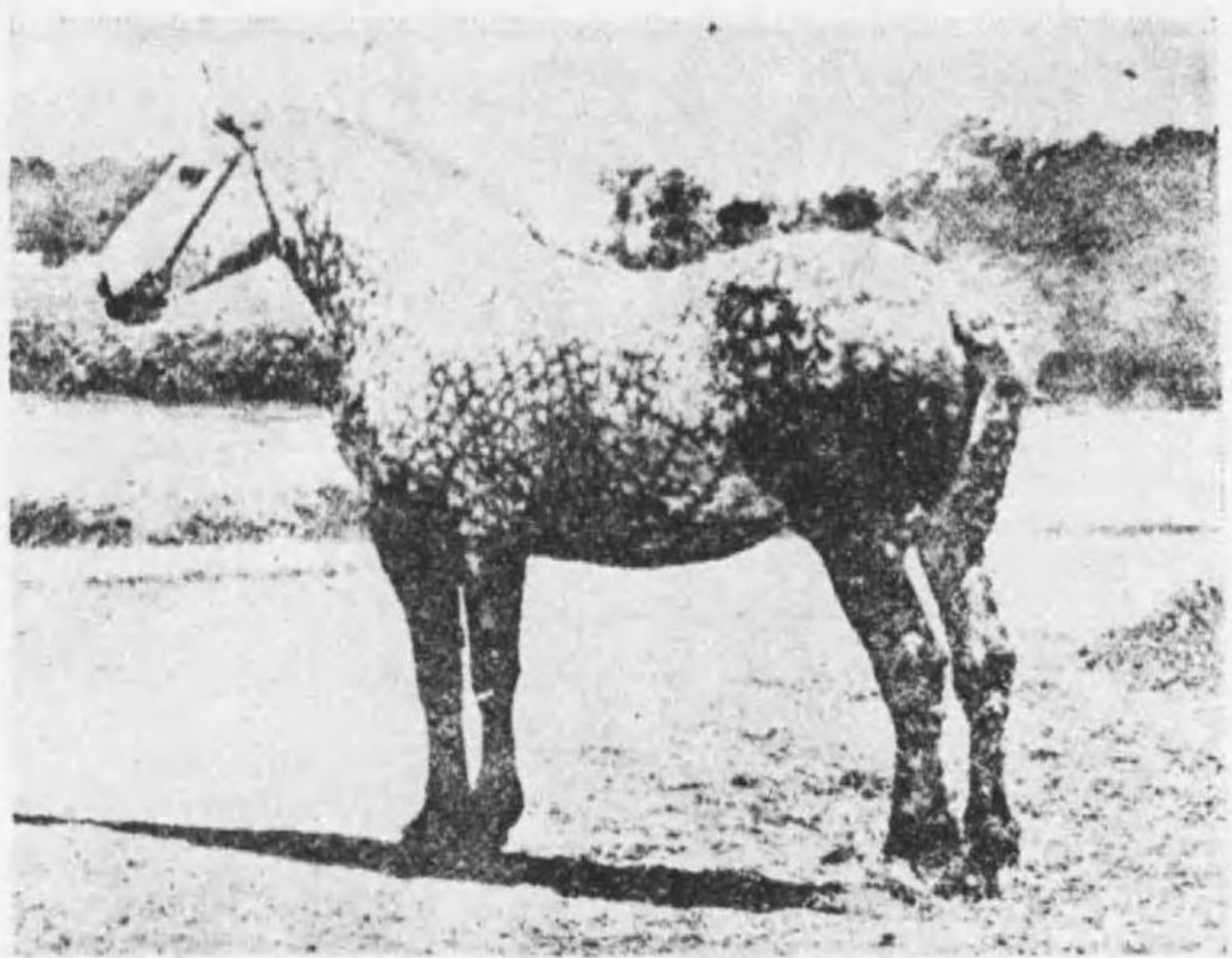


ルーデスデイラク 圖三十七第

挽馬は大きな体と丈夫な足をもつてゐる。力が強く辛棒強い馬がよい。歩みは重々しく、厚い皮膚大きな頭、広い胸、大きな臀、太い腹、不格好な蹄まるで乗馬の反対な容子をしてゐる。その最も有名なものには、英國産のクワイデステール（第七十三圖）。佛國産のペルシユロン（第七十四圖）といふのがある。

春馬・薩摩馬などはよい品種である。日本でも日清・日露の二大戦に馬が悪いので非常に苦しんだから、その筋の人は今これが改良に力を盡してゐる。

(五) うさぎうま(驢馬) ろばは特に耳が長いので一にうさぎうまともいふ。馬に比べ



シロニシルバ 圖四十七第

ると、体が小さく、体の割合に頭が大きく、頸のたてがみは立つてゐる。尾も馬のとは違つて、牛ののやうにその先の方にだけ長い毛が生えてゐる（第七十五圖）。

ろばは馬とは全く別種である。ろばはごこまでもろばで、決して馬の退化したものではない。ろばは馬ほど高尚な活潑な獣ではないが、それかといつて性質は決して馬に劣つてゐない。車などを曳く力は弱いけれども、荷物を負ふ力は強い。そして温順であらう。

ろばは本當に可哀さうだ。子供の玩弄にされたり、背負ひ切れないほどの重い荷を

負はせられたり、情け容赦もなくなられたり、……おとなしいろばはかうしてだん



第七十五圖 ばろ

く荒々しくなり、そしてみすばらしいものになる。馬のやうに可愛がられ、馬のやうに面倒を見てもらへたら、ろばは必ずよいものになる。

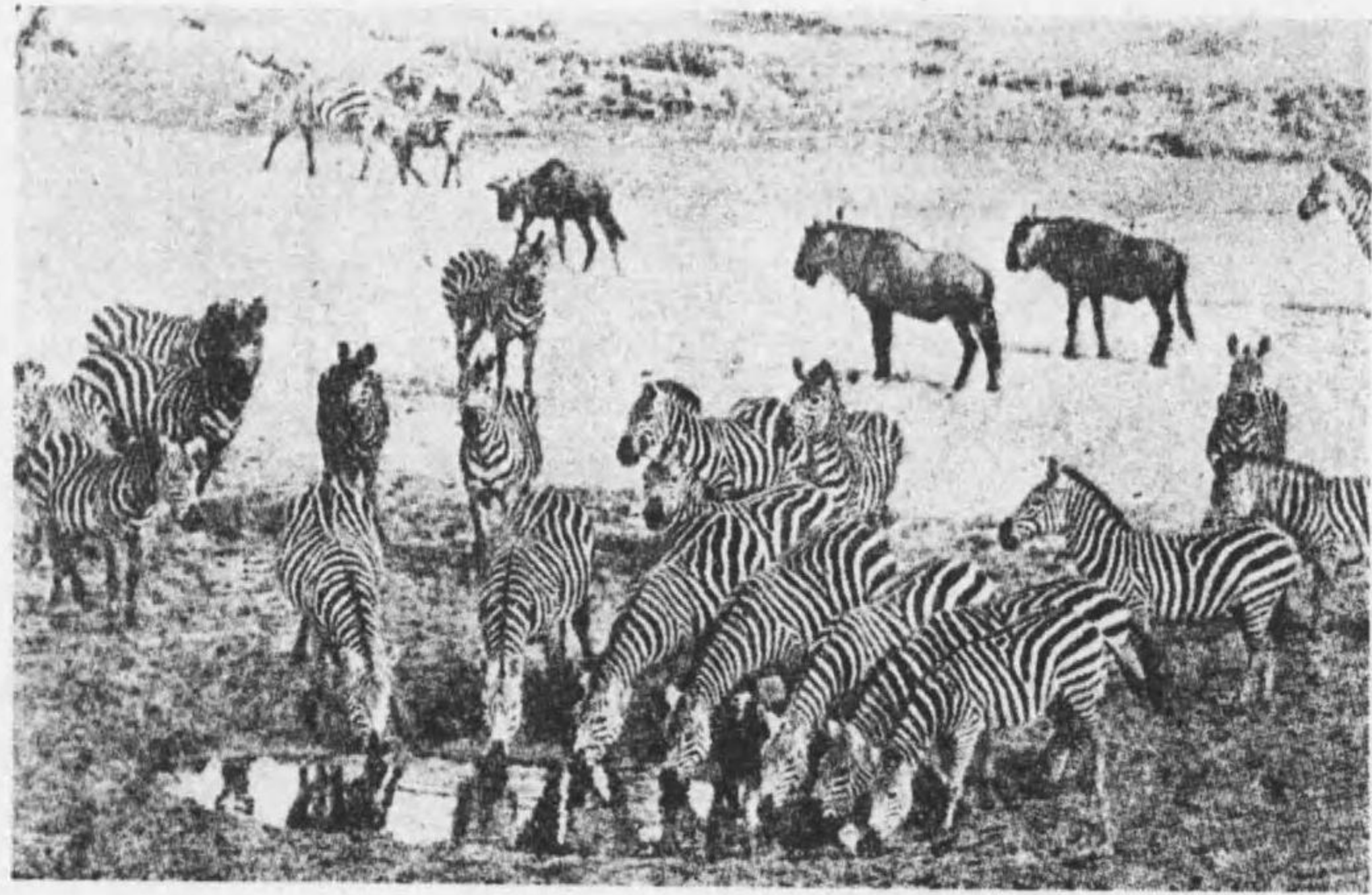
「ろばは子供や老人や女の乗物としては、この上もない良いものである。一度ろばに乗つたら、その乗心地のよいことを忘れることが出来ない。その上ろばは馬のやうに食ひしんぼうでなし、まづいものでもよく食べる。水を飲むのにはろばは用心深いものはない。自分が何時も飲みなれた清い流れ水でなければ、口をつけようともしない。そしてごんなことがあつても、がぶがぶ飲みすぎるやうなことはない。口先を少し水面にあたるやうにして水を飲み、馬のやうに鼻先をすつかり浸して飲むやうなことはしない。凡てに非常に注意深い獣で、人ごみ多い街の中でも、負うた荷物を他にひつかけるやうなことをしない。ろばは嗅覚が鋭く、耳がさとい。耳の長いといふことは聞く力が鋭い證據である。聞く力の強い長い耳を持った獣は、多くの場合臆病なものであるが、ろばの場合にもそれがいへよう。けれどもろばもいざといふ時には、仲間のものごと共同一致して勇敢に戦ふものである。

(六) らば(騾馬) 荷馬車馬に使ふ馬にらばといふのがある。体が割合に大きく、力が

強く、粗食に堪へるので、勞役に使ふのによい馬である。

馬とろばとは野生のまゝでは、その間に雜種が出来ないけれども、若し人間が注意すれば雜種を作ることが出来る。かうして作つたものならばである。らばの父はろばで母は馬である。だかららばは獨立して一種の動物といふことは出来ない。馬でもなければろばでもなく、馬とろばの混血兒である。父のろばからは大きな頭と、長い耳と、固い蹄と、厚い皮膚とを受けつぎ、母の馬からは大きな体と、堂々たる体格とを受けついでゐる。そしてその性質はろばに似て、質朴で、粗食で、小食で、忍耐力が強く、仕事に熱心で、足許に注意深く、夏雨の降らない地方でも、その暑さに困るといふことはない。山國ではこれほど重寶な動物はない。

序に、らばと反對に、馬を父とし、ろばを母として、混血兒を作つて見ると、駃騠といふ一種の馬が出来る。けれども、それは体が小さく、力が弱くて役に立たない。不思議なことである。



第七十六圖 しまうま

(七) しまうま(斑馬) しまうまは又まだらうまともいふ。英語ではゼブラと稱へる。体一面に白と黒との規則正しい縞模様がついてゐるので有名である。体は馬よりも餘ほど小さいが、馬よりもむつちりと肥つてゐる。足は割合に細いが、全体としてはろばに似た所が多い。氣が荒くて容易に人に馴れない(第七十六圖)。
この縞模様は虎の紋と同様に、草原の中に於て保護色の役目をするものである。併し、今では東部アフリカ地方に、少數の群をなしてさまよふてゐるだけで、年々その數を減じてゐる。彼等が滅亡して行くのは、無論獅子などの猛獸



牛 野 圖七十七第

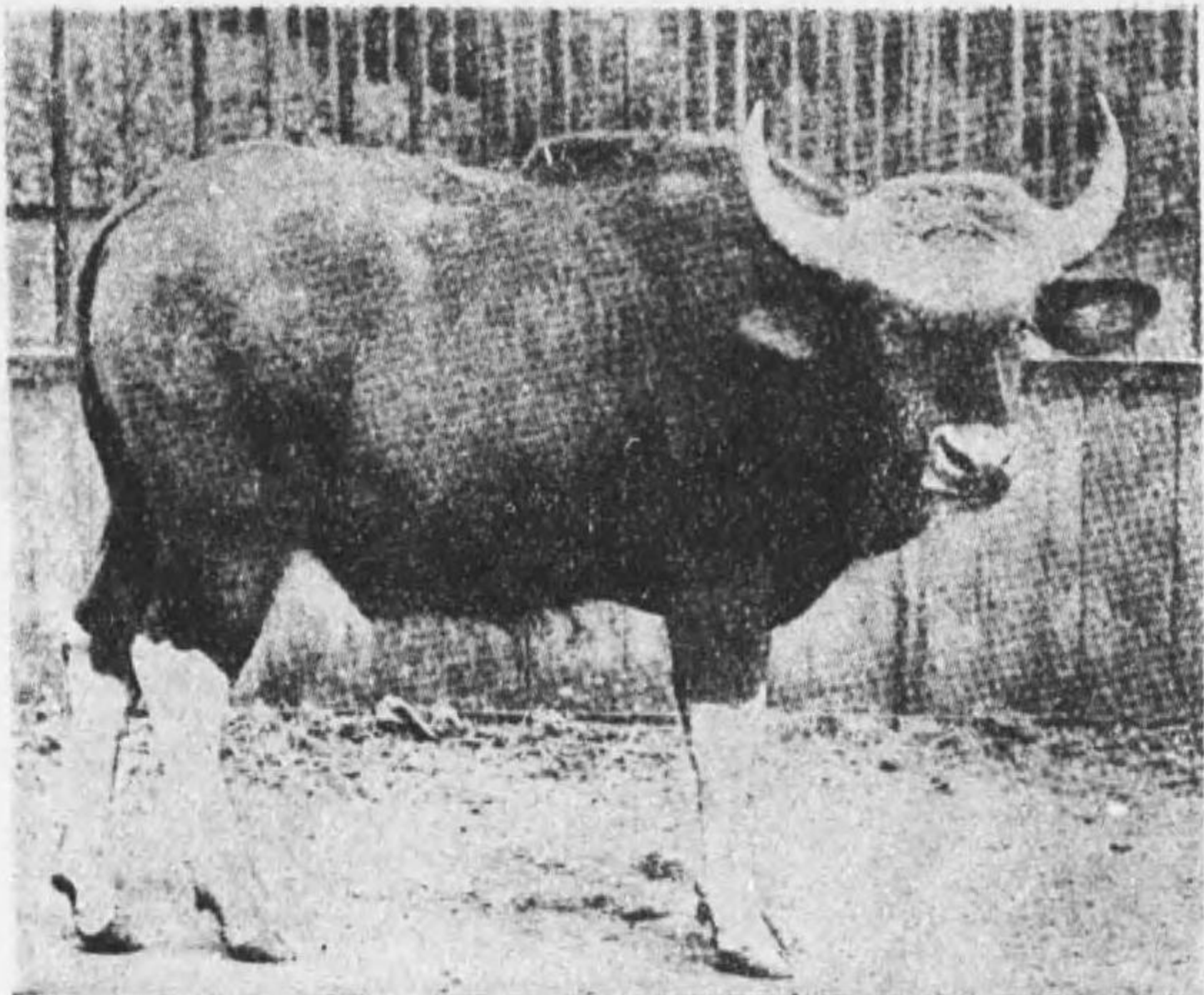
一二〇
の毒牙にかゝるためと、人間にかり捕られる爲
こである。英國政府はその絶滅をおそれて、英
領内では、これを狩ることを厳禁してゐる。

第二節 牛及び牛の類

(一) 勇ましい野牛狩 次の話は野牛狩の實状を
物語つたものである。

三四年前、私は一人の友人と共に野牛狩に出
かけたことがあります。アメリカの西部平原地
方では、野牛のことをバッファローといふ。間
もなく、吾々はかねて親しくしてゐた土人と
一緒にになりました。

野牛狩の仕方にはいろいろあります。その最も普通なのはランニングといふ方法で
す。ランニングといふのは、馬の背に跨つて、馬を走らせ、先廻はりして野牛を射止
める方法です。白人は鐵砲を使ふが土人は弓
矢を用ひる。土人は引矢を使ふことが頗る巧
で、唯一矢であの大きな野牛を倒してしまふ。

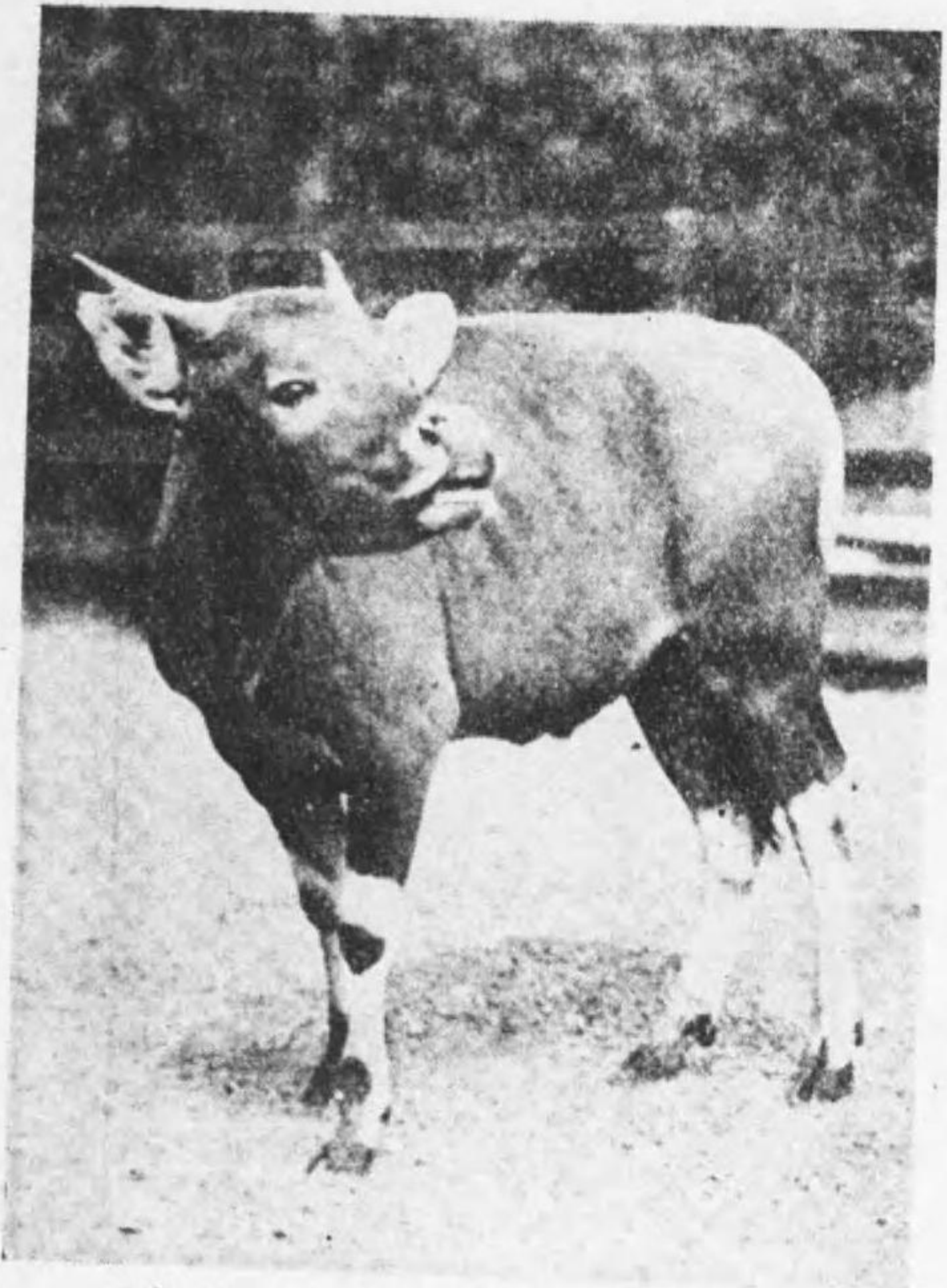


牛 - ヲ ガ 圖八十七第

ストーキングといふ方法は馬を使はない。
狩人は射撃に都合よい所まで、忍んで近寄る
のです。土人ならば鹿か何かの毛皮を被つて
氣づかれないやうに野牛の群の中に入り込み
ます。さうしてゐて、鎗を以て野牛を突き殺
すのです。

或朝吾々は丘の上を通つた所が、すぐ目の

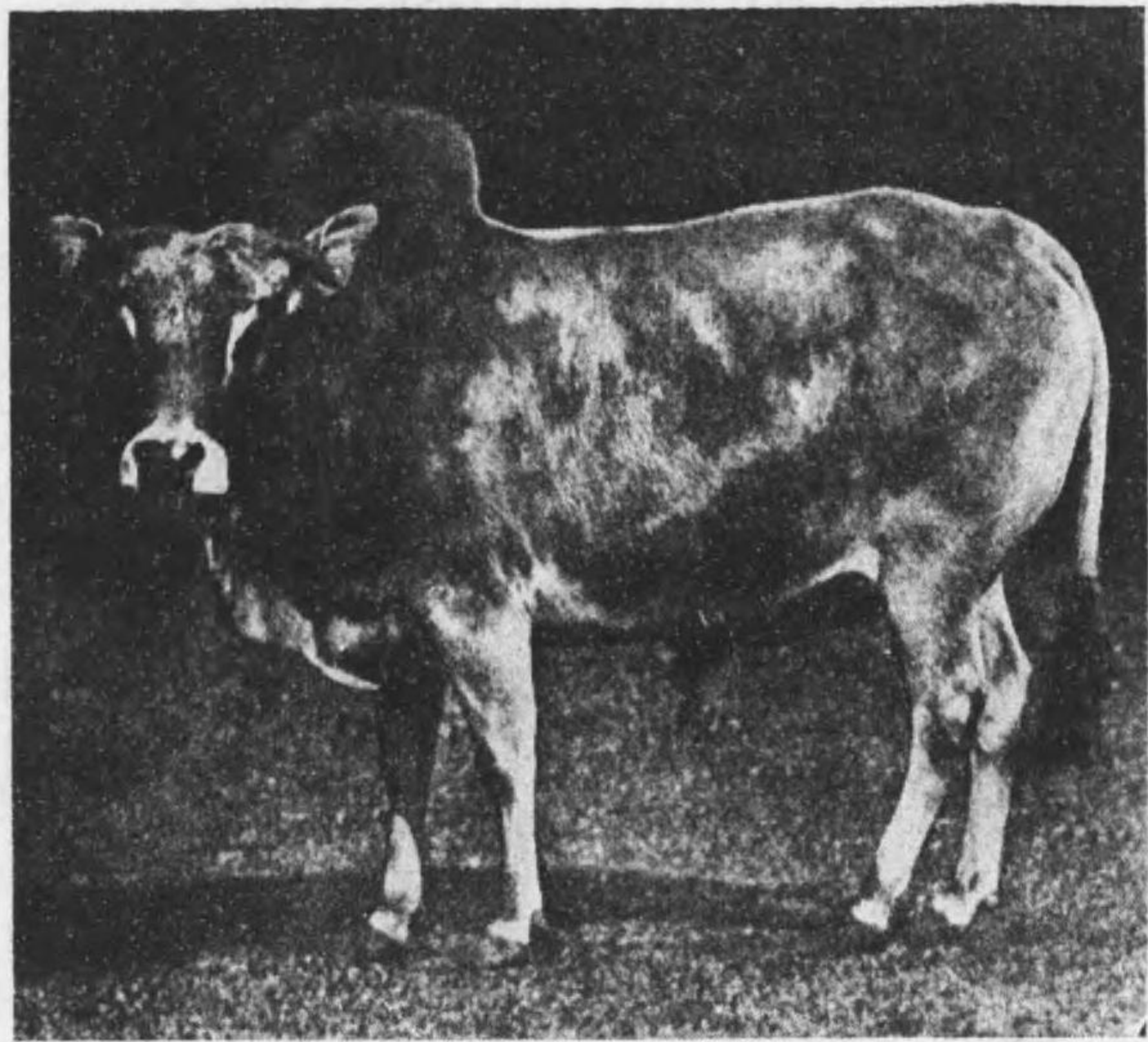
前に野牛の群が草を食つてゐるのを見付けました。土人はこれをランニングでやつつけようと考へたのです。そよ風は牛の方から吾々の方に吹いてゐたから、牛は吾等の近づくことを知らないでゐます。吾々は全速力で駆け出しました。間もなく土人は矢を放つて一匹を仕止めてしまつた。それからが大騒動です。蹄の音、咆える聲、人の



牛 グンテンバ 圖九十七第

叫び、耳を聳するばかり、渦巻く砂塵は呼吸することが出来ない程の有様。それでも馬は勇み立つて野牛の荒れくるふをビクともせずよくその使命を全うしました。若し、この馬の働がなかつたならば吾等の幾人かは野牛の爲に命を落したかも知れません。

この大活劇は直ぐに終りました。併し私はまだ夢の中にあるやうな気がしてゐました。気が注いで見ると、そこに十五頭の野牛が倒れてゐました。



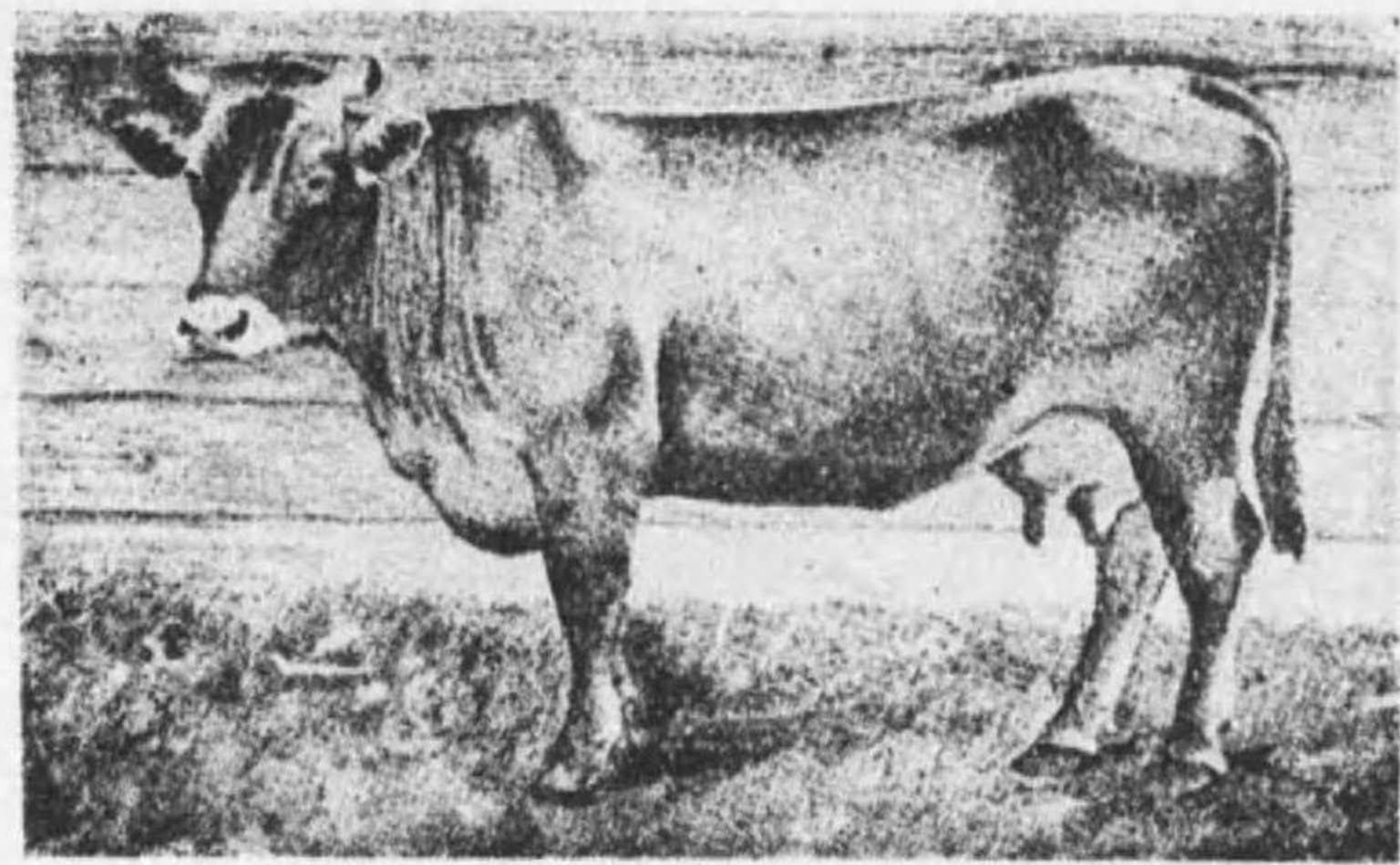
し う ぶ こ 圖十八第

この話は茲で止めて置ことにしよう。野牛狩はなか／＼勇ましいものである。野牛に二種類ある。アメリカ産のものでコーカサス産のものとがそれである。コーカサス産の野牛はおそらく今の畜牛の祖先であらう。南米のパンバス荒原には數へ切れないほどの野牛が、野生の馬と混つて棲んでゐる。年々二十萬頭ぐらゐづ、捕殺されてゐるが、その數が少しも減つたやうには見えない。併しこの牛

はアメリカ發見の時に、イスパニア人の連れて行つたものの子孫である。

野牛は額が廣く、頸の筋肉が發達して、そのところが高まつてゐる。頭と肩との部分には長い毛が生えてゐる。角は短く左右遠くはなれてゐる。嗅ぐ力が強く、風上からは容易に近づくことが出来ない(第七十七圖)。

(二) 畜牛の種類 野牛を馴らして家畜とした所はアジアがはじめてで、それは随分遠い遠い昔のことである。山羊や羊を家畜にすることは、元來おこなしい動物のことであるから、さう大した困難もなかつたらうが、あの大きい強い、怒つたら敵を突殺さなければ承知しないほどの牛を、森林から牛小屋まで連れこむには、随分身の毛もよだつやうな危険も冒したであらう。家畜を作る爲に、恐ろしい獸と戦つた昔の人の功績は、今の人には傳へられない。荒々しい野牛をおとなしい家畜にするには、長い年月辛棒強い面倒を見たであらうが、誰一人として知つてゐるものはない。初めて歴史に現はれた時代の牛は、もう温順な家畜であつたから。



牛スイスウラブ 圖一十八第

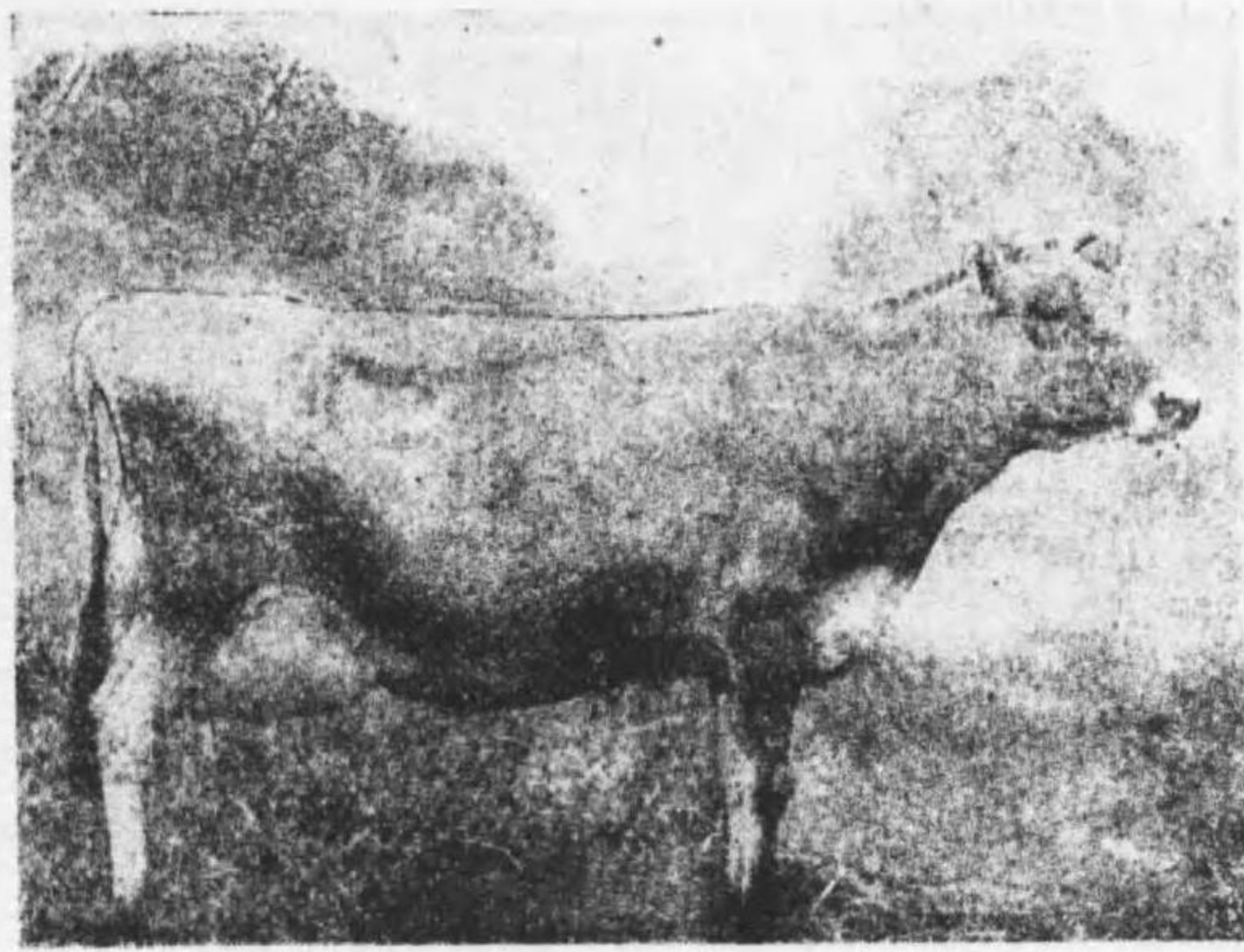
さて今日の畜牛には、改良されたよい品種が多い。ブラウンスイス(第八十一圖)と

いふスイス産の牛や、ジェルシー(第八十二圖)といふ英國産の牛は、共に乳牛として優良のもので、一ヶ月に十石以上の乳を出す。短角牛(第八十三圖)といふ英國産の牛は、乳も多いが、よい肉を産し、而かも一歳から一歳半ぐらゐの短日月間に、体の目方が百七十貫にもなる。肉牛の王といはれるほど有名である。我國各地の牧場などで見るホルスタイン(第八十四圖)といふ牛はオランダの産で、肉用にも乳用にもよい。

日本牛は一般に体が小さく、肉も乳も少ないが、体が強健で、性質温和、よく勞役に服する。そして結核病にかゝらないから、牛痘用としてよろしい。中でも但馬牛は神戸牛として知られてゐるもので、肉の味がよいので有

名である。

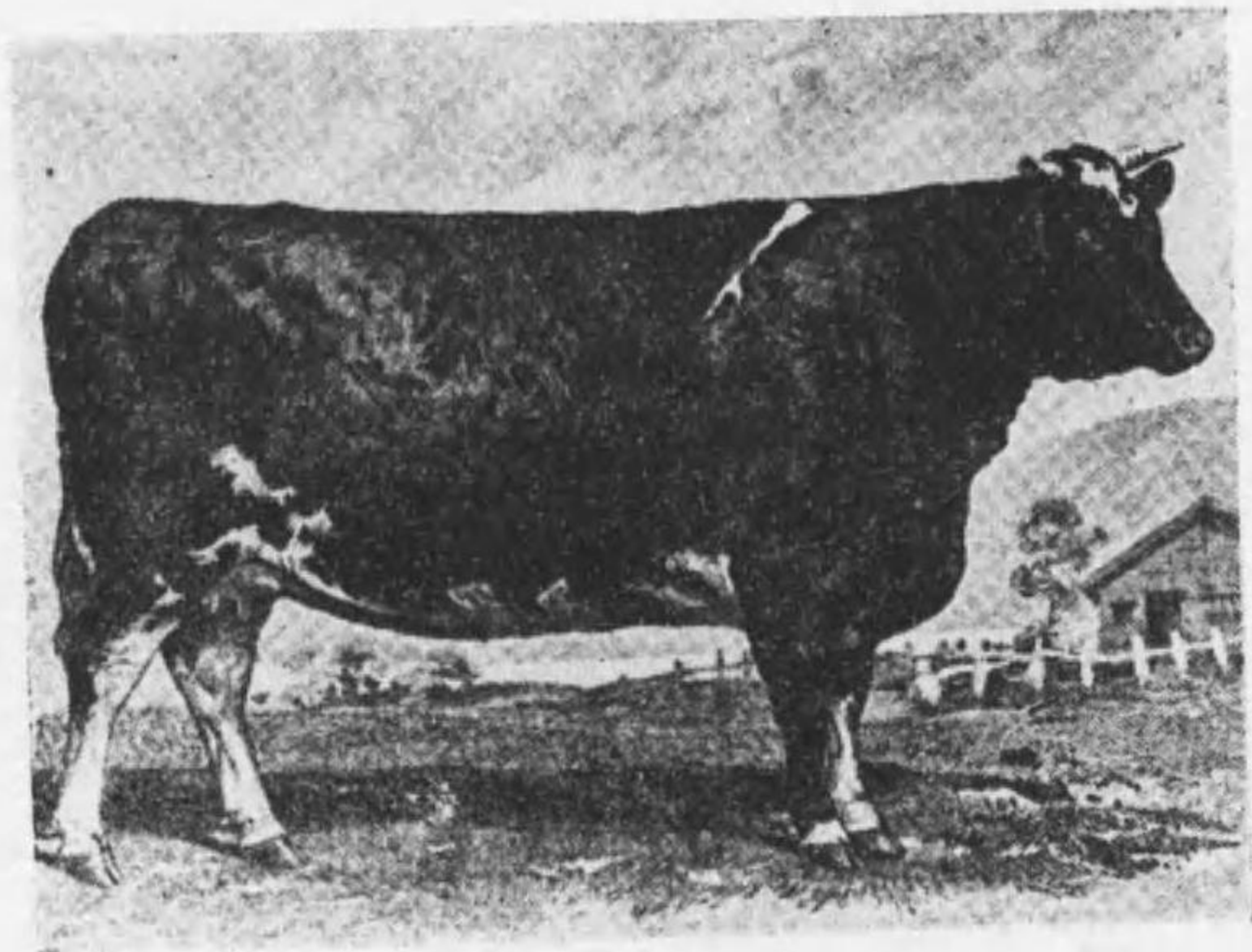
(三) 牛の用途 牛といふ名前は、空に輝いてゐるあの美しい星にもつけてある。牡牛星座といふのがそれだ。天文学は、温暖の氣候の中で、のんきに暮したアジア人の牧



牛 - シルエジ 圖二十八第

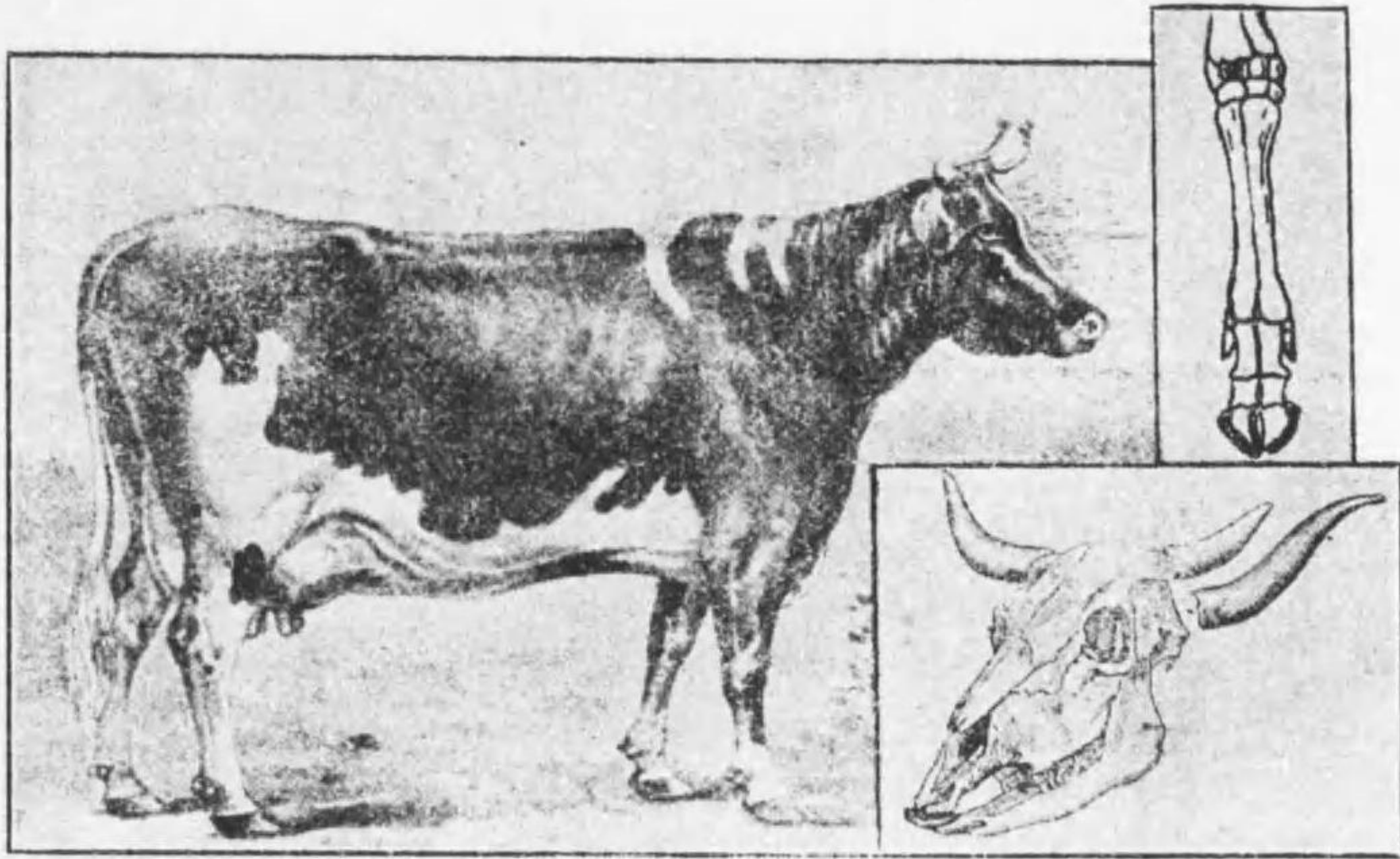
人が、野外に寝て、家畜の番をしながら研究されたのがその初である。この牧人たちは、空に散ばつてゐる無数の星の中で、その主なるものに、自分等が記憶するに都合のよいやうな名をつけた。その時分、人間の持つてゐた大切なものは、皆この星の名前になつて尊敬されたのである。家畜が古代の人に如何に尊敬せられたかといふことは、大犬座・小犬座・白羊座・山羊座などといふ名があるのでもわかる。猫や馬や豚の名のついた星座のないのは、これ等

の動物が家畜になつたのは、よほど後世のことであつたか、又はこれ等は星の名に付けられるほど、その當時の人に重く見られなかつたためであらう。



牛角短 圖三十八第

兎に角、家畜の中で一番役に立つものは牛だ。山間の道路のわるい地方では、これに車を挽かせ、平坦の地方では田畑の耕作を助けさせる。牛乳が亦ざれば人間のためになつてゐる。そのまゝ人乳の代りになるばかりでなく、これからバターも取ればチーズも取れる。牛肉は上等の食物で、皮は鞣されて靴やカバンや馬具となり、脂肪は石鹼・蠟燭の材料となり、ヘットに作つては食料の油となる。骨は半分焼いて骨炭として砂糖を白くする時に用ひられ、一度使はれた骨炭は上等の肥料となる。生の骨を熱湯で煮ると、あの用途の廣い膠が



牛ニイタスルホ・骨頭と足の牛 圖四十八第

取れる。太い骨はボタンなどの骨細工になる。奈良の鹿角細工といふものの中には、牛の骨で作つたものもある。牛の角はまた煙草入や白粉入の器となつて、小間物屋の店にならび、血は骨炭と共に砂糖の精製や染物に用ひられ、臓腑の一部分は乾かして樂器の糸になり、肉についてはラケットの網の糸となる。膽汁は染物屋の必要物で布を洗つたり光澤を出したりするに使はれる。今これを一覽表に作つて見ると次のやうになる。

- (1) 乳汁と肉……滋養品
- (2) 脂肪……料理・石鹼及び蠟燭の材料
- (3) 皮……靴・カバン・馬具・兵器

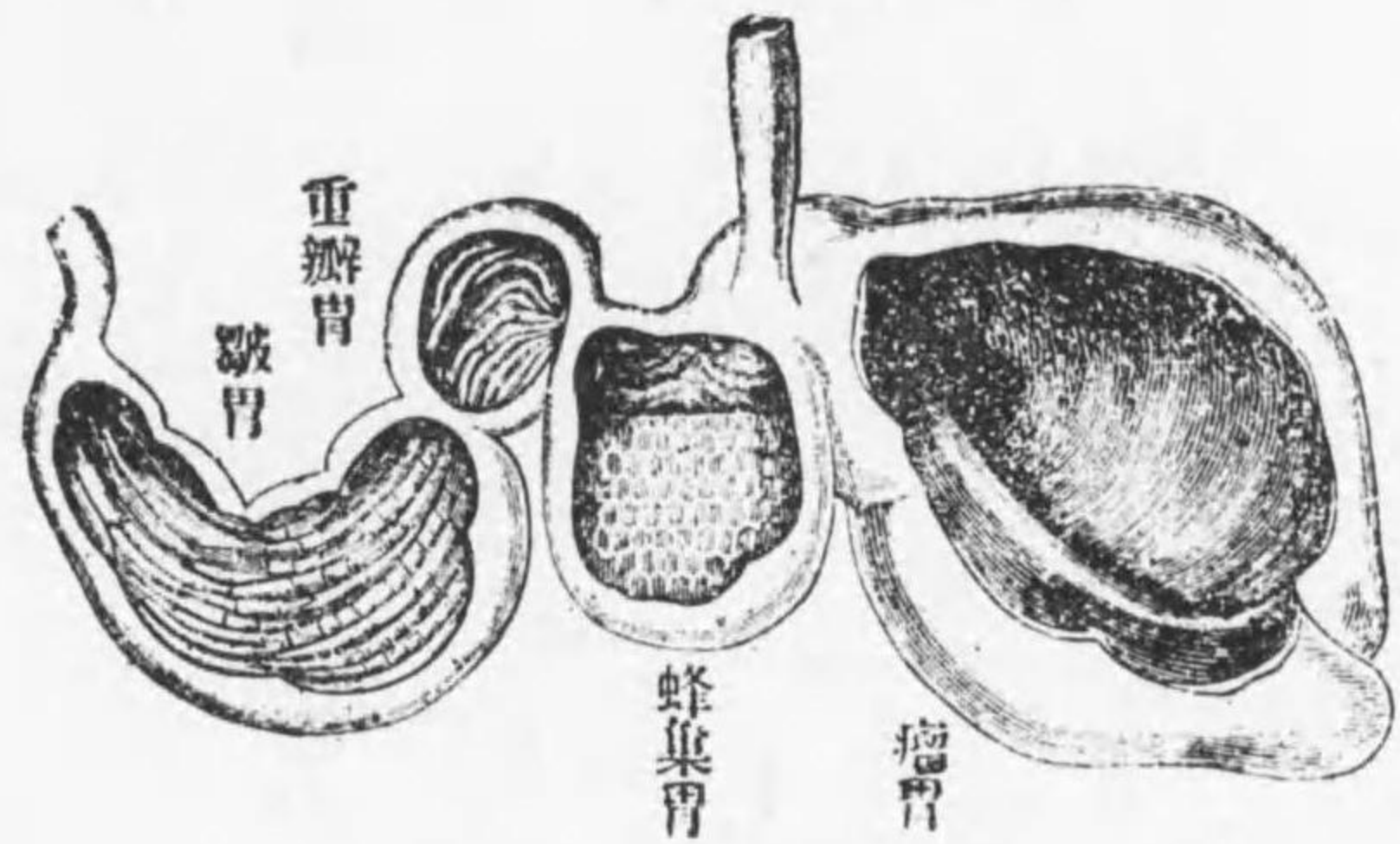
- (4) 骨……骨炭・骨細工・肥料
- (5) 骨や皮の屑……膠製造の材料
- (6) 蹄……蹄甲の代用品
- (7) 膀胱……水囊・瓶の口の封紙
- (8) 血液・内臓……肥料その他の雑用

(四) 牛の体格検査

動物學ではその動物の形の上の特徴の研究を忘れてはならぬ。これを馬に比べて見ると、先づ第一に牝牡共に角をもつてゐることが著しい違ひである。

第二には蹄が二つに割れてゐる。趾は四本あつて、その二本だけが地につくのがその二つの蹄だ。第三はたてがみが短く、尾はその先の方だけに長い毛がついてゐる。第四は顔が短く、胴が太く、足が短い。第五、従つて力は強いが走ることがおそい。第六、馬と一番違ふ點は胃の構造である。

牛の胃は四つの室に分れてゐる(第八十五圖)。食物は粗がみのまゝで瘤胃といふ大きな室につめこまれる。この瘤胃といふのは米俵ぐらゐ大きな袋で、その中には太い



胃の牛 圖五十八第

柔い毛が生えてゐる。この袋に一時に多量の食物をためて置いて、それから安全の所の柔い草の上にも寝て、ゆつくりとそれをかみなほす。

一旦瘤胃にたまつた食物は、だんごとくに第二室の蜂巢胃に集まる。この室の内側には蜂の巣のやうに孔が全面に出来てゐるので、その孔の中にはまつて食物は小さい團子になる。かうして作られた草の團子は、胃のはたらしでゲブツと口に戻つて来る。口に戻つた食物は今度は奥歯でよくかみこなされる。

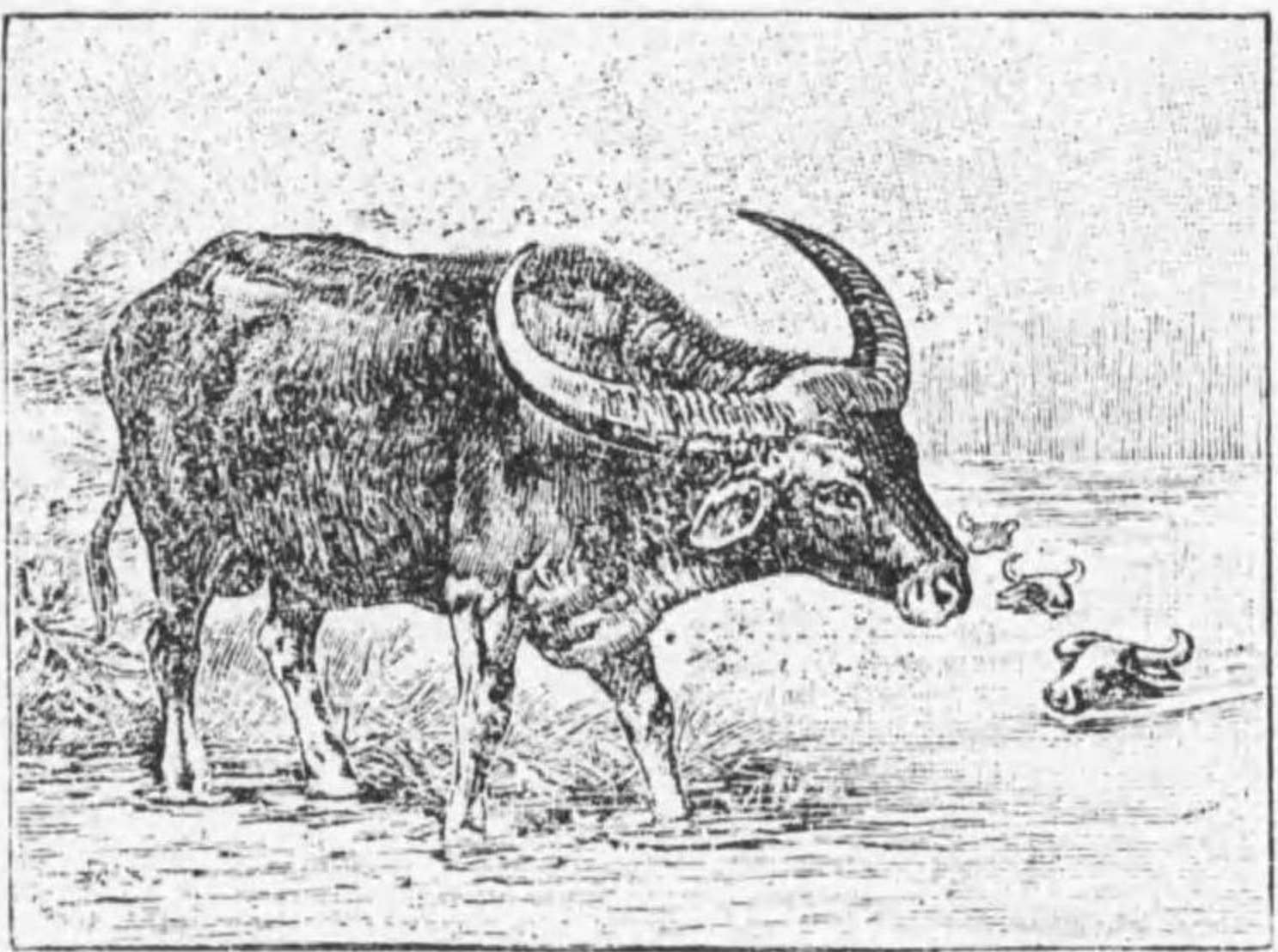
よくかみこなされた食物は、同じ食道より蜂巢胃の溝を通つて、今度は第三室の重瓣胃に至る、重瓣胃にはべらべらした瓣がある。最後に食物は皺胃に送られ、こゝで食物は多量の消化液を受ける。皺胃は小皺が澤山あつて、

消化液を多量に出す所である。かういふふうにして食物は小腸の方に送られる。これが牛の胃の特別なところである。

(五) いろいろな牛 野牛の重なる種類はコーカサス地方のバイソンと北米のバッファローとであることは前にも述べた。この外に印度の北東ヒマラヤ山の麓にはガワー(第七十八圖)といふ野牛がある。牛の仲間の中ではこれが一番大きいものであらう。バンテンダ(第七十九圖)といふ美しい牛はマライ島に産する。運動が活潑である。印度産のこぶうし(瘤牛)(第八十圖)といふのは、肩の上の所に大きな瘤がある。それから今一つ忘れてならないのはチベットのヤーク(第八十六圖)である。この牛は高原の塞地に産するもの



クーヤ 圖六十八第



牛 水 圖七十八第

で、毛が非常に長い。体も角も大きい。
 水牛は体が大きく長さ七尺以上もある。角も非常に大きく、多少扁くて、ノの字状に曲つてゐる。その名のやうに水中に遊ぶことが好きで、泥の中にころがつて泥を体になすりつけ昆虫の害を防ぐことがある。力は牛よりも強く、印度産のものは虎と戦つて何時もこれに勝つといふ。アフリカ・印度・南支那及び我が臺灣にも産し、耕作運搬にも使はれる。印度のギーといふバターは水牛の乳汁から製したものである。

第三節 羊と山羊

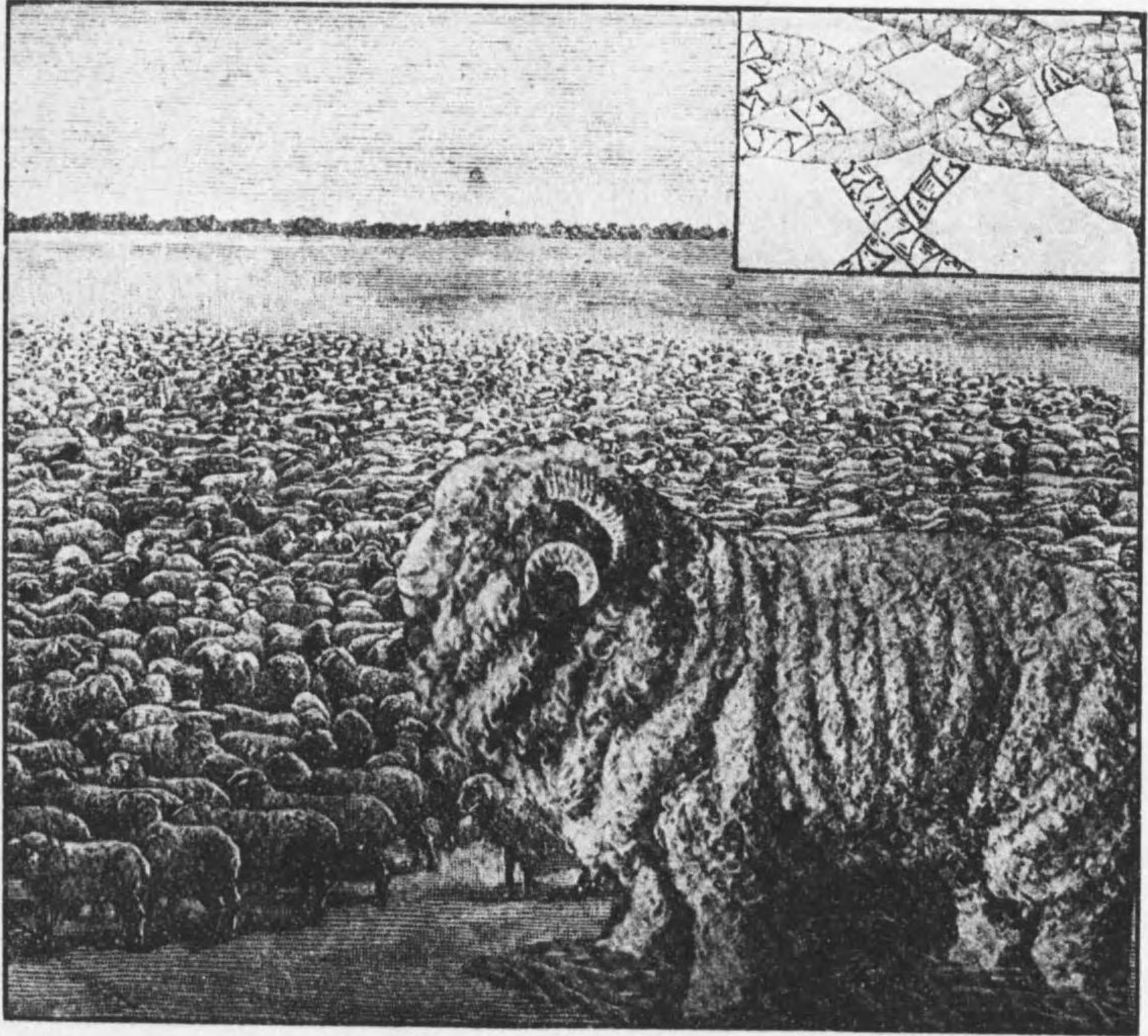
(一) 羊の毛 羊は毛糸・毛織物の材料を供給する點で、最も主要なる家畜の一である。

文明人が冬の間、身につける衣服は、多く羊の毛を材料としてゐる。比較的毛を使はない我が國でさへも、羊毛の原料だけでも、年々五千萬圓以上を輸入してゐる。その他洋服地・毛布などとして輸入せられる毛織物の量は、随分多額の金高になるであらう。さうして、その大部分は羊の毛で作つたものである。

羊の用途はその毛ばかりでない。肉は食用となり、皮は書物の表紙や手袋などに用ひられ、乳は飲料として滋養があり、それから製せられたチーズは、よい香氣があるので賞用せられる。それだから、現今の世界各國では、肉と毛との目的のために羊を飼養する地方が多い。

羊を一番多く産するのは現在ではオーストラリアである。然し、この頃南米で羊の牧畜が盛になつてゐるから、將來は南米が世界第一の羊毛産地になるであらう。我が國に輸入する羊毛は、多くオーストラリアや支那から来る。

最上の羊毛を産する羊は、イスパニア産のメリノー種である。メリノーの毛は純白



毛羊と羊 圖八十八第

一二四

で美しく、縮れ毛で柔かたで弾力がある。その他いろ／＼よい種類があるが今はそれを略して置かう。野生の羊は中央アジアの高山にゐる。

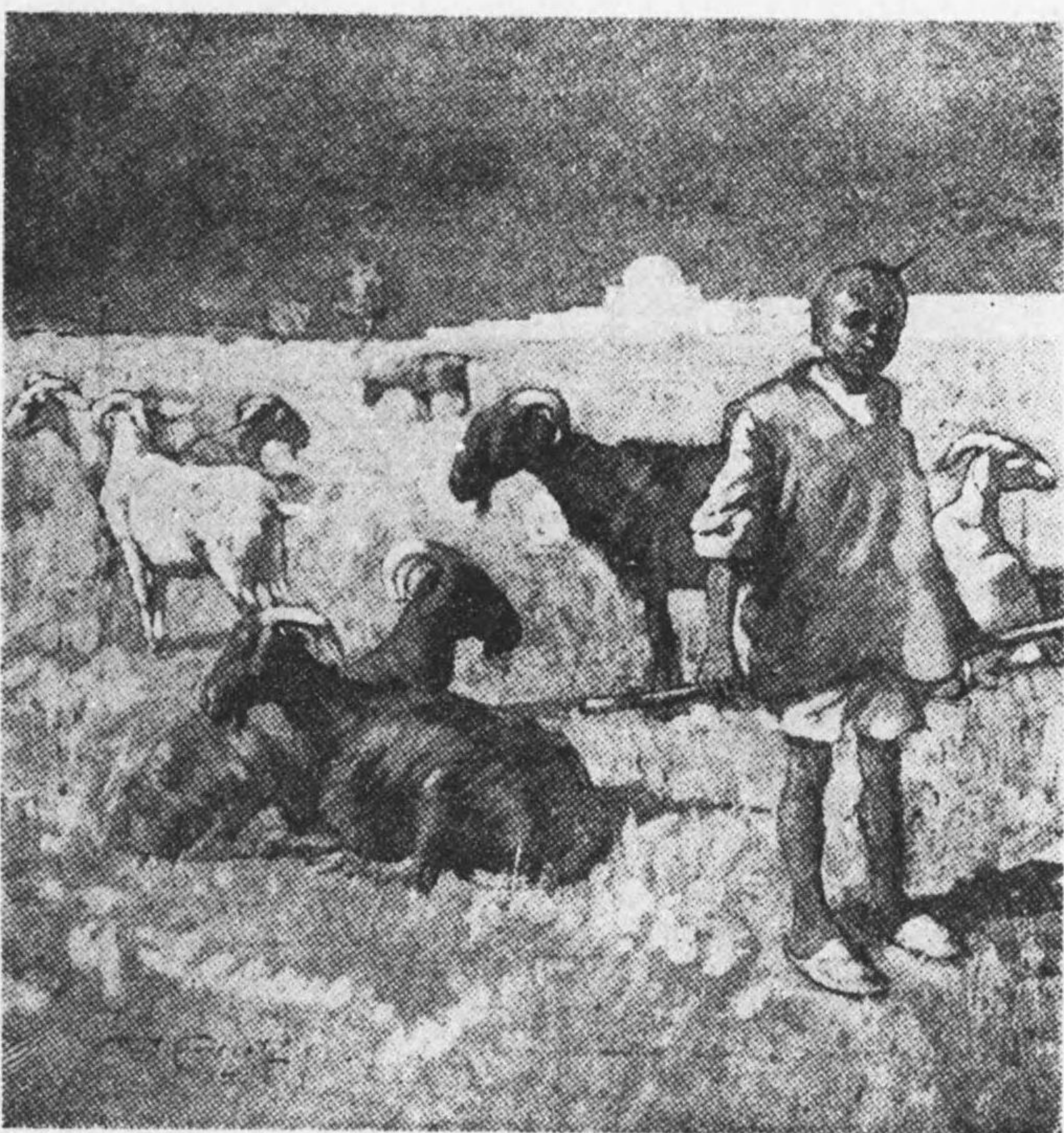
羊は飼ひ易い家畜で、夏は殆ど牧草だけで充分である。たゞ少しづつ食塩を與へてやればよい。毎年六月頃、先づ水で体の塵埃や脂肪を洗ひ去つて、鋏を以てその毛を刈るのである。

(二) 臆病な羊 羊は角・蹄・胃

等全く牛と同様である。けれども敵に對する防禦力を有つてゐない。犬は勇ましく争闘をする。馬は驅けて逃げもするし、又烈しく敵を蹴る。猫は爪で引つかき、かなはぬと見れば逃げて木に登る。牛は輪に陣を作つて、角を外に向けて近づく敵に備へる。山羊は頭を下げて敵を突き倒す。然るに羊は敵に對して何も出來ない。角はあれども巻いてゐて突く役には立たない。

羊が敵に襲はれると、無暗に走りまはり、あたりをうろつくだけである。一所に集つて身を寄せあつて、頭をつつこんで事の終るのを待つだけである。狼は何の抵抗なしに羊を食べてしまふことが出来る。

天氣の悪い日に羊を外に出して置くと、彼等は雨や雪にぬれるに任せて、ぶる／＼ふるえてゐるばかり。どこか物陰を探さうとするのは一匹もゐない。又羊は歩いてゐて、どこか行詰りに來ると、引返さうともせず、そこに立ち止つてゐるに過ぎない。羊はこんな臆病である。



第八十九圖 山羊の牧場

けれども、羊もその野生時代には、生存を支へるだけの勇氣をもつてゐたに違ひない。人類から何千年といふ長い年月の保護を受けて、羊はその本来の性質を失ひ、かくまでに臆病者になつたのである。

(三) 勇敢なる山羊 羊に比べるゝ山羊は勇敢である。山羊はチヨット羊に似てゐるけれども、長い頤鬚を有

し、角は巻くことがないので區別が出来る。岩石のそびえ立つた坂を跳び、峻岨の山地をさまよふことが好きだ。人は主として乳を取る目的で山羊を飼ふ。山羊の乳は牛乳よりも滋養分があるからである、その外皮は手袋になり、肉は食用になること羊と同様である。殊に子山羊の肉は美味である。毛は織物になる。彼のカシミア織といつて女子の袴にするものは、カシミア種といふ山羊の一種の毛で織つたものである。野生の山羊は北米及びベルシヤ地方に産する。

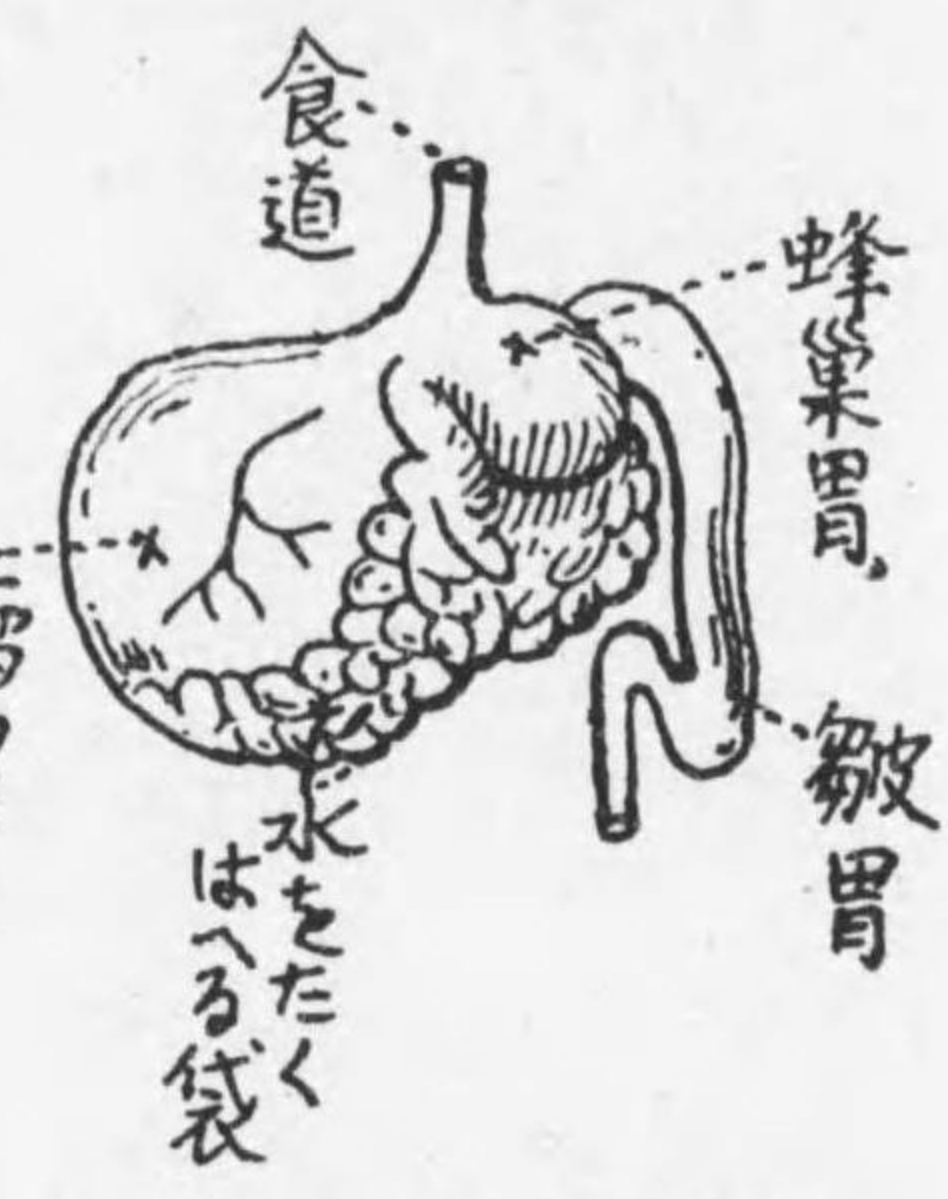
第四節 駱駝とその近似の獸類

(一) 沙漠の船・らくだ(駱駝) らくだは体が全く沙漠に棲むに都合よいやうに出来上つてゐる。先づ第一に、足裏は肉厚く、その上座蒲團のやうにひろがつてゐる。あざくぐした砂の中にも、らくだの足がめり込まないのはその爲めだ。第二、らくだの胃も牛の胃のやうであるが、その瘤胃には別に二三十個も囊がついてゐて、その中

に三四升の水を貯へて置き、必要に應じてこれを胃の中に出すことが出来る。水の少ない沙漠の中で幾日も水を飲まず旅行を続けることが出来るといふのは、全くこの爲めである(第九十一圖)。第三は、背にある肉峰である。これは、その中に脂肪の貯へてある瘤で、食物の缺乏



第十九圖 だく



第十九圖 駝駱の胃

した時は、この脂肪が血液に流れ出して養分になるものである、らくだが食物を

とらずに、長い旅を続けることの出来るのは全くこの爲めである。第四は、食物のえり好みをしないことである。らくだは極めて粗食に堪えるもので、枯草であらうが、木の葉であらうが、植物ならばどんな物でも食べる。第五は、鼻孔の開閉自在であることである。風が起つて砂

第四節 駝駱とその近似の獸



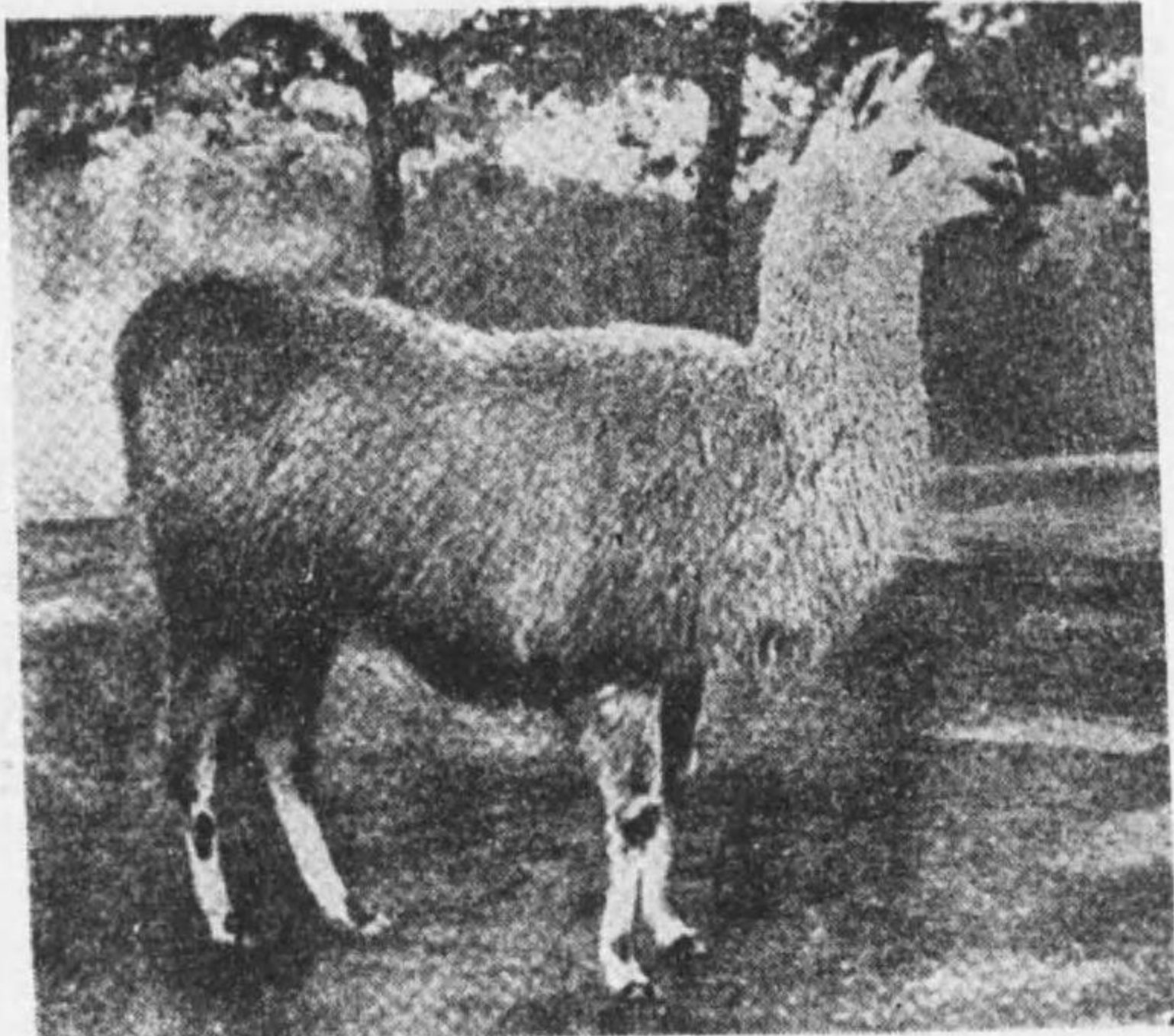
第十九圖 駝駱を耕す



だくらぶこたふ 圖三十九第

けむりの起つた時には、鼻の孔をピッタリ閉ぢて塵のはいつてくることを防ぐ。第六は、睫毛が長く垂れてゐて、同じく砂ほこりが目にはいらぬやうに出来る。第七は、嗅ぐ力が非常に鋭くて、よく水や植物のあり所を嗅ぎわけること、第八は、歩行が速くて一時間に十哩も行き得るといふことである。

馴れ易く、忠實に働く。だから沙漠地方では農耕・運搬にも使つてゐる(第九十二圖)。その上肉は食用となり、乳はチーズを作るに用ひられ、毛は上等の織物となり、皮は鞣皮となる。燃料の乏しい地方では、その糞を燃料として薪炭の代用となすといふ。



カ バ ル ア 圖四十九第

らくだには野生のものはない。皆家畜とせられてゐる。その中二種類ある。背の肉峰の二つあるらくだ(双峰駱駝)(第九十三圖)は、中央アジアから支那の北京までの間に飼はれてゐる。蒙古にはいると、この種のらくだが見られる。背の肉峰の一つあるらくだ(單峰駱駝)(第九十圖)は、アラビヤからアフリカ地方に飼はれてゐる。エジプトのピラミットに配したらくだの姿は、よく繪や寫真で讀者も見てゐるであらう。

(二) 感のはいアルパカ(羊駱駝)とラマ アルパカはやゝらくだと羊との中間の形をした獸で、頸は長く歩行活潑である。南米のペルー・チリーの山岳地方に棲んでゐる(第九十四圖)。また家畜としてらくだと同様に、乗用・運搬用として使はれる。人を

群のとマラとカバルア 圖五十九第



(マラがのい白の中真)

乗せて一日六七里を行く。併し、その疲れた時に尙ほ強ひて歩かせると、忽ち頭をまはして、悪い臭のする唾液を人の顔に吹きかける癖がある。やはり水を飲まずに五日ぐらゐる旅行を続けることが出来る。

アルバカは常に多数群をなして棲むものであるが、その中には必ず番兵にあたるものがあつて、全群を警戒してゐる。特にこの獸に奇妙なことは、暴風雨を前々から知る能力のあることである。人が暴風雨の來ることを知らぬ中に、アルバカはさつくと引き揚げて、適當な隠れ場所にはいつてしまふ。

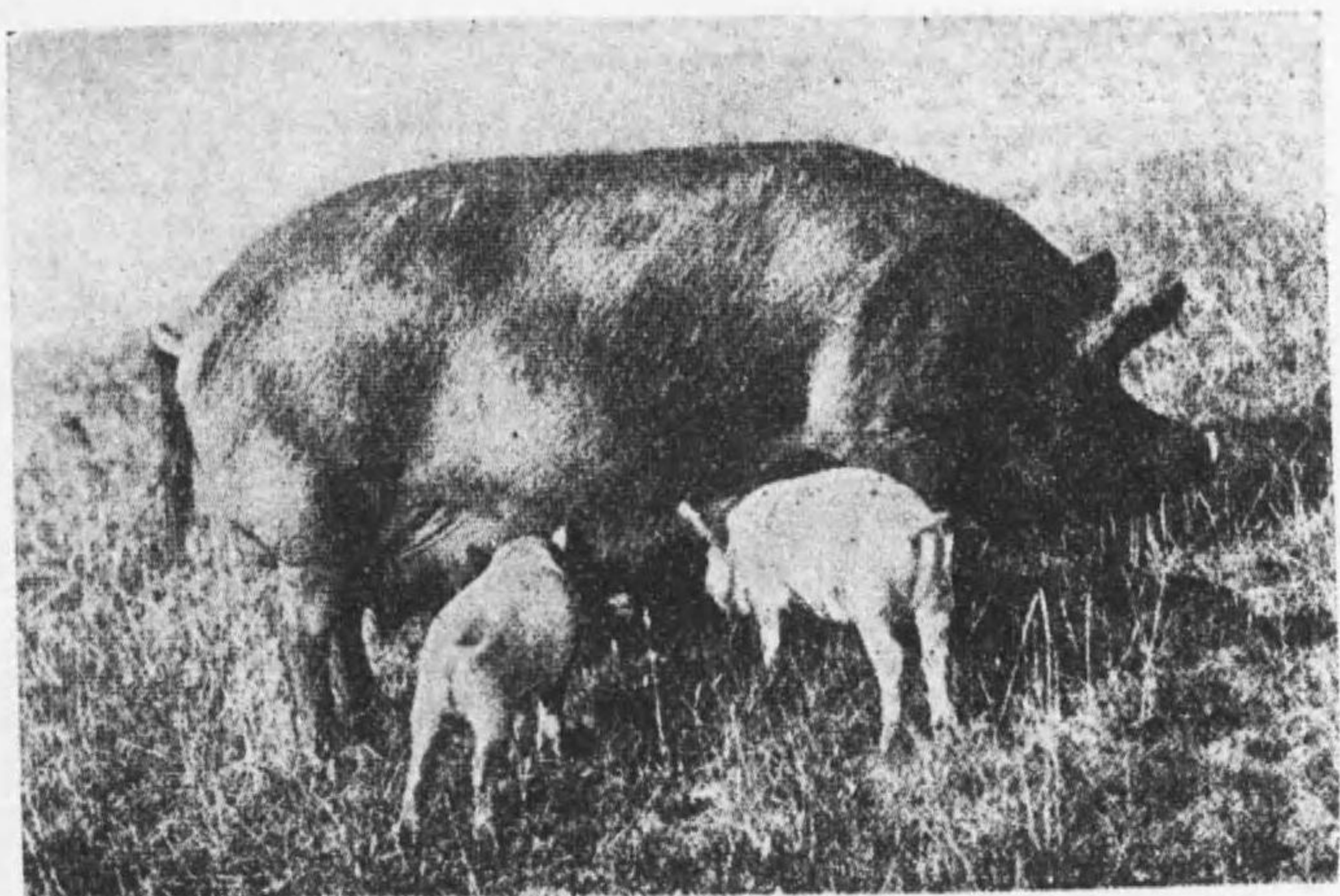
アルバカの毛は長くて美しく絹のやうな強い光澤がある。それで又柔くて彈力がある。夏の洋服などにするアルバカ織は、この毛を材料としたものである。

ラマ(第九十五圖)はアルバカと同族である。一にアメリカからくだともいふ。アルバカよりも少しく大きく、ろばよりも小さい。その習性その他はアルバカと同様である。

第五節 豚と猪

(一) 清潔家の豚 『豚の話など聞きたくもない』と、讀者の大部分は思ふであらう。けれども豚をさう輕蔑してはいけない。豚は決して輕蔑せらるべき獸ではない。讀者も一度はよく豚の本性を知つてゐなければならぬ。

なるほど豚は食ひしん坊だ。何でもかんでも飽きる事もなく食ふ。臺所のあまりものは、大根の切りはしでも、腐りかかつた魚の腹わたでも食べる。道に落ちてゐる人



たぶ 圖六十九第

糞までをも食べる。人の與へた食物では我慢し切れずに、鼻の先で土を掘りかへして、草の根や、みずや、昆虫の幼虫などまでも探して食ふ。豚は食べない時は眠つてゐる時ばかりだ、といつてもよい位に、絶えず口を動かしてゐる。豚の肉食は有名なものであるが、大食ひだからこそ、豚からあの美味しい肉が澤山に取れ、あの利用の廣い脂が得られるのではないか。捨てるやうなものでも、豚の胃にはいると、立派な滋養分にかはり、肉となり脂となるのだ。パークシャー・ヨークシャーなどいふ豚のよい品種は、一ケ年間に四五十貫も目方を増す。大食

ひするの無理のない話である。

豚が泥水を浴びて体を汚なくするのは、体の熱さを冷す爲めである。綺麗な水を自由に浴びられるやうにして置けば、豚は決してわざわざ泥水を浴びない。豚は水で洗つてやれば、おとなしくして非常に嬉ぶ。さうして豚は至つて綺麗好きで、自分の寢床になる所へは、決して糞をしない。家畜の中で、自分の寢床に糞をしないのは、多分豚だけだらう。それなのに、人は何故に、豚といへば汚いものを好むと決めてゐるのであらう。豚の汚いのは飼ひ主が悪いので、豚の方の罪ではない。

(二) 聲だけは役に立たない 豚が真丸くなつて、歩くことの出来ないほどに肥ると、小屋から引き出されて屠殺される。心臓に刃物をいれて、体中の血液を出してしまふと、その体に熱湯をかけて毛をむしり取つてしまふ。次に大きな庖丁で体をたち割る。それから人は目の廻るやうに忙はしい。

肉から取り離れた脂肪は鍋の中で煮どろかされる。それを大きな器に移して冷すこ

脂は眞白い雪のやうな塊になる。料理用・石鹼・蠟燭製造用にするのはこの脂肪である。

新しい肉は、一時の食用に残して、一部分は細くきざんで腸詰にする。大部分は塩漬にして暫く貯へる準備をする。股や肩の上等の肉は、塩漬にした上に、これを爐の上にかざして、そこで櫛やその他の香の高い鋸屑をもやす。すると肉は煙に燻されて永く貯へても腐らない。これが燻肉である。燻肉は塩肉よりも味もよく消化もよい。

豚の体は、脂肪と肉との外はあまり多くない。皮は肉と共に食用にせられるものであるが、若し皮を剥ぐとすれば、それは鞣して靴にもなり、書物の表紙にもなる。毛は多く齒ブラシの毛に使はれ、小腸は腸詰になり、骨・血液・内臓など、一つでも棄つべきものがない。

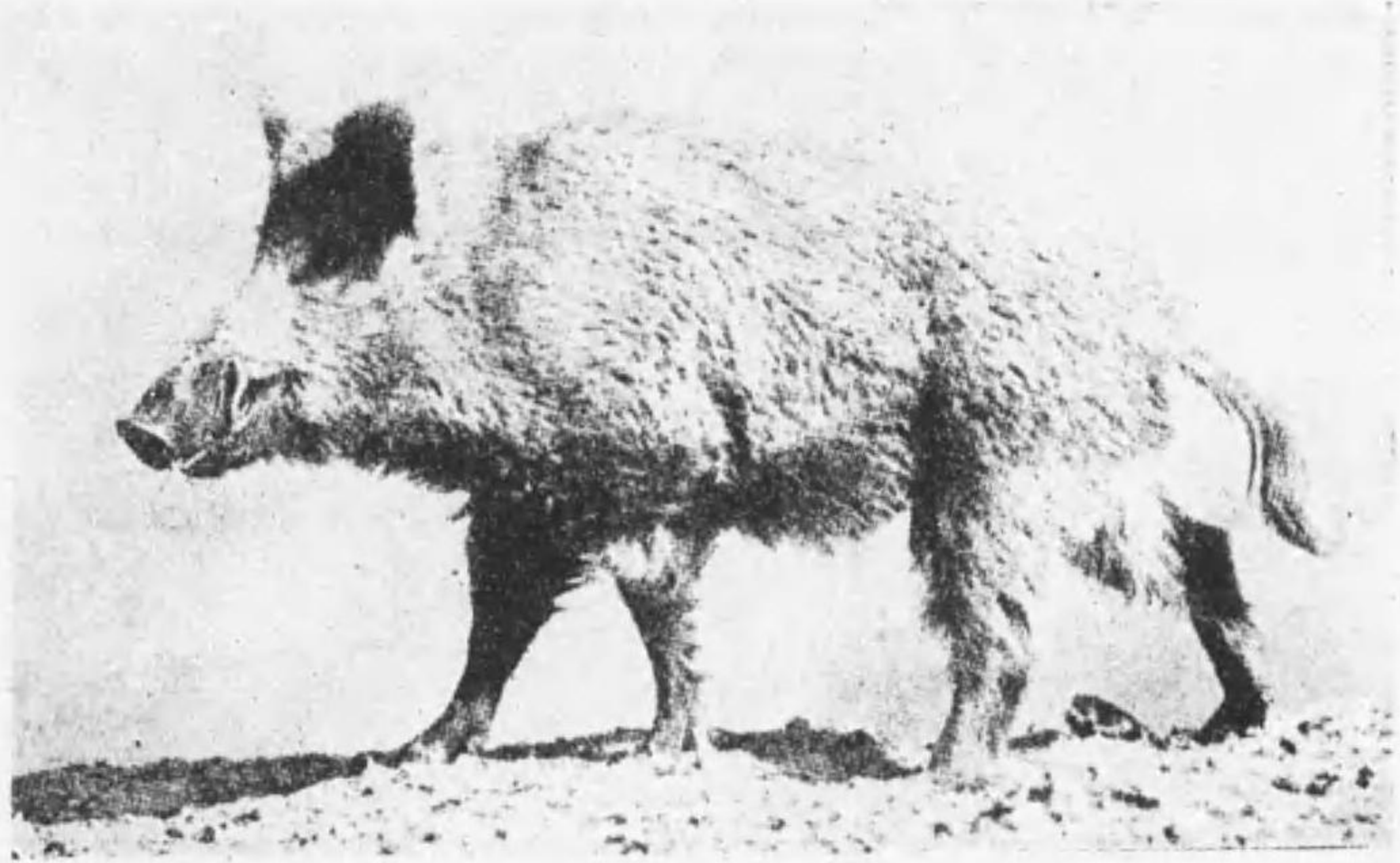
豚の体は總て人間に役に立つけれども、あの鳴き聲だけは何にもならぬ。さういへば、

『鳴き聲の役に立つ家畜があるか？』

と反問する方もあるだらうが、それはある。馬のヒヒ……ヒンといふ聲は人に勇ましい感じを與へる。牛のモーといふ聲は如何にもものごかさうに聞える。鶏の聲は時を告げる。犬のワン、猫のニャー、皆それのく効用がある。豚のヴィ〜に至つては全く用をなさないではないか。併し、聲だけが役に立たないといふのは、その他は何でも役に立つといふことになるから、豚も亦瞑すべしである。

(三) 肉のうまいものしし(猪) 犬と狼が同類であるやうに、豚と猪とはまた兄弟である。豚はアジア地方に棲んでゐた各種の猪を飼ひ馴したものである。

今残つてゐる猪は、豚のやうに従順ではない。夜森から出て来て、田畑のみみずを掘つたり、草根・木皮を食べたり、農作物を害する。恰好はチョット豚に似て、体ぢうに黒褐色の粗い毛が生えてゐる。殊に頸の背には太い長い毛が生えてゐて、怒るときには逆立つておそろしい風になる。頭は大きく、頸は短く、鼻先が光つて皮が厚



ししのゐ 圖七十九第

く、口からは牙が出てゐる。この牙は下顎の犬歯の長く伸びたもので、非常に鋭く尖つてゐる。牝の猪は牙が小さい。

猪の巢には牝と三匹から八匹ぐらゐまでの仔猪がある。生れたばかりの猪は、毛色が白くて、鹿子まだらか又は褐色の縞がある。六ヶ月ばかりでこの模様がなくなり、二年ばかりで牙がだんだん鋭くなり、三年から五年ぐらゐで一人前の猪になる。猪の寿命は大抵二十五年から三十年ぐらゐまでで、老いると牙はひごく目の方に曲つてくる。日本の内地では猪が獵獣として一番だ。その肉の美味しいことは、野獣の肉をししにくといひな

欠

欠

第四章 有蹄の野獸類

第一節 鹿とその近似の獸類

(一) 鹿の角と鹿 鹿は牛や羊とはちがつて、角をもつてゐるのは牡の方ばかりである。さうして角は全部骨の質で、牛などの角質なる趣がちがふ。牛の角は生え代るといふことはないが、鹿の角は毎年二月頃に落ちて、三四月頃に新しいのが生える。角の生える初は、皮膚に包まれて軟いものであるが、伸びてしまふと硬くなつて、全部骨の質になつてしまふ。

鹿の角はまた木の枝のやうに枝分れをしてゐる。尤も生れて一年目の鹿には角が生えず、二年目には枝のない角が生え、三年目には枝が二つ、四年目には枝が三つと、それから年を加ふる毎に一本づつの枝を増す。併し、七八年以上から後はその

枝の数は増さない。奈良公園にゐる鹿などは枝の数は四つ以上にはならない。

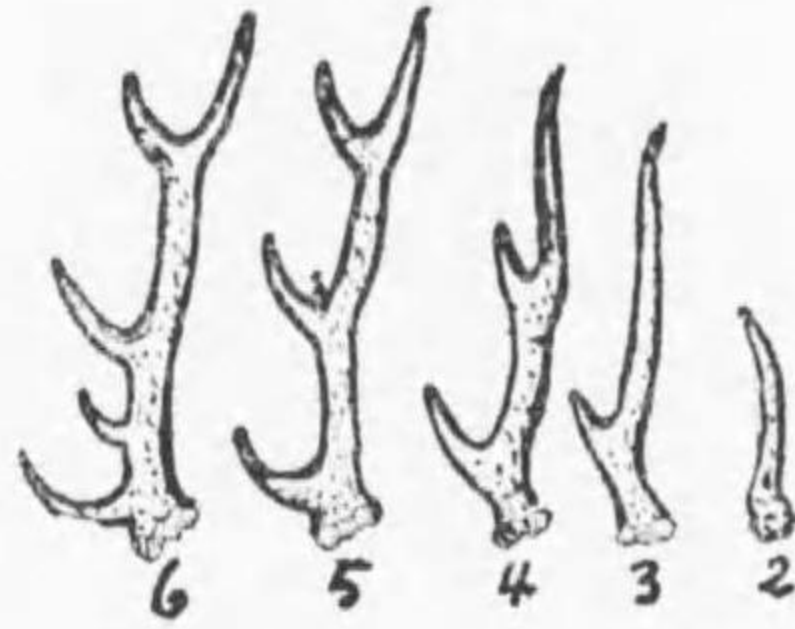
鹿のすつと以前の祖先は、角を持つてゐなかつた。それがだんく進化するに従つて、角の枝の数が増し、つひに現在のやうになつたものである。それは

鹿の化石を研究して見ればわかる。鹿の化石は古い地層に含まれてゐるものは角の枝の数が少く、新しい地層に含まれてゐるものは、その数が多



牡牝の鹿 圖九十九第

鹿の角の變化的 圖百第



鹿は角をもつてゐるのは牡だけで、牝は一生角が生えない。そこで、この角は牛の角などと多少役目が違ふと考へなければならぬ。唯外敵を防ぐだけの角ならば、牝牡共に具へてゐるのが當然であるが、牡だけ角をもつてゐるとなると、たゞ外敵を防ぐだけと考へるだけでは満足出来ない。

奈良公園には澤山の鹿が遊でゐる。丁度すつかり角が伸びて硬くなつた十月十一月頃になると、彼等の氣が荒くなつて、牡鹿同志が角突きあひをしてゐるのが見られる。中にはそれが爲めに重傷を負うものさへある。鹿がかくまでに仲間同志戦ふのは何の爲か。



鹿の園公良奈 圖一百第

これは全
く牝を得
んが爲の
争であ
る。鹿は
秋交尾し
て、翌春
子を生む
ものであ
るが、そ
の交尾を
完うせん



（産本日）か し も か 圖二百第

からだには黒褐色に白色をまじへた柔い長い毛が生えてゐるから、その毛皮は敷物としてよろしい。

右は日本産の「かもしか」について説明したのであるが、外国にはいろいろ變つた種類



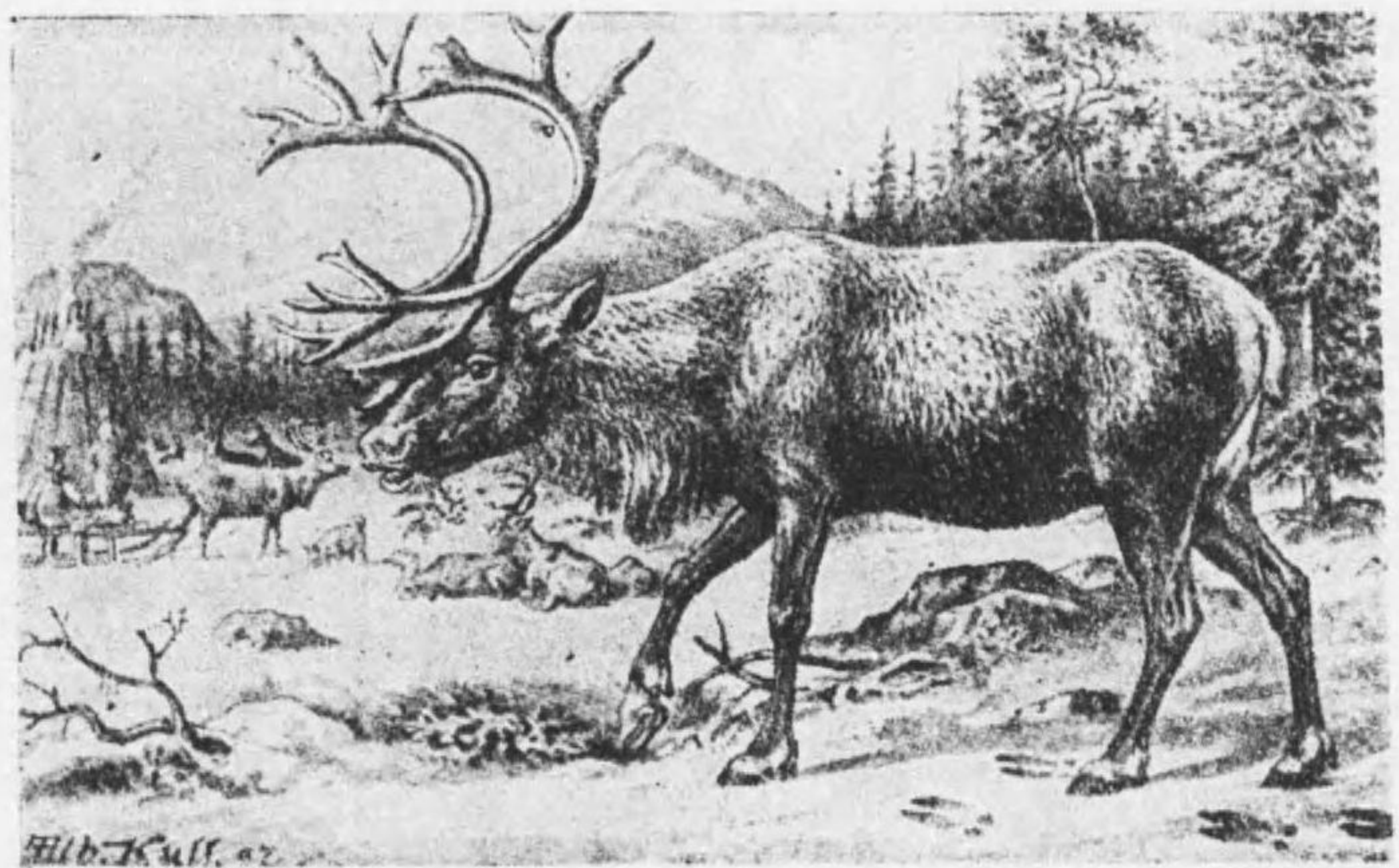
圖三百第 (産國外)種一のかしもか

がある(第百三圖)。角の形なども大分と異なつたものがある。

(三) 寒地の家畜・となかい(馴鹿) 鹿に似た獸にとなかいといふのがある。北極

地方では最も大切な家畜である。極地のラプラント地方に於ける住民はとなかいの皮で包まれた小さい小舎の中に住んでゐる。彼等は帽子・衣服・長靴・寢床・

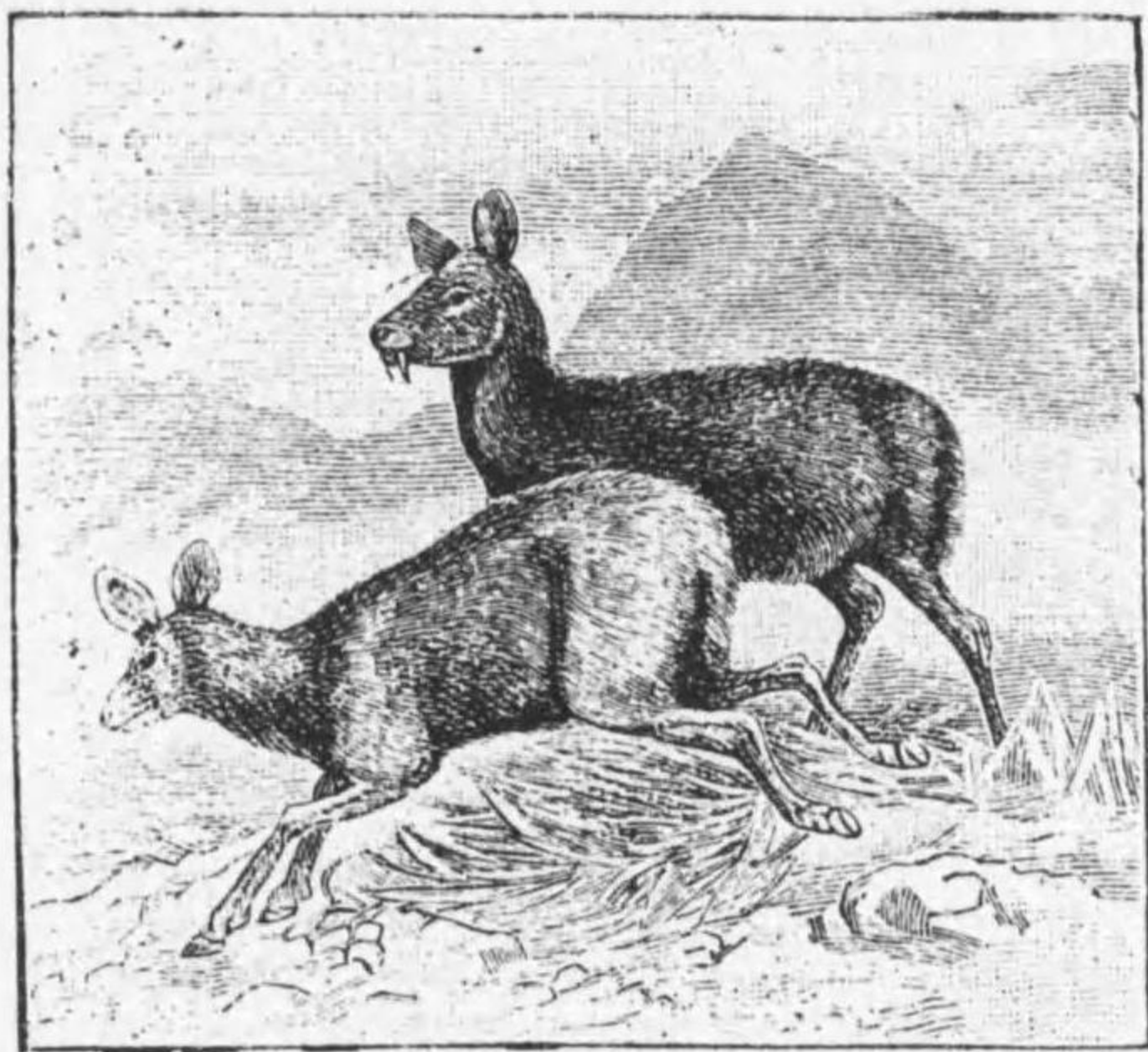
何から何までとなかいの皮で拵へる。彼等は、何所に行くにも、となかいの挽く橇に乘る。となかいは橇を挽いて一時間に九哩以上も走る。さうして又肉は彼等の食物となり、その乳は彼等の飲料となる。我が國では千島及び樺太に野生として棲んでゐる。となかいの角は鹿のに似てゐるけれども、よほど趣がちがふ。先づ第一に、牝牡共



圖四百第 いかなと

に生れて五六週後に角が生えるといふこと、次にそれが脱け代らずに、だんく生長、枝分れをして伸びるといふことが違ふ。この角は無論敵を防ぐ役をもするが、これを以て雪をかき分けて、その下に生えてゐる地衣類をたべる(第百四圖)。角の先が多少扁たくなつてゐるのが、この役目を果たすのに大に都合がよい。地衣類といふのは、うめのきごけ・はなごけなどの類である。

(四) よい香を出すじやかうじか(麝香鹿) じやかうじかは牡の腹部の後方にある皮膚から、麝香といふよい香のある液を出すので有名である。支那・シベリア・中央アジアの高山の絶壁のある所に棲



第五百五圖 鹿

む。我が樺太にも産する。鹿よりは小さく、丈の高さ二尺五寸ぐらゐである。これは鹿の名はついでゐるが、牝牡共に角をもつてゐない。唯牡だけが長い牙をもつてゐて、それが口の外まで突き出てる。

(五) 目出度いきりん(麒麟) きりんは英語でジラフといふ。支那では何か目出度いことがあると、きりんが現はれるといひ傳へてゐるが、きりんの

姿ぐらゐる壯麗なものはない。きりんは獸の中で一番丈の高いもので、頭は地上より一丈八尺の高さにある。彼等は小群を作つて、中南アフリカの廣野に棲んでゐる。大きいきりんの足は九尺ほどで、頭は殆ど六尺ほどもある。併し、胴体は七尺ばかりのもので、脊中が肩の方から臀の方に斜に傾いてゐる。きりんがこんなに丈が高いのは、

敵の近

づくの

を早く

見付け

又木の

上の方

の若葉を食べるに都合がよい。

きりんの壯麗は、そのすらりとした体格ばかりではなく、その毛色が一層美しいものにある、大体が濃い黄色で、それにポツ／＼と褐色の大きい斑紋がついてゐる。これが緑の藪どうつりあつた色は實に何ともいへない。



第六百圖 きりん

長い尾の先には、房になつて毛が生えてゐる。これはアフリカの熱帯地方に多い蠅や蛇などを追ひ拂ふ用をなす。舌がまた奇妙で、細長く一尺二三寸にも伸びてゐる。高い所にある枝の若芽をからめ取るに便利なもので、象の鼻のやうなはたらきをする。きりんの角は非常に短いもので皮がかぶつてゐる。さうしてその先には短い毛がぼさ／＼生えてゐる。蹄は無論牛や鹿と同様に二つに分れてゐる。

きりんの頭は小さい。それに大きいやさしい眼が、あまり首をまはさなくても後の方が見えるやうな場所についてゐる。又嗅ぐ力が頗る鋭敏で、よほど遠方から敵の近づくの匂ぎつける。こんな風であるから、これに近づくことは容易でない。併し、奇妙なことにはきりんは聲を出さない。きりんには鳴き聲がない。

きりんは元來温和な優しい動物である。敵に襲はれるやうな時には唯急いで逃げるだけだ。足が長いから走ることは速いけれども、彼の走り方だけは不恰好といはなければならぬ。きりんが走る時には片側づつ前後の足を一緒に進める。こんな歩き方を

する獸は他にはない。

きりんは温和な獸ではあるが、獅子や豹に襲はれて、もう逃げられないといふ時には、蹄と足の力で、敵を蹴倒す。何時も彼等に敗けてばかりゐるといふのではない

(第二圖)

アフリカの土人は落し穴を作つて、きりんを生捕にする。それ等は間もなく馴らされて動物園に送られる。動物園では馬の食べるやうなもので飼はれる。けれども、氣候の關係で、永く飼つて置くことが出来ないのは残念である。

第二節 河馬と犀と獏

(一) 口の大きいかば(河馬) 偶蹄類の不反芻類に屬する獸に河馬といふのがある。象についでの大獸で、体は重く、足は太く、体の長さが一丈四五尺もある。牛などは二本の趾だけが地に着くものであるが、河馬のは四趾共皆地に着く。だから一本一本の



第七百七圖 河馬の口

趾あしゆびについてゐる蹄ひづめはあまり大きくない。眼めと耳みみと尾おしとは極めて小さいけれども、口くちは非常に廣ひろく、開ひらくと正方形せいほうけいとなる(第七百七圖)。下顎したごに可かなり大きい牙きはが生はえてゐる。この牙きはは大きいものになると二尺にしゃくもあつて、質しつは堅かたく、象牙げうがと同様に彫刻材てうこくざい又は義齒用いれはようとなる。

肉にくは食用しょくようとなり、殊ことにその脂肪あはらくは鹽漬しほづけにして美味おいしい。河馬かはの皮膚ひふは裸はだかで、その顔かほと尾おしの先さきに、僅わずかにこは毛けが生はえてゐるだけである。アフリカの河かは又は湖みづうみなどに群棲ぐんせいし、水みづの中で遊あそぶことが好きす(第八百八圖)。晝間ちうかんは河かはや



第八百八圖 河馬

湖みづうみに潜ひそんでゐるが、夜よるになると陸りくに上あつて食しょくを求もとめる。食物しょくもつは草くさ・砂糖黍さとうきび・稗ひえなどであるから、これの多おほい地方ちほうでは農作物のうさくぶつを荒あされる。河馬かはは体からだが重おもく、足あしが短みじいために、急きふに水中すゐちゆうから陸上りくじやうに上あることは出で来きない。一たい体に臆病おくびやうな獸けもので、若もしこれを追おふと、なかく陸りくへは上あらないで、水中すゐちゆうを自由じゆうにくぐつて行く。併しかし、五ご六りく分ぶんもたてば空氣くうきを呼こ吸きふする爲ために頭あたまを水面すゐめん上じやうだに出だす。若もしこの時ときに攻こう撃げきすると彼かれは非ひ常じやうに怒おこつて荒あれまはる。静しづかに鼻はなだけを出だして呼こ吸きふする場ば合あひは、容よう易いに河馬かはを見みつけることが出で来きない。水底すゐていが浅あいと水底すゐていにわざわざおほい深ふかい穴あなを掘ほつて自じ分ぶんの隠かくれ場ば所しよを拵こしらへる。

(二) 河馬狩かはがかりの話はなし 船ふねは私わたくしをのせて静しづかにくか河馬かはにささとられ

ぬやうに操つられた。河馬がどこにその頭を出すか、吾々三人の目は水面のかすかな波紋をも見逃すまいとしてゐる。河馬が近くに頭を出した時は彼を打ち倒すべき瞬間であると共に、彼の体を立て、舟を轉覆させる瞬間でもあるから、吾等は攻守兩面に氣をくばらなければならぬ。

三十分五十分と、時は静に進むけれども、河馬は少しも姿を見せない。

『二頭打ち止めなければ断じて去らぬ。』

と、私は意地になつて、氣をゆるめずに舟を操らせてゐる。氣があせつて來た。一休みしようか、と思つた矢先、極めて舟に近く河馬は頭を現はした。さうして例のすさまじい勢で舟を攻撃して來た。待ち設けてゐたことはいへ、舟をひつくりかへされることにはばかり氣がとられて、つひに發砲の機會は去つてしまつた。

これで第一回の機會を失つてしまつたが、今度こそはと、今沈んだ河馬の頭を出すのを見張つて、銃を手にして待ち構へてゐた。一分、二分、五分、六分と過ぎてても、

河馬は頭を現はさない。水底にある時間が長ければ、頭を水面に出してゐる時間も長いわけだ、それを楽しんで待つてゐたが、豈はからんや、河馬は水の深い所をくぐつて行つて、遙か彼方の中島の方で水を吹いてゐようとは。私は殘念で堪らなかつた。

と見ると、中島の方で俄に騒ぎ始め大きな波を起してゐる。島に隠れてゐる吾等の仲間から攻撃を受けて、河馬が荒れくるつてゐるのである。私等は勢を得て、これに突貫を試みようとした時、河馬は別の方へ逃げて行くらしい。私等は舟の向をかへて河馬の行く手にまはつて見た。舟を二三町進めた時、丁度その時、一頭の河馬は跳り上るやうに、水面上に半身を現はした。距離もよいあんばいである。

私は河馬の肩を目標けて一發放つた。ズドンと一聲！ 河馬はおそろしく吼えて半身を直立させ、間もなく倒れた。彈丸は肩のねらひは外れたけれども、正しく河馬の腦を横ざまに貫ぬいたのである。

斃れた河馬は、群中の頭領であつたらしく、体の偉大な牝であつた。群中の河馬は



第九百圖 河馬狩り

血走つた眼を
向けて、吾等
の小舟の襲撃
を企てゝゐる
私の友はこ
の機を見て續
けざまに二發
も放つた。
果然、彈丸
は命中した。
舟より遠から
ざる所に、二

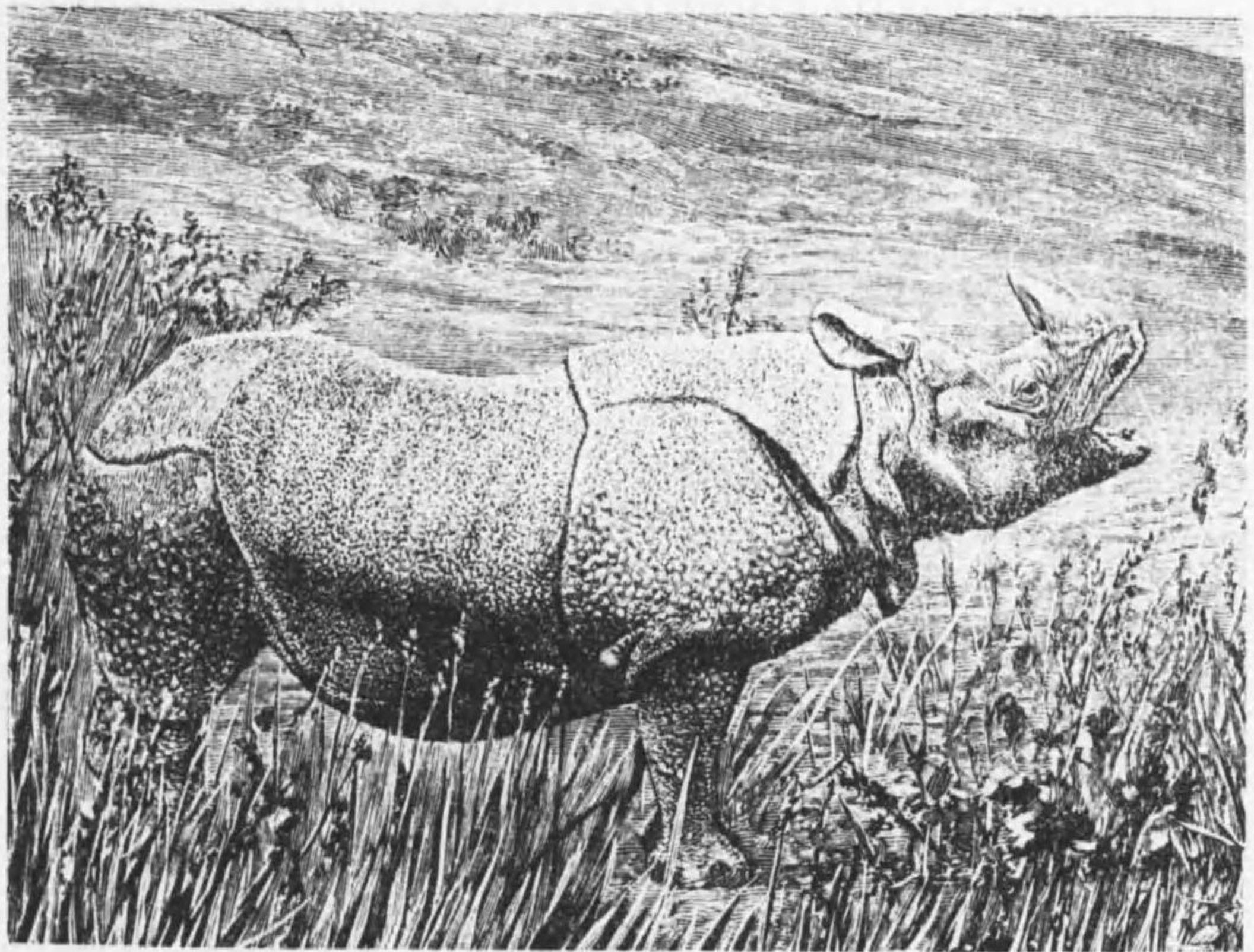
個の河馬の死体が浮び上つた。河馬群の他のものは、これに恐れをなして、何れへか姿を隠してゐる。

右は河馬狩の實狀を物語る或る人の話を引用したものである。昔はわなやおとしあなや毒矢などで、河馬を狩つたものであるが、今はかうして銃獵にかけられる。それで、その數もだんく少くなつてゐるといふ。

(三) 一本角のさい(犀) 犀も亦大きい強い獸である。犀には幾つかの種類がある。アジア産のものはアフリカ産のものより多少違つた點がある。

アフリカ産の最大の犀は、長い角のある白い種類である。これが成長すれば、体の長さは一丈八尺、胴まはりも殆ど一丈八尺、角の長さが二尺五寸もある。この角がまた妙で、二本あるものは前後に、一本のものは鼻に近く、顔の真中に立つてゐる。

犀の体は不恰好で鈍重に見える。足は太く力が強く、蹄の數は三つある。故に奇蹄類に屬する。尾は短小で、頭は特に長大である。見かけの悪い點に於ては、これに比



（産度印）いさ 圖十百第

ぶべき獸はないほどである。眼は變な所についてゐて前方を見るに困難である。けれども、聞く力と嗅ぐ力とは非常に鋭く、目を使はずとも敵の近づくのを感ずることが出来る。

アフリカ産の犀の皮膚は滑で、其所此所に少しばかりの毛が生えてゐるに過ぎない。けれども非常に厚く、近距離から放つた彈丸でなければ、小銃の彈丸は通らない。

印度産の犀も亦大きい。主として沼澤河岸の藪の多い所に棲んでゐる。角は一

本しかないが、非常に大き

ノヤ

二尺、根まはり一尺五寸といふすばらしい

ない。厚い皮の褶が出来てゐる。

を食べる。その角で根を掘

を集めて口に入れる。

鞭などに作られる。

潑なものである。

。土人はこれ

を走らせ

よなら